

## 21 (渋川)八幡宮 ((しぶかわ)はちまんぐう)

表21-1

神社名	八幡宮	所在地	渋川市渋川1
旧社格	郷社	所有者・管理者	宗教法人 八幡宮
主祭神	豊受大神命	神事	元始祭(1/3)、祈年祭(2/17)、例大祭(4/15)、夏越大祓(6/30)、例大祭(9/15)、えびす講(11/20)、感謝祭(11/23)、年越大祓(12/29)
創立・沿革	建長年間(1249~56)鎌倉の八幡宮を勧請して創建し、康元年間(1256~57)白井城主長尾景熙が社殿を造営したと伝えられる。永正年間(1504~21)埴田光重が社殿再造営、その後入沢氏があとを継いだ。寺の管理であったが、明治維新の神仏分離政策で分離し、昭和4年(1929)に郷社、渋川總鎮守に昇格している(『渋川市誌』)。		
文化財指定	渋川八幡宮本殿(県重文 昭和36年1月)、旧入澤家住宅(県重文 平成30年2月)		

位置・配置(図21-1、写21-1)

渋川市の鎮守八幡宮は、主要地方道渋川松井田線を市内より伊香保温泉に向かう緩やかに登る道沿いにあり、渋川市街地西方の台地で北側は県立渋川工業高校に接する。東西に長い境内は大変広く、北東側に琴平山と言われる小高い丘があり、北側には杉林がある。南道路から鳥居をくぐり参道を進むと、右手に社務所、石段を登り正面に社殿がある。本殿東脇に建造年代に関する石碑がある。社殿西側に出雲大社と末社が並び、南前方に神楽殿が建っている。さらに西へ階段を登り進むと、七福神巡りから本殿裏側へ進む散策コースがある。北東の丘には石造祠が数多くあり、境内各所に御神木の古い杉の大木が立っている。社務所南には堀口藍園翁の碑などが並び、東側敷地内に県重要文化財指定の旧入澤家住宅が移築復元されている。

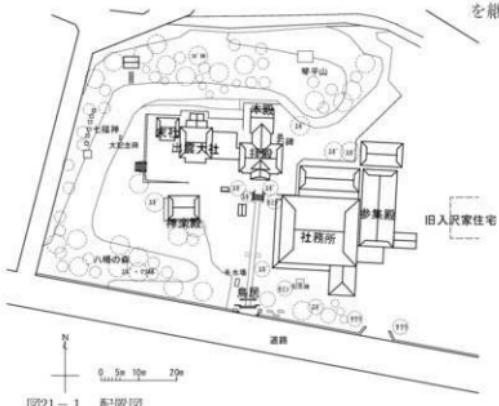


図21-1 配置図



写21-1 境内全景

由来および沿革

当宮は、建長年間(1249~1256)足利泰氏の二男義顕が渋川に館を構えた時、鎌倉の八幡宮を勧請して創建し、康元年間(1256~1257)白井城主長尾景熙が社殿を造営したと伝えられている。岩櫃城主大戸氏や甲斐の武田信玄の崇高も篤かった。永正年間(1504~1520)埴田光重が社殿再造営、その後入沢氏が跡を継いだ。江戸時代は眞光寺・如来寺の管理であつた。

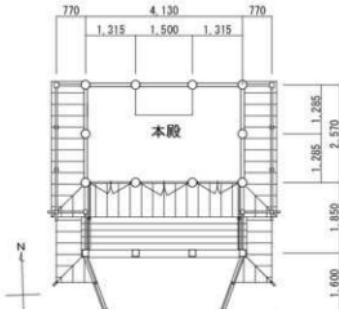


図21-2 平面図(本殿)

たが、明治維新の神仏分離政策で分離し、昭和4年（1929）に郷社、渋川總鎮守に昇格している。

### 本殿（図21-2、表21-2、写21-2~21-7）

間口3間、側面2間の身舎に3間の向拝が付く三間社流造。屋根は当初茅葺であったと思われるが、明治24年（1891）に瓦葺に、平成21年（2009）に銅板葺に改修されている。軒は二軒繁垂木、妻飾は豕又首、身舎の組物は出三斗、中備は間斗束、水引虹梁と繋ぎ虹梁は彫刻のない水平な材を架け、全体が簡素な和様の様式である。向拝の組物は中柱部分が出三斗、両端柱部分が連三斗で中備を持っていない。装飾としては、向拝中央2本の柱に付く手挟み、菊、五三桐、牡丹、沢瀉（おもだか）の植物が両面に浅く浮彫りの彫刻になっている程度である。三方に大床を回し脇障子がある。大床を支えるように絵様

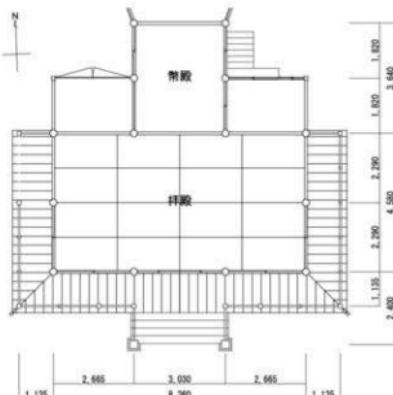


図21-3 平面図(拝殿)

### 表21-2 本殿

建造年代／根据	慶長7年(1602)/石碑	構造・形式	三間社流造(4.13m)、側面2間(2.57m)、向拝3間、銅板葺(当初茅葺)
工 匠	不明	基 础	切石
軸 部	[身舎]丸柱、貫、長押 [向拝]角柱、水引虹梁、繋ぎ虹梁、手挟	組 物	[身舎]出三斗 [向拝](中柱)出三斗 (外柱)連三斗
中 備	[身舎]間斗束	軒	飛檐打越二軒繁垂木
妻 飾	豕又首、懸魚(猪目)、六葉、降懸魚	柱 間 装 置	両開戸、板壁
縁・高欄・監障子	三方切目縁、持送板、組高欄、登高欄擬宝珠、監障子(板)、浜縁	床	拭板張
天 井	なし	須弥壇・扇子・宮殿	扇子
塗 装	素木	飾 金 物 等	なし
絵 画	内壁に彩色の痕跡	材 质	檜
彫 刻	[向拝]手挟(菊、五三桐、牡丹、沢瀉)		



写21-2 全景



写21-3 妻侧面



写21-4 大床と持送り



写21-5 向拝正面



写21-6 組物・中備



写21-7 手挟

がある持送り板がついている。内部は拭板張で中央に厨子があり、内壁には彩色の痕跡が認められる。『石造物と文化財』には「一面に桐葉文様が描かれていたことが知られる」とあるが現在は全く判らない。本殿東側に棟札のような形式で刻まれた「慶長七(1602)建立八幡宮」の石碑がある。裏面に寛永3年(1626)の刻みがあるので後世に建てたものと思われるが、装飾の少ない本殿の特徴などから建造年代の証と考える。

#### 拝殿 (図21-3、表21-3、写21-8~21-10)

『渋川市誌第六巻』に八幡宮拝殿の造営決議書と拝殿棟札の記録がある。明治31年(1898)氏子懇代人造営委員協議会が結成され、町民多数の拠金によって明治35年(1902)に拝殿と幣殿が大改修された。拝殿は入母屋造向拝1間付、幣殿は切妻造で、単独に建っていた本殿と接続され、現在の八幡宮社殿が完成した。当初は瓦葺きであったが、平成21年(2009)に本殿、幣殿、拝殿の保存修理工事を行い、銅板一字文字葺きに葺替え権現造となつた。拝殿・幣殿は檜材の素木で造られ、向拝唐破風部に鶴と松の彫刻の兎毛通、連三斗を積み上げた間の虹梁上には、八幡宮に関係する神功皇后、武内宿禰、応神天皇(誉田

別神、品陀和氣命)の彫刻が嵌め込まれている。内部は疊敷、格天井である。

#### まとめ

渋川の總鎮守の八幡宮には、境内に天満宮、出雲大社、恵比寿大黒社、発達稻荷神社、祖靈社や各町内の道祖神が集められている。また子授・安産・子育の神様としても知られている。4月15日の例大祭には渋川神楽会の太々神樂が奉納される。沿革を調べると、神仏混合時代の様子は真光寺に残る古文書に、明治維新の分離政策以降は入澤家文書に残り、時代と寺社の関係の貴重な資料になっている。本殿は、渋川市内の建造年代が明らかになっている神社の中で最も古く、江戸前期の本殿建築は県内の神社建築の中でも古い遺構であり貴重な建物である。

(林 美幸)

#### 【参考文献】

『入沢町史』入沢町自治会 平成28年

『渋川市誌 第二巻』渋川市誌編さん委員会 平成5年

『渋川市誌 第六巻』渋川市誌編さん委員会 平成7年

『渋川市の建造物』渋川市誌編さん委員会 昭和63年

『石造物と文化財』渋川市誌編さん委員会 昭和61年

『群馬県近世寺社建築緊急調査報告書』群馬県教育委員会 昭和54年

表21-3 拝殿

建造年代／根据	明治35年(1902)／棟札	構 造 ・ 形 式	正面3間(8.36m)、側面2間(4.58m)、入母屋造、平入、千鳥破風付、向拝1間軒唐破風付、銅板葺(当初瓦葺)
工 匠	[大工]棟梁 高崎市 町田又平容敬 脇棟梁 町 田角太郎 町田胸次郎 他大工7名 [彫工]熊谷町 舛田祐次郎	基 础	礎 切石
軸 部	[身合]丸柱、台輪、貫、長押 [向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁、菖蒲虹梁、手扶	組 物	[身合](軒)出組、(内部)平三斗 [向拝]二重連三斗
中 備	[身合]本蘆版 [向拝]彫刻嵌込	軒	(正面)二軒繁垂木、(側面)一軒繁垂木
妻 館	詰組、懸魚(雲)、兎毛通	柱 間 装 置	舞良戸、板壁
縁・高欄・監障子	三方切目縁、擬宝珠高欄、垂高欄、脇障子(板)	床	譽敷
天 井	格天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木	飾 金 物 等	なし
繪 画	なし	材 質	檜
彫 刻	虹梁(絵様)、木鼻(拳)、手扶(絵様)、兎毛通(鶴・松)、向拝虹梁上(神功皇后・武内宿禰・応神天皇・松)		



写21-8 全景



写21-9 向拝虹梁・兎毛通



写21-10 内部

## 22 (中村)早尾神社 ((なかむら)はやおじんじゃ)

表22-1

神社名	草薙神社	所在地	渋川市中村31
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人 早尾神社
主祭神	須佐之男命	神事	歳旦祭(1/1)、春祭(4/1)、秋祭(10/9)
創立・沿革	創建の年代は不詳であるが、社伝によると、豊城入彦命が東国平定の頃に勧請されたという。前橋市元總社の總社神社に伝わる「總社本上野國神名帳」並びに南北朝時代に刊判された「神道集」に早尾神社の記載がある。宝永7年と享保6年に京都吉田家より宗源宣旨を頂いている(神社提供資料)。		
文化財指定	早尾神社の大ケヤキ(県天記 昭和27年11月)		

### 位置・配置 (図22-1、写22-1)

JR上越線渋川駅の南東方向で、一般道と国道17号線の合流地点近くに位置する。境内南西隅の参道より、享保2年(1717)に建立された石鳥居をくぐり、石疊の参道北に進むと右手に、昭和27年11月県指定天然記念物の大樺がそびえ立っている。左手には庚申塔、稻荷神社等の石造祠が南北に並び祀られている。さらに北に進むと一対の燈籠がありその延長線上に、拝殿、幣殿、覆屋と南北に並び立ち、本殿は覆屋に鎮座している。一方東の公道より明治22年(1889)建立の石鳥居を潜ると左に水星、右に社務所が建つ。境内北の覆屋に諏訪神社、神明宮が祀られ、その北に稻見神社等の石造祠が祀られている。

### 由来および沿革

『渋川北群馬神社要覧』によると創建の年代は不詳であるが、豊城入彦命が東国平定の頃に勧請され

たと記されている。また、前橋市元總社の總社神社に伝わる「總社本上野國神名帳」(永仁6年(1298)写)に「群馬郡内之内百六十九社中、從四位上家尾明神」と資料に記録されている。その他宝永7年(1710)と享保6年(1721)に、京都吉田家、神祇道管領ト部兼敬勾当長より「正一位早尾大明神」の宗源



写22-1 境内全景



図22-1 配置図

宣旨を頂き、奉戴した折、村の氏子連の神社に対する敬意を表して、享保2年(1717)に石造製神明鳥居を建立したと資料にある。その宗源宣旨(調査時に2枚とも確認済)は現在神社の重要な文献として、また「別當延命寺覺使代」と刻まれた享和元年(1801)の金属製幣帛も貴重な遺産として保管されている。

#### 本殿 (図22-2、表22-2、写22-2~22-7)

祈禱札に「奉再興遷宮正一位早尾大明神 粿巳正徳3年」と、小屋梁に「正徳3年5月 上州群馬郡 大工棟梁：神山町・奥原善兵衛、中村・木村傳右門、有馬・青木武兵衛、有馬・岸弥市と、木引に

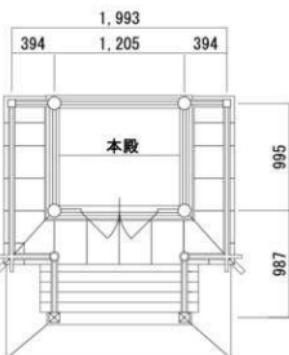


図22-2 平面図(本殿)

表22-2 本殿

建造年代／根拠	正徳3年(1713)/小屋梁墨書き、祈禱札	構造・形式	一間社流造(1.20m)、側面1間(1.05m)、向拝1間、柿葺
工 匠	[大工]棟梁：神山町・奥原善兵衛、中村・木 引傳右門、有馬・青木武兵衛、有馬・岸弥市、 木引・平川・井上仁左右門(小屋梁墨書き)	基 础	切石敷の上に床組みをし土台を廻し建てる
軸 部	[向拝]角柱(几根面)、水引虹梁、海老虹梁 [身 舎]丸柱、切目長押・内法長押、頭貫	組 物	[向拝]連三斗 [身舎]出組
中 備	[向拝]透彫蔓股 [身舎]蔓股	軒	[向拝]飛檐打越繁垂木 [身舎]二軒繁垂木
要 飾	虹梁・大瓶束・笠形。鯉懸魚	柱 間 装 置	両開板戸
縁・高欄・船障子	三方切目縁、脇障子(板)、登高欄、擬宝珠高欄、 組高欄	床	拭板
天 井	井なし	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	建物全体朱塗、黒漆(内法長押・蔓股・虹梁刻 線)、楓彩色(獅子鼻)	飾 金 物 等	垂木木口、内法長押隅、建具(隅、一文字)
繪 画	正面扉(牡丹)	材 质	漆
彫 刻	向拝桁行木鼻(獅子)、蔓股		



写22-2 全景



写22-3-1・2 西侧面・東侧面



写22-4 向拝



写22-5 海老虹梁



写22-6 小屋梁墨書き



写22-7-1・2 小屋梁墨書き・祈禱札

平川・井上仁左右門」の墨書きがある。両者共に建造年代は正徳3年(1713)となっている。その規模は一間社流造(1.20m)、側面1間(1.05m)、向拝1間、柿葺で、切石敷に床組みをして土台を廻し建築してある。向拝軸部は角柱(几帳面)に連三斗を組み、中備に透彫幕股を付、唐草絵様の渦が菱形で、若草が短い水引虹梁を設けている。身舎軸部は丸柱で切目縁を三方に廻し、切目・内法長押を付、頭貫で固めている。組物は出組で、中備に透彫りの幕股を設けている。脇障子は板張りで、柱間装置は樋板両開戸に牡丹の絵画が描かれている。向拝の軒は飛檻打越二軒繁垂木で、身舎は二軒繁垂木としている。塗装は向拝・身舎共に朱塗の基調で仕上げ、内法長押・水引虹梁・幕股・海老虹梁の絵様に黒漆塗、木鼻彫刻は極彩色となっている。妻飾りに虹梁上大瓶束と笈形を設け、破風拝みに蕉懸魚で飾っている。

### まとめ

水引虹梁の唐草絵様の渦が菱形木瓜で比較的良く巻き若葉が短く、身舎と繋ぐ海老虹梁は太く反りも少なくほぼ水平に掛けられ、背が高い幕股を設け、裝飾が無い壁面、簡素な板脇障子の意匠等と、小屋梁の墨書き及び祈禱札の建立年代が正徳3年(1713)と一致しているので、本殿の建立年代を正徳3年(1713)とする。本殿と共に宗源宣旨及び金属製幣帛も群馬県内の18世紀前期の建築物及び文献を考察する大変重要な遺物のため、大切に保存していく必要がある。

(藤井宏典)

### 【参考文献】

- 『渋川北群馬神社要覧』群馬県神社庁渋川北群馬支部 平成25年
- 『渋川市の建造物』渋川市発行 昭和63年
- 『群馬県近世社寺建築緊急調査報告書』群馬県教育委員会 発行 昭和53年
- 『神社提供資料』平成19年

## 23 (半田)早尾神社 ((はんだ)はやおじんじゃ)

表23-1

神社名	草尾神社	所在地	渋川市半田1439
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人 早尾神社
主祭神	須佐之男命	神事	新年祭、七草祭(1/6)、春祭(4/第2日曜)、夏越祓(7/31)、秋祭・宵祭(10/第2日曜)、新穀感謝祭(12/第2日曜)
創立・沿革	創建年代不詳。社伝によると、半田の劍城の守り神として、日吉大社の摂社である早尾神社を勧請したという。全国同一社名13社の内の1社。享保11年(1726)神社道管領ト部家より「正一位捷夫大明神」の宗教宣言を受けられた(「渋川北群馬神社要覧」)。		
文化財指定	半田の早尾神社本殿(市重文 昭和45年9月)		

### 位置・配置 (図23-1、写23-1)

渋川市街地東南の利根川右岸に位置し、国道17号を市街地から南下し西進、利根川支流の午王川を渡ると右側に鎮座している。社殿は境内右側に配し、北側、西側は一段高くなっている。参道正面の寛永2年(1747)に建てられた石鳥居を潜ると左手に弁天池、更に石畳を進むと狛犬、正面に拝殿を見る。拝殿に続き鉄骨造ガラス張りの覆屋中に本堂が鎮座する。境内北側、西側の一段高くなっている所は、天明3年(1783)浅間の大噴火に伴う土石流を盛ったと

言われ、多くの神々が合祀されている。周囲は鬱蒼とした樹木に覆われ、社殿西には樹齢500年といわれている「早尾の夫婦ケヤキ」がある。

### 由来および沿革

当社は村の鎮守様として祭られていた。社伝によると、半田の劍城の鬼門の守り神として日吉大社の摂社である早尾神社を勧請したという。全国同一神



写23-1 境内全景

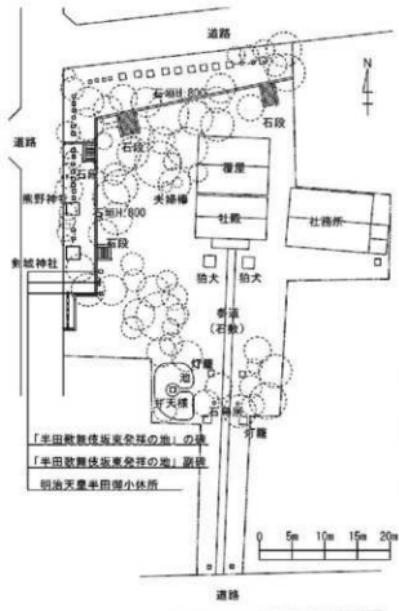


図23-1 配置図

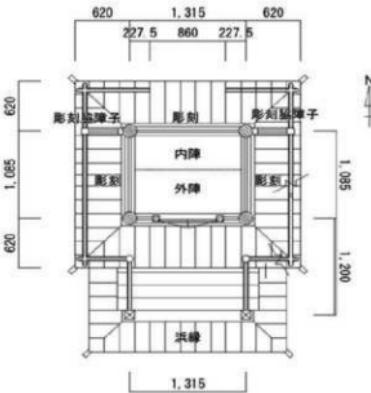


図23-2 平面図(本殿)

社名を持つ十三社の内の一社である。享保10年(1725)神祇道管領ト部家より「正一位早尾大明神」の宗源宣旨を受ける。石垣が積まれた一段高い場所には明治以降、半田の地の熊野神社や諏訪神社等合祀された十一社の諸社が鎮座する。合祀された石祠

群は樹木に囲われ祀られている。この地は半田歌舞伎発祥の地でもある。

ほんてん  
本殿 (図23-2、表23-2、写23-2~23-8)

本殿は文化14年(1817)に建造。群馬郡青梨子邑の

表23-2 本殿

建造年代／根据	文化14年(1817)／棟札	構造・形式	一間社流造(1.31m)、側面1間(1.08m)、千鳥破風付、向拝1間付、柿葺、鉄骨造覆屋
工 匠	[大工] 棟梁：桜井丹後正藤原知義、山口利根 七積富、阿久沢宗左衛門舜易	基 础	[身合] 切石數の上に龜旗 [向拝] 切石
輪 部	[身合] 彫刻柱、地覆・腰・縁・切目・内法是押・木鼻・[向拝] 角柱(几帳面、地紋彫)、水引虹梁、木鼻	組 物	[身合] 三手先、尾垂木 [向拝] 二連出三斗連三斗出三斗一体型(二重肘木・積上変形)内側出三斗出菖蒲栱を受る。手挾
中 備	[身合] 彫刻 [向拝] 彫刻	軒	飛燕打越二軒繁垂木
妻 飾	二重虹梁、虹梁間彫刻、燕懸魚、兔毛通	柱 間 装 置	棟唐戸、板壁の上に彫刻
緑・高欄・脇障子	四方切目縁、腰組・三手先、脇障子(彫刻)、昇高欄、擬宝珠高欄、組高欄	床	拭板
天 井	竿縁天井	須弥壇・眉子・宮殿	なし
塗 装	素木	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	櫛
彫 刻	向拝木鼻(獅子・狛)、中備(龍)兎毛通(松に鶴)、浜床下(波に鰐)、海老虹梁(龍)、手挾(葡萄・松)、身舎柱(龍)、身舎正面臨(竹林に鶴)、身舎中檼(松と鷹)、木鼻(獅子)、尾垂木(龍)、隅組物(蟹)、左腰(神楽の舞)、左壁(坂田の金時)、左右脇障子(鹿とモミジ)、背面腰(花車の舞姿)、背面壁(周の文王)、右腰(崩揚げの図)、右壁(韓信の股くぐり)、右妻飾(烏子天狗)、他(松・梅・波)		



写23-2 正面



写23-3 正面



写23-4 虹梁・木鼻・唐破風



写24-5 海老虹梁・手挾



写23-6 左脇羽目(坂田の金時と鬼征伐)



写23-7 裏脇羽目(周の文王)



写23-8 右脇羽目(韓信の股くぐり)

櫻井丹後正藤原知義、半田の山口利根七積富の両宮大工と阿久沢宗左衛門舜易の名前が棟札に記されている。正面1間(1.31m)、側面1間(1.08m)とする。

向拝を唐破風、正面に千鳥破風付の柿葺一間社流造、平入である。素木造りで正面軒は二軒繁垂木、向拝に1対の手挟を備える。向拝柱・地覆・腰・縁・切目・内法長押に地紋彫、木鼻、中備、海老虹梁、手挟、柱、腰、壁面、妻飾、脇障子のいたる所に彫刻が施されている。特に身舎柱は彫刻と一緒に造られ、妻飾も虹梁を二重に架け彫刻で飾り、彫刻作品と言っても過言ではない。向拝木鼻(獅子・猿)、中備(龍)、兎毛通(松に鶴)、浜床下(波に鯉)、海老虹梁(龍)、手挟(葡萄・松)、身舎柱(龍)、身舎正面脇(竹林に鶏)、身舎中備(松と鷹)、木鼻(獅子)、尾垂木(龍)、隅組物(蟹)、左腰(神楽の舞)、左壁(坂田の金時の鬼征伐)、左右脇障子(鹿とモミジ)、背面腰(花車の舞姿)、背面壁(周の文王)、右腰(鳳揚図)下段は神楽の舞、

右壁(韓信の股くぐり)、右妻飾り(烏子天狗)、他(松・梅・波)である。彫刻の解説文に彫刻師は小林源八とあるが確証はない。本殿は市の重要文化財である。

### まとめ

当社は身舎と向拝の繋梁まで透し彫にするなど建物全体が建築と言うより彫刻作品と言っても過言ではない。本社は江戸時代後期の特徴として彫刻を多用していることから棟札通り文化14年(1817)の建造と考えられ、江戸後期の特徴として彫刻を多用した貴重な装飾建築である。

(須田容一)

### 【参考文献】

- 『渋川市の建造物』渋川市 昭和63年
- 第62回伊勢神宮式年遷宮記念「渋川北群馬神社要覧」群馬県神社庁渋川北群馬支部 平成25年
- 「半田早尾神社と境内の神々」並木喜三與 平成18年

## 25 (行幸田)甲波宿禰神社 ((みゆきだ)かわすくねじんじや)

表25-1

神社名	甲波宿禰神社	所在地	渋川市行幸田673
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人 甲波宿禰神社
主祭神	速秋津彦命、速秋津姫命	神事	歳日祭(1/1)、春祭(4/17に近い日曜日)、紙園祭(7/15)、秋祭(10/9)
創立・沿革	『神明考証』より賀農真命と大水口宿禰命の2神を社名由来とし、創建は宝永4年(1707)と伝わる。ただし、『渋川市誌2』に文安年間(1444~)甲波宿禰神社(川島)から分社の記載がある。今回の調査にて、神社所有の古書写に元和元年(1622)「湯上村に神定仕候」の文章があり、この時の分社とも考えられる。宗源宣旨は宝永4年(1707)が確認出来る。		
文化財指定	行幸田の獅子舞(市重無民 昭和50年1月)		

### 位置・配置 (図25-1、写25-1)

神社は市内南部豊秋地区の山近くに鎮座している。県道高崎渋川線バイパスの「三国橋南」の信号を北に入り旧三国街道となる。農産物直売所の交差点を左に曲がり右、山側の鎮守の森が境内である。東側道路に面する境内は鳥居を過ぎると、右に神輿殿、左に手水舎と2階建ての社務所がある。一段高い石垣上の敷地に社殿、脇に文庫蔵(行幸田文庫)

を配置している。背後には水沢まで続く杉林を背負う。鳥居脇の県内に他例のない2基の「家形石祠」は、獅子舞と一緒に旧諏訪神社から移したと伝わる。明治期に村内の12社を合祀した時の末社石造物を多く残している。



写25-1 境内全景

### 由来および沿革

『神明考証』により賀農真命と大水口宿禰命の2神を社名由来とし、創建宝永4年(1707)と伝わる。ただし、『渋川市誌2』に文安年間(1444~1449)甲波宿禰神社(川島)から分社の記載がある。また今回の調査にて、神社所有の古書写に元和8年(1622)「川島村甲波宿禰神社を湯上村に神定仕候 村中氏神や」の文章があり、この時の分社とも考えられる。なお、他に嘉永6年(1853)に焼失した前社殿の寛保2年(1742)上棟の記載の古書写を有する。宗源宣旨は宝永4年(1707)のものは確認できたが、享保8年(1723)は外箱のみを残す。市重要無形民俗文化財指定の「行幸田の獅子舞」は、毎年春祭りに舞われ、昭和55年(1980)に伊勢神宮に奉納した記念石碑がある。獅子舞は長年、氏子の長男が伝えていたが、近年は育成も止まっている。

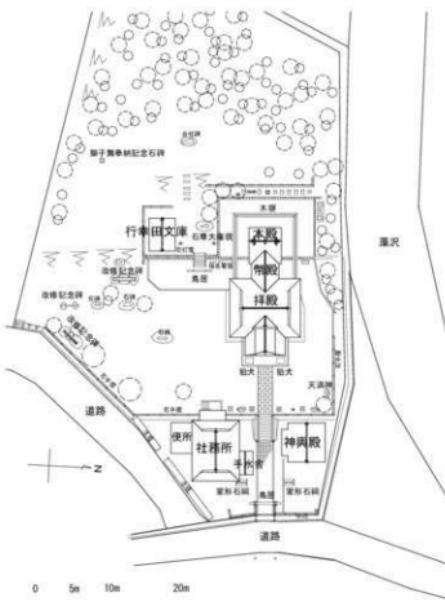


図25-1 配置図

## 本殿 (図25-2、表25-2、写25-2~25-7)

本殿は棟に千木と整魚木3本を置く一間社流造、平入、銅板葺、正面向拝を唐破風とする。軒は二軒繁垂木、向拝は打越二軒繁垂木とする。向拝角柱に連三斗、菖蒲桁、彫刻木鼻、透彫彫刻の水引虹梁と海老紅梁、幕板に代わる飛竜の彫刻、向拝柱と幣殿柱に掛かる2対の籠彫影刻手挾、唐破風の兎ノ毛通がある。身舎は切石基壇、基礎上に土台を置き、丸柱に背側面は三手先尾垂木付、3段の板支輪を組む。妻に二重虹梁、二手先母屋受、彫刻束 (渦) を置き、破風は板懸魚を付ける。正面扉脇、背側面胴

目、脇障子に故事の彫刻を配する。四方に縁と組高欄を回し、下部に縁受の三手先と籠彫影刻が四隅と各面中央に配されている。向拝柱、各部長押にも刻線彫が飾られ、彫刻の多さや虹梁の唐草絵様から、19世紀後期の建物の特徴をよく残している。

建造年は拝殿小屋裏の棟札が移動出来ないため、「渋川市の建造物」記載3枚の棟札を参考とする。元治元年(1864)11月上棟である。各板が職種別となっており、1枚目に大工棟梁當國室田(現高崎市) 清水谷掃部藤原貞曉他2名と彫工 武州本庄(現埼玉県本庄市) 武正上総之介源義春、2枚目に

表25-2 本殿

建造年代／根据	元治元年(1864)／棟札	構造・形式	一間社流造(1.82m)、側面1間(1.65m)、向拝1間軒唐破風付 銅板葺き(当初柿葺)
工 匠	[大工]棟梁 室田 水谷掃部藤原貞曉 [彫工]武州本庄 武正上総之介源義春	基 础	切石布基礎・龜腹
軸 部	[身舎]丸柱、土台、頭貫、縁長押、内法長押 [向拝]角柱、水引虹梁、海老紅梁、手挾	組 物	[身舎]三手先尾垂木付 [腰]三手先 [向拝]連三斗、菖蒲桁
中 備	[身舎]正面を除く三方中央に三手先 [向拝]二手先上指折	軒	[身舎]二軒繁垂木 [向拝]打越二軒繁垂木
妻 飾	[妻壁]二重虹梁大瓶束彫刻付・彫刻支輪 [破風]猪目懸魚	柱 間 装 置	(正面)棟唐戸 (側背面)板壁
幕・高欄・脇障子	[身舎]四方縁、組高欄付、板脇障子丸柱 [向拝]登り高欄 握宝珠付	床	拭板(正面浜床)
天 井	棹縁天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木	飾 金 物 等	棟唐戸金物
繪 画	なし	材 質	檜
彫 刻	木鼻(獅子)、向拝水引虹梁(波・小鳥)、上部(飛竜)、正面扉脇(竹・虎)、海老虹梁(波・鯉)、手挾(菊・松)、軒支輪(波・扇、牡丹、菊・渦)、背側面胴羽目(故事)、脇障子(故事)、腰組物(松)、兎ノ毛通(鶴)		



写25-2 向拝正面



写25-3 向拝組物



写25-4 本殿正面



写25-5 海老虹梁



写25-6 本殿背側面



写25-7 背面彫刻

湯上村大工小野里政吉朝賀他 2 名と杣方（製材）湯上村石井幸吉高直、なお後見に越後國三郡大積村（新潟県長岡市）山田巳藏及び石工 湯上村石井作蔵真清、3 枚目は柿師（屋根葺）山子田（現様東村）岡部佐木喜倍他 5 名の名前がある。『渋川市誌 5』記載の行幸田文庫所蔵「文久元年(1861) 9 月湯上村甲波宿禰神社殿修復請負書」には社殿の規模、仕様、請負者、工事予定年月日が記載され、拝殿建方は文久 2 年(1862) 8 月下旬、本殿と廊下（幣殿）は文久 3 年(1863) 3 月の予定であった。修復は幣殿天井の棟札に大正 11 年(1922) 10 月が第四回吹替と書かれているので、建造以後 4 回屋根葺替を行っている。屋根を銅板葺改修した記録は、工事許可書類、竣工写真、記念石碑等から昭和 11~14 年(1936~1939) の日付が確認出来る。その後昭和 51 年(1976) に塗装など大規模な修復工事がされ今日に至っている。

#### 幣殿（図 25-2、表 25-3、写 25-8~25-10）

建物は両下造銅板葺である。軒は二軒繁垂木、角柱上出組、彫刻木鼻、縁長押、内法長押を配する。拝殿側上部は拝殿外部と同じ出組と彫刻板支輪がある。天井は小屋表となっている。

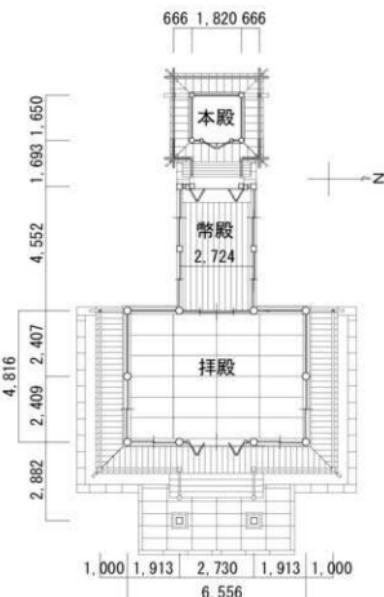


図 25-2 平面図

表 25-3 幣殿

建造年代／根拠	元治元年(1864)／棟札	構造・形式	正面 1 間(2.72m)、側面 2 間(4.55m)、両下造 銅板葺き(当初柿葺)
工 匠	[大工] 棟梁 室田 水谷掃部 藤原貞曉 [彫工] 武州本庄 武正上総之介源義春	基 础	外周 切石布基礎敷土台
軸 部	角柱、縁長押、内法長押	組 物	二軒繁垂木
中 備	なし	軒 間 装 置	板戸、板壁
妻 飾	なし	床	拭板
縁・高欄・脇障子	なし	須弥壇・扇子・宮殿	なし
天 井	小屋裏表	飾 金 物 等	(外部)長押釘隠し
塗 装	素木	材 質	檜
彫 刻	なし		
	木鼻(獅子)、板支輪(鶴)		



写 25-8 社殿南側面



写 25-9 幣殿側面



写 25-10 内部拝殿面

幣殿の築造は拝殿との取合いかから同年と判断出来る。ただ「修復請負書」の添付図と推察される絵図は幣殿と向拝間に壁が無く、変更されたと考える。

#### 拝殿 (図25-2、表25-4、写25-11~25-16)

拝殿は入母屋造、平入、銅板葺で正面に千鳥破風、向拝を唐破風とする。軒は二軒繁垂木、向拝は打越二軒繁垂木である。向拝角柱に連三斗、菖蒲桁、彫刻木鼻、彫刻水引虹梁、籠彫彫刻の持送と海老向陵、蔓股に代わる故事の透彫彫刻、籠彫彫刻の

手挟を置き、唐破風の兎ノ毛通、千鳥破風妻壁に軒受、虹梁、大束、東跨端(渦)、破風に彫刻懸魚を配する。身舎は切石基壇、基礎に土台を置く。丸柱に地・内法長押を回し、四方に二手先と木鼻を配し、正面繫虹梁、中備に二手先を置き、木鼻を付ける。軒は板支輪、妻壁は母屋受出組、虹梁、大瓶束、東跨端(渦)、破風に懸魚を置く。三方に大縁を回し、透彫彫刻脇障子を設ける。内部は各柱に出組を置き、幣殿入り口両脇柱には木鼻(獅子)を付ける。天井は鏡板張格天井である。向拝柱にも刻線

表25-4 拝殿

建造年代／根拠	元治元年(1864)／棟札	構 造 ・ 形 式	正面3間(6.55m)、側面2間(4.81m)、入母屋造、平入、正面千鳥破風付、向拝1間唐破風付、銅板葺(当初柿葺)
工 匠	[大工]棟梁 室田 水谷掃部藤原貞暁 [彫工]武州本庄 武正上総之介源義春	基 础	外周 切石布基礎敷土台
軸 部	[身舎]丸柱、縁長押、内法長押 [向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁、手挟	組 物	[身舎]二手先 [向拝]連三斗、菖蒲桁
中 備	[身舎]正面中央二手先	軒	[身舎]二軒繁垂木 [向拝]打越二軒繁垂木
妻 飾	[社殿](妻壁)母屋受出組、虹梁、大瓶束、東跨端(破風)懸魚	柱 間 裝 置	[身舎]板壁、両折桟唐戸
幕・高欄・脇障子	三方縁・擬宝珠高欄・彫刻脇障子	床	疊敷
天 井	[社殿]鏡板張格天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木	飾 金 物 等	内法長押(釘頭・隅金物)、唐破風(飾金物)、向拝柱(根巻金物)
絵 画	なし	材 質	櫛、杉、松
彫 刻	[外部]木鼻(獅子・猿)、水引虹梁上(故事)、海老虹梁(龍)、手挟(松・鷹・孔雀)、持送(波・鯉)、軒板支輪(鶴)、千鳥破風懸魚(飛竜)、唐破風兎ノ毛通(龍・天女・唐子)、脇障子(牡丹・滝)、虹梁(菊水唐草)、向拝柱(透彫彫刻) [内部]幣殿入り口両脇柱上部木鼻(獅子)、虹梁(渦唐草)		



写25-11 拝殿正面



写25-12 向拝組物



写25-13 海老虹梁・手挟



写25-14 幣殿正面



写25-15 柱上木鼻



写25-16 内部幣殿面

彫が飾られ、拝殿にもかかわらず装飾化が進んでいる。本殿と同じ19世紀後期の建物である。

建造は本殿と同じ棟札より、元治元年(1864)11月である。改修は3棟同時に行われている。社殿小屋裏には建造時棟札3枚の他に、1枚の屋根吹替棟札であり、「大工 棟梁小山巳之吉他7名」が記されている。

### まとめ

本社殿の造営年月日は棟札と書類で確定している。建物は多様な彫刻で装飾化され、本殿腰組まで装飾化

されていることなど、19世紀後期の特徴を良く残した建物である。境内の「行幸田文庫」には内容未確認の古書が多く収納されており、新たな社歴の発見が期待される。

(貝殻博子)

### 【参考文献】

『渋川市誌 第2巻』渋川市 平成5年

『渋川市誌 第5巻』渋川市 平成元年

『渋川市の建造物』渋川市 昭和63年

『渋川北群馬神社要覧』群馬県神社庁渋川北群馬支部 平成25年

## 28 木曾三社神社（きそさんしゃじんじゃ）

表28-1

神社名	木曾三社神社	所在地	渋川市北橘町下箱田甲1
旧社格	県社	所有者・管理者	宗教法人 木曾三社神社
主祭神	須佐之男命、彦火出見命、宇氣母智命	神事	歳旦祭(1/1)、祈年祭(2/第3日曜日)、例祭(4/15)、夏越祭(6/第4日曜日)、例祭(10/15)、新嘗祭(11/第3日曜日)、大祓祭(12/第2日曜日)
創立・沿革	寿永3年(1184)木曾義仲の遺臣達がこの地に逃れ、義仲が崇拝していた信濃(長野県)の延喜式内社である岡田・沙田・阿礼の三社を勧請して創建したと言われている(「渋川北群馬神社要覧」)。		
文化財指定	文書(神主免許状)(市重文 昭和55年10月)		

### 位置・配置 (図28-1、写28-1)

赤城山南西麓末端、利根川上流の左岸に位置する。社地東道路より一の鳥居、二の鳥居を過ぎると下り参道になり、三の鳥居を潜りさらに下ると左に社務所、右に湧水地からの水が滝となり流れ込む池がある。太鼓橋を渡ると左に手水舎、献殿があり、正面階段を上ると拝殿、幣殿、本殿が東南を軸に並ぶ。社殿右奥に稻荷神社と不動堂があり、間を抜け杉木立の小道を進むと右にシダ類の湿地帯、さらに進むと湧水地があり水神様が祀られている。社地は鬱蒼とした木立に囲まれ、セキショウやワカナシダの群落があり、群馬県の緑地環境保全地域に指定されている。

### 由来および沿革

「渋川北群馬神社要覧」によると寿永3年(1184)木曾義仲の遺臣達がこの地に逃れ、義仲が崇拝していた信濃(長野県)の延喜式内社である岡田・沙田・阿礼の三社を勧請して創建したと伝わる。



写28-1 境内全景

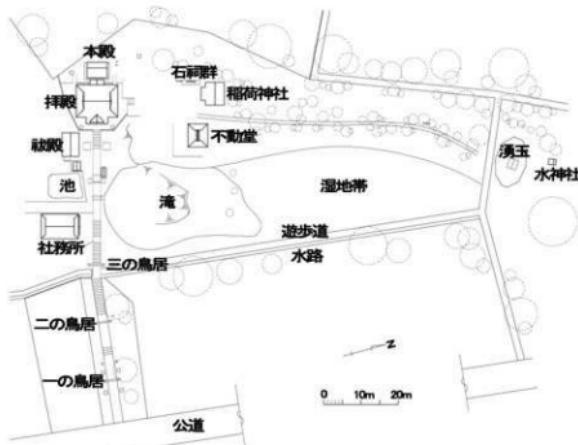


図28-1 配置図

## 本殿（図28-2、表28-2、写28-2～28-7）

本殿は2枚の棟札により、寛政6年(1794)の再建である。1枚目の棟札表に、詳細は不明だが、前橋源方町棟梁・堤丹後照重裏・[大工]棟梁：群馬郡新井村 大工棟梁 松岡出雲正増浮（花押）、門弟脇棟梁・大河原茂七」、他2人の大工名が記されている。2枚目の棟札は、建造年は同じであり、御大工・藤原家次他2名が記されている。藤原家次は、前橋市光巣寺 秋元家御廟所の天保6年(1835)屋根

替え工事棟札に「奉一字葺替檜皮大工藤原家次」とあり、屋根葺大工と考えられる。

建物規模は、正面1間（1.66m）、側面1間（1.45m）の一間社流造鋼板葺で、三方に組高欄付で一枚板の博縁を廻らし、脇障子を立て、正面に木階五級を付す。軸部身舎では自然石加工の亀腹の上に地覆を廻し、胡麻殼抜の丸柱を立て、地覆・腰・縁・切目・内法長押・頭貫で固める。向拝柱は地紋彫・几帳面の角柱を立て、虹梁で繋ぐ。身舎組物は三手

表28-2 本殿

建造年代／根拠	寛政6年(1794)／棟札2枚	構造・形式	一間社流造(1.66m)、側面1間(1.45m)、向拝1間、銅板葺
工 匠	1枚目表・[大工]棟梁：前橋源方町 堤丹後照重裏・[大工]棟梁：群馬郡新井村 松岡出雲正増浮 [門弟]脇棟梁：大河原茂七、清水栄次、萩原与吉 2枚目・[御大工]武州忍皿尾村 藤原家次、岩田源七、八助	基 础	[身舎]自然石加工亀腹 [向拝]礎石
軸 部	[身舎]丸柱(胡麻殼抜)、地覆・腰・縁・切目・内法長押・頭貫 [向拝]柱(地紋彫・几帳面)、水引虹梁、海老虹梁	組 物	[身舎]三手先 [向拝]出三斗、肘木上16斗
中 備	[身舎]彫刻 [向拝]彫刻、彫刻支輪(虹梁間)	軒	二軒垂垂木
妻 飾	二重虹梁大瓶束、手挟み(一对)、燕懸魚	柱 間 装 置	彫刻板戸両開、板壁
縁・高欄・脇障子	三方博縁(1枚板)、登高欄、組高欄、彫刻脇障子	床	拭板敷
天 井	板張	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木、朱塗(木鼻)、極彩色(脇障子・支輪・手挟)	飾 金 物 等	扉：隅、一文字
繪 画	なし	材 質	檜
彫 刻	[身舎]扉・胴羽目(波と雲)、支輪(波)、脇障子(鯉の滝巻)、腰組(波) [向拝]木鼻：正面(獅子)・側面(狼)、手挟(雲)		



写28-2 正面



写28-3 正面・左侧面



写28-4 左海老虹梁・手挟



写28-5 身舎左侧面腰組



写28-6 身舎左侧面胴羽目



写28-7 身舎左侧面妻飾

先、向拝は出三斗、中備は彫刻とし、海老虹梁は反りが大きく、手挟は波の彫刻一对を設ける。柱間裝置は、身舎正面に彫刻を嵌め込んだ框戸で、三方胴羽目に彫刻を施す。軒は二軒繁垂木で、妻飾りは二重虹梁大瓶束、虹梁間と支輪は彫刻とし、蕪懸魚で飾る。

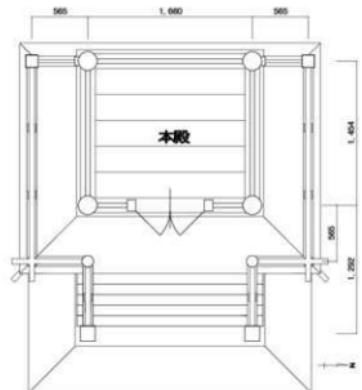


図28-2 平面図(本殿)

## 拝殿 (図28-3、表28-3、写28-8~28-11)

今回の調査で、盜難を免れた拝殿脇障子一枚が見つかり、彫刻に岸幸作の刻銘があった。幸作は、天保14年(1843)生、明治3年(1870)没で、三代目・石原常八主利の三男、岸家に婿入りした(『戸塚本町

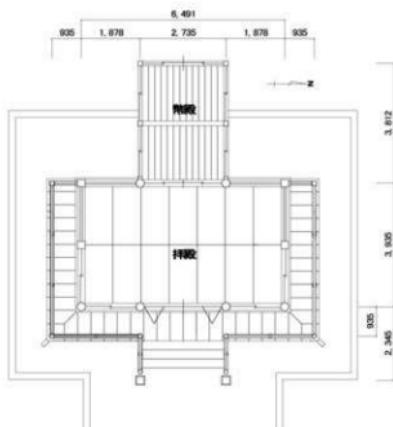


図28-3 平面図(拝殿・幣殿)

表28-3 拝殿

建造年代／根柢	19世紀中期／建築様式	構造・形式	三間社入母屋造(6,49m)、側面2間(3,93m)、平入、向拝一間唐破風付、銅板葺
工 匠	[大工]不明 [彫工]岸幸作	基 础	[身舎]礎石 [向拝]礎石、礎盤
軸 部	[身舎]丸柱、地覆、縁・内法長押、頭貫 [向拝]角柱(地紋彫、几帳面)、水引虹梁、海老虹梁、手挟み(一对)	組 物	[身舎]出三斗 [向拝]二連出三斗一体型(五斗)
中 備	[身舎]平三斗 [向拝]彫刻	軒	地垂木打越二軒半繋垂木
妻 飾	二重虹梁大瓶束、菱形、三つ花懸魚	柱 間 装 置	棟唐戸、硝子障子戸、舞良戸、板壁
締・高欄・脇障子	三方切目縁、登高欄、擬宝珠高欄、脇障子(板)	床	[身舎]敷巻 [向拝]コンクリート
天 井	格天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木	飾 金 物 等	破風銅板巻
絵 画	なし	材 質	檜、杉
彫 刻	[身舎]木鼻(獅子) [向拝]木鼻(獅子)、中備(神功皇后と武内宿禰)、手挟(松と鷹)、鬼毛通(鳳凰)		



写28-8 正面



写28-9 向拝正面



写28-10・11 右脇障子・刻銘



表28-4 幣殿

建造年代／根据	19世紀中期／建築様式	構造・形式	切妻造(2.73m)、側面(3.81m)、銅板葺
工 匠	[大工]不明	基 础	礎石
軸 部	角柱	組 物	なし
中 備	なし	軒	一軒疊垂木
妻 飾	なし	柱 間 裝 置	アルミ硝子障子引違4本建、アルミ硝子障子引違窓、堅羽目板壁
縁・高欄・脇障子	なし	床	板張
天 井	舟底天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	桧、杉
彫 刻	なし		



写28-12 側面



写28-13 入口



写28-14 内部

誌】。拝殿は正面3間(6.49m)、側面2間(3.93m)、入母屋造銅板瓦棒葺で、三方に擬宝珠高欄付の切目縁を廻らし、板脇障子を立て、正面に木階3級を付す。内部は疊敷、格天井とする。軸部身舎では、礎石に丸柱を立て、地覆、縁・内法長押、頭貫で固め、向拝柱は礎盤の上に地紋彫・几帳面の角柱を立て虹梁で繋ぐ。身舎組物は出三斗、中備は平三斗とし、向拝は二連出三斗一体型、内側出三斗で菖蒲桁を受ける。中備は彫刻とし、一対の手挾を設け、海老虹梁は反りが大きい。柱間装置は、正面棟唐戸、側面は舞良戸、幣殿入口は硝子障子戸とし、壁は板張りとする。軒は地垂木打越二軒半繁垂木で、妻飾りは二重虹梁大瓶束笠形付きとし、三つ花懸魚で飾る。

#### 八丈人 幣殿（図28-3、表28-4、写28-12～28-14）

拝殿・幣殿は、脇障子彫刻の彫物師刻銘と各資料から、慶応3年(1867)頃の建造と推定される。幣殿は礎石に角柱を立て頭繫で押さえる。内部は近年改造成され、床は板張りで前後二分し、奥が一段高くなっている。天井は板張りの舟底天井である。

#### まとめ

下り参道の木曾三社神社は、東南に向き、拝殿、

幣殿、本殿と同一軸に建てられている。現在でも滾々と湧出する湧水地内に鎮座し、境内に11社の末社が祀られている。本殿は棟札により、寛政6年(1794)の再建で、正面扉や胴羽目、腰部に湧水を思わせる素木の波や雲の彫刻、脇障子・手挾に極彩色の彫刻が施されている。拝殿は脇障子の刻銘により、慶応3年(1867)頃の再建と推定され、向拝木鼻は正側面一体の獅子が素木で彫られている。本殿は18世紀後期の彩色から素木彫刻へ移行する時期の建築として、拝殿は一体に彫られた木鼻から19世紀中期以降の特徴を持つ建築として、近世寺社を理解する上で高い価値を有している。

(難波伸男)

#### 【参考文献】

- 『北橋村誌』北橋村誌編纂委員会 昭和50年
- 『藪塚本町誌 上巻』藪塚本町誌編纂室 平成3年
- 『沼田市史別巻2 沼田の建造物』沼田市史編さん委員会 平成11年
- 『平元元年度文化財調査報告書 第20集』前橋市教育委員会 文化財保護課 平成2年
- 『前橋藩松平家記録 40巻』前橋市立図書館 平成19年
- 『上野国神社明細帳 4』群馬県文化事業振興会 平成13年
- 『渋川北群馬神社要覽』群馬県神社庁渋川北群馬支部 平成25年
- 『木曾三社神社と木曾三柱神社』渋川市文化財調査委員会 今井郁男

## 29 (湯中子)大山祇神社 [(ゆなかご)おおやまづみじんじゃ]

表29-1

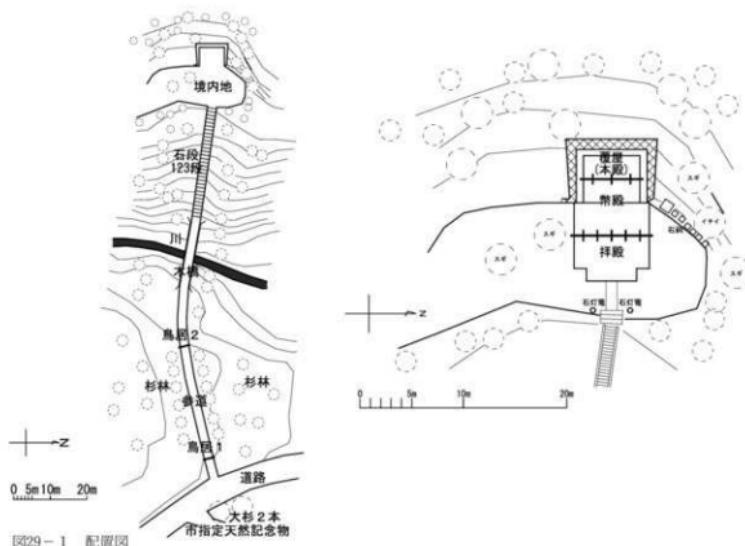
神社名	大山祇神社	所在地	渋川市伊香保町湯中子940
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人 大山祇神社
主祭神	大山津見命	神事	例大祭(9/18)
創立・沿革	由緒不明。勸請は江戸初期と考えられる。古くは十二様と呼ばれ、山の安全を守る山の神である。昔は二の鳥居に小石がたくさんにお供えしてあり、山に入る人々が無事を祈ったまじないと言われている。一の鳥居に「正一位十二大明神」享保18年(1733)の刻みが有る(『伊香保誌』)。		
文化財指定	湯中子大山祇神社本殿(市重文 昭和55年9月)、湯中子大山祇神社大杉(市天記 昭和55年9月)		

### 位置・配置 (図29-1、写29-1)

主要地方道渋川松井田線の伊香保温泉街を過ぎ、徳富蘆花記念文学館先のカーブを右折し、林道源訪長坂線を進むと湯中子地区に入る。林道沿い東側に参道入口の市天然記念物に指定されている樹齢700年以上の大杉が2本立ち目印になる。伊香保温泉より北西、湯中子地区の西側山中に位置する。道路西側杉林内を歩いて進み鳥居を二つくり、西沢川の木橋を渡り、123段の石段を登ると正面に社殿がある。拝殿脇には数基の石祠が並び、本殿は覆屋内にある。参道途中の鎮守の森は、昭和20年(1945)頃は樹齢数百年の杉・松等であったが大杉を残し伐採され、現在はその後植林されたものである。



写29-1 境内全景



## 由来および沿革

由緒は不明であるが『伊香保誌』によると、勧請は江戸初期とされている。古くは「十二様」と呼ばれ、山の安全を守る山の神である。昔は二の鳥居に小石がたくさん供えてあり、山に入る人々が無事を祈ったまじないと言われている。

ほんてん  
本殿（図29-2、表29-2、写29-2～29-7）

本殿は、正面と側面が三尺程度の一間社流造、正面に千鳥破風を付け、向拝に軒唐破風を設けている。小規模なものであるが、隨所に面白い彫刻が施されている。向拝水引虹梁上に連三斗の組物があり、菖蒲桁を受け、幕股には力士の顔が彫ってある。虹梁上部分は、力士がしこを踏む彫刻（力神）

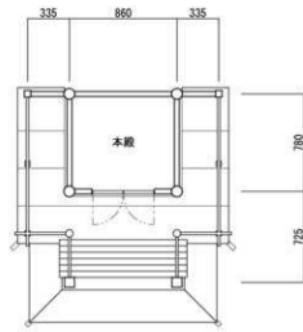


図29-2 平面図(本殿)

## 表29-2 本殿

建造年代／根据	18世紀後期／建築様式	構 造 ・ 形 式	一間社流造(0.86m)、側面1間(0.78m)、千鳥破風付、向拝1間軒唐破風付、柿葺
工 匠	不明	基 础	なし
軸 部	〔身合〕丸柱・長押・〔向拝〕角柱、水引虹梁・海老虹梁・菖蒲桁、手挾	組 物	〔身合〕出組・〔向拝〕連三斗
中 備	本幕股(彫刻)	軒	二軒垂木・板支輪(彫刻)
妻 飾	二重虹梁大瓶束・懸魚(蕉)鍛付・降懸魚	柱 間 装 置	棟唐戸・板壁
縁・高欄・脇障子	大床三方・組高欄・登高欄(擬宝珠)・脇障子(彫刻)・浜縁三方	床	拭板張
天 井	竿縁	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	黒・朱塗・極彩色(彫刻)	飾 金 物 等	長押: 銅金具、棟唐戸: 金具
絵 画	なし	材 質	不明
彫 刻	〔身合〕虹梁(絵様)、板支輪(水・蓮)、幕股(鳥)、妻飾(鶴)、懸魚(瓢箪)、脇障子(鯉の滝巻)・〔向拝〕水引・海老虹梁(絵様)、手挾(牡丹)、木鼻(獅子・拳)、幕股(力士顔)、唐破風棟木受(力神)		



写29-2 正面



写29-3 侧面



写29-4 妻飾



写29-5 海老虹梁・手挾



写29-6 向拝木鼻・組物・中備



写29-7 身合中備・板支輪

で唐破風の棟木を支えている。木鼻も側面に獅子が彫られ、この四つの彫刻が、正面から見るとバランスよく配置されている。海老虹梁は大きく反り、手挟は彫刻板レリーフの牡丹、脇障子は鯉の滝登りの彫刻である。彫刻は極彩色、他は黒・朱塗の色彩が施されている。棟札は確認できないが、海老虹梁の反りが大きく、装飾彫刻は多様であるが、棟股の彫刻は面内に納まり、手挟も透彫りまでは進んでいないことなどから、建造年代は18世紀後期と推定される。一の鳥居には「正一位十二大明神」享保18年(1733)の刻みがある。

### まとめ

現在は湯中子地区の鎮守として信仰されている当神社は、杉林の山中にひっそりと建っている。小規模であるが、他にない彫刻が見られる本殿である。明治44年(1911)に拝殿と共に造られた神明造形式の覆屋(3.63m×2.78m)内にあるため状態も良い。明治13年(1880)の神社明細帳には間口4間半、奥行3間、萱葺の神楽殿が記載されているが、現在は残っていない。

(林 美幸)

### 【参考文献】

『伊香保誌』伊香保町教育委員会 昭和45年

『上野国神社明細帳』群馬県文化事業振興会 平成15年

## 30 (中郷)菅原神社 ((なかごう)すがわらじんじゃ)

表30-1

神社名	菅原神社	所在地	渋川市中郷1733
旧社格	無格社	所有者・管理者	宗教法人 菅原神社
主祭神	菅原道真公	神事	春祭(1月第3日曜日)、秋祭(10月第3日曜日)
創立・沿革	創立は不詳。元亀2年(1571)甲斐の武田信玄の武将真田幸隆が白井城(時の城主長尾景景)を攻略した際に当神社社殿が兵火に遭い焼失したと伝えられている。現在の本殿は、貞享3年(1686)東隣にあった別当寺の天台宗長泉寺住職亮順により再築された(境内石碑)。		
文化財指定	菅原神社本殿(市重文 昭和61年5月)		

位置・配置 (図30-1、写30-1)

渋川市の旧子持村中郷田尻地区にあり、国道353号線鰐沢バイパスと並行する一本北の道に面し、杉林の鎮守の杜南面傾斜地に位置する。隣地養殖池に

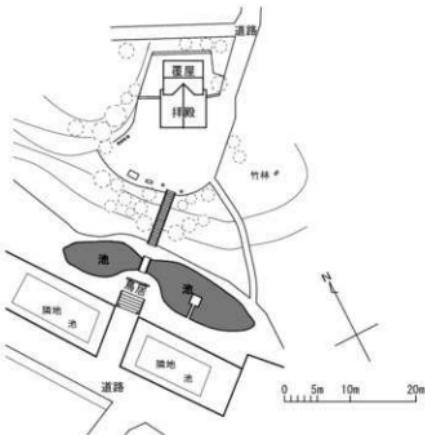


図30-1 配置図



写30-1 境内全景

挟まれた参道入口に鳥居が立ち、その先に湧き水で満たされた池があり神橋が架かっている。池の中には境内社もあり、透き通った水中には大きな鯉が泳いでいる。石段を上がった境内地に、妻入りの赤い拝殿が建ち、拝殿からつながる覆屋内に本殿がある。西側脇には数基の石祠が並び、山上周辺には石碑が多数ある。東側竹林内には中郷小学校発祥の地の石碑もある。裏手杉の木の間の道を進むとこんなにやくの煙が広がる台地に抜けれる。

### 由来および沿革

境内の石碑には、創立は不詳であるが、元亀2年(1571)甲斐の武田信玄の武将真田幸隆が白井城(時の城主長尾景景)を攻略した際に、当神社社殿が兵火に遭い焼失したと伝えられ。現在の本殿は貞享3年(1686)東隣にあった別当寺の天台宗長泉寺の住職亮順により再築されたと記されている。

### 本殿 (図30-2、表30-2、写30-2~30-7)

和様唐様折衷様式の一間社流造の本殿には、貞享3年(1686)7月建立、狩野作左門、鈴木重兵衛、狩野次衛門の大工名と建立者長泉寺住職亮順の名前が記された棟札が残されている。向拝正面の幕板に菅原道真公と縁の深い牛の透彫り彫刻がある。虹梁の唐草絵様の渦は円に近く巻き込み、若葉は簡素で短い。幕板は透かし彫であるが火頭曲線がはっきりし、海老虹梁の反りは比較的少ない。組物は身舎向拝とも連三斗で妻側に卷斗が2個あり長い桁を受け、妻飾の大瓶束の上にも出三斗があり長い棟木を受けている。組物・虹梁・頭貫・幕板等極彩色で塗られている。側面・背面の壁にも僅かに彩色が残っているが、何が描かれているかわからない。昭和43年(1968)の『子持村史』には「明治の中葉の頃全村

の人神道驚五郎なる者父子にて社殿の彫刻に彩色を施す」とある。虹梁・組物・中備は残っているが壁画は風化が激しく、全ての彩色がこの時のものであるか判断は難しい。本殿の建造年代は、虹梁の絵様や海老虹梁の特徴から、棟札の通り貞享3年(1686)とする。棟札にある長泉寺は現在なく民有地になってしまっている。明治13年(1880)の神社明細帳には、本社間口6尺、奥行6尺、屋根板葺、上家、間口2間3尺、奥行2間、屋根茅葺、拝殿間口3間、奥行2間、屋根葺葺とあり、現在の建物とほぼ同規模であるが、氏子長老の話では、現在の拝殿・覆屋は昭和22~23年(1947~1948)頃に造られたと言われている。

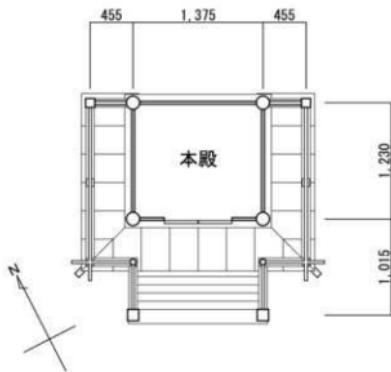


図30-2 平面図(本殿)

表30-2 本殿

建造年代／根柢	貞享3年(1686)／棟札	構 造 ・ 形 式	一間社流造(1.37m)、側面1間(1.23m)、向拝1間、柿葺
工 匠	[大工]狩野左門、鈴木重兵衛、狩野次衛門(棟札)	基 础	切石、自然石併用
軸 部	[身舎]丸柱、長押、貫 [向拝]角柱、水引虹梁、組物 海老虹梁	組 物	[身舎]連三斗 [向拝]連三斗
中 備	[身舎]本蔭股(彫刻) [向拝]本蔭股(彫刻)	軒	二軒繁垂木
妻 飾	二重虹梁大瓶束、懸魚(猪目)、六葉、降懸魚	柱 間 装 置	瓶板戸、板壁(餘)
縁・高欄・船障子	大床三方、浜床、組高欄、登高欄擬宝珠、脇障子(板餘)	床	拭板張
天 井	竿縁	須弥壇、扇子、宮殿	なし
塗 装	朱塗(柱、長押) 楠彩色(虹梁、組物、彫刻)	飾 金 物 等	垂木木口金具
絵 画	侧面・背面壁、脇障子(竹)	材 贊	不明
彫 刻	[身舎]蔭股(梅・松・梅・鳥・花) [向拝]木鼻(獅子)、蔭股(牛と松)、虹梁(絵様、錫杖形)		



写30-2 正面



写30-3 背面



写30-4 妻飾



写30-5 向拝



写30-6 海老虹梁、木鼻



写30-7 身舎中備

### まとめ

本建物は300年以上前の江戸中期に建造された旧子持村地区では最古の神社である。改造が少なく、時代の様式の指標となる大変貴重なものである。地元では「田尻の天神様」「天満宮」と呼ばれ、学問の神様として崇敬され、合格祈願に訪れる人がいる。拝殿内には赤城村深山（現渋川市赤城町深山）の須田由親門人が明治14年(1881)に奉納した算額がある。

(林 美幸)

### 【参考文献】

『子持村誌』追録編 子持村誌編さん室 平成18年  
『子持村の民家と社寺建築』上毛歴史建築研究所、子持村  
誌編纂室 昭和57年  
『子持村史』子持村教育委員会 昭和43年

## 31 (津久田)赤城神社 [(つくだ)あかぎじんじゃ]

表31-1

神社名	赤城神社	所在地	渋川市赤城町津久田甲358
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人 赤城神社
主祭神	豊城入彦命	神事	年始祭(1/1)、節分祭(2/3)、春祭(4/15)、祇園祭(8/1)、秋祭(10/9)、新嘗祭(11/23)
創立・沿革	豊城入彦命を主祭神とした赤城神社を大同元年赤城大沼の辺に分祭勧請し奉る。それを大同4年(809)に佃に分祭祀したが、建仁元年(1201)に天地異変があり、社地を改めて鏡の森に奉遷した。これが津久田赤城神社の祖となった。安永3年(1774)社屋を改築し、明治元年(1868)華頂宮折願の社となる(『敷島村誌』「渋川北群馬神社要覧」)。		
文化財指定	津久田の赤城神社本殿(市重文 平成19年1月)、津久田鏡の森歌舞伎舞台(市重文 昭和58年1月)、赤城護国神社社殿(市重文 昭和49年7月)		

位置・配置 (図31-1、写31-1)

当神社は、JR敷島駅より北東に位置する神社である。南の一般道から砂利道の参道に進むと鬱蒼とした木立の中に赤い鳥居がある。それを潜るとやや広い境内に出る。正面に拝殿、北西隅に鏡の森歌舞伎舞台が建ち、その右隣に八坂神社、蔵、旧奉安殿の赤城護国神社そして石造祠が東西並列に祀ってある。

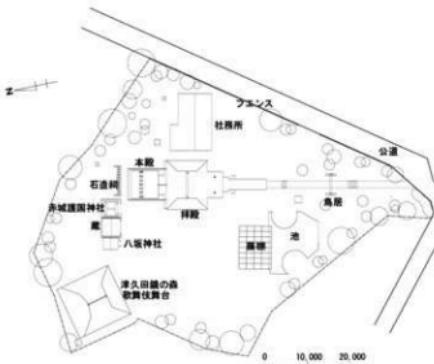


図31-1 配置図



写31-1 境内全景

る。境内の南には藤棚、その南に神池と杉・桜の緑地帯が広がっている。

### 由来および沿革

『敷島村誌』は、豊城入彦命を祀った大同の赤城神社を大同4年(809)に分祭し、佃(現在は津久田)の地に移し、建仁元年(1201)に鏡の森に奉遷し祀ったのが現在の津久田赤城神社の祖とする。康元の年(1256~1257)、長尾氏が白井城築城のおり東北鎮護社として篤く保護したとある。更に寛政の始めに疫病が蔓延し、長尾氏が当社相殿に大己貴命、少彦名命の神等を配祀し疫病の退散を祈願し、安永3年(1774)に郷民の寄進に依り社殿を造営、鳥居を建立、明治15年(1882)に社殿の屋根を銅板瓦葺に改築したとある。その後昭和32年(1957)に社殿を全焼し、本殿が延焼したが、昭和37年(1962)に再建され、平成17年(2005)に修復整備し現代に至る。

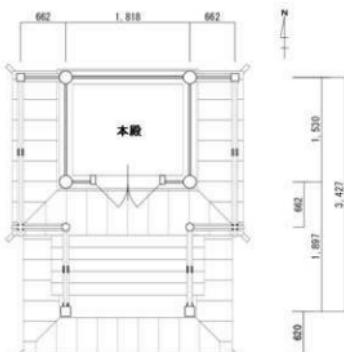


図31-2 平面図(本殿)

## 本殿（図31-2、表31-2、写31-2～31-7）

本殿の棟札は不明であるが、市指定重要文化財銘板によると、平成17年に修復整備した時、外した彫刻の裏に「上州上田沢村 彫刻師 関口文次郎 安永3年午ノ7月□□ 弟子 助次良 徳次良 善次良 傳次良 順主佐次兵衛也」の墨書きが見つかったと記されている。本調査時に被災交換した木鼻を調査した時、木鼻の取付面に「安永3年11月本殿木鼻」の墨書きが確認できた。その本殿は一間社流造（1.81m）、側面1間（1.53m）、向拝1間、銅板葺である。向拝軸部は角柱、組物は出三斗、彫刻は後

補の獅子・狛を付、虹梁中備に板幕股を設けている。身舎軸部は丸柱で、切目縁を三方に廻し、切目・腰、内法長押を付、頭貫で固めている。腰部の中備に出組、柱間装置は桟唐戸に恵比須・大黒の彫刻を飾り、胴羽目と支輪・脇障子は全て極彩色の彫刻を嵌め、脇障子の脇柱に地紋彫りが施されている。妻飾は鰐付蕉懸魚、降り懸魚に特徴のある蝶が飾られている。

## 歌舞伎舞台（図31-3、表31-3、写31-8～31-10）

棟札は不明であるが、歌舞伎舞台は、鏡の森歌舞

表31-2 本殿

建造年代／根拠	安永3年(1774)／建築様式・木鼻墨書き、木鼻墨書き、赤城神社由来記	構造・形式	一間社流造(1.81m)、側面1間(1.53m)、向拝1間、銅板葺
工 匠	[大工]：不明 [彫工]：上田沢村 関口文次郎、弟子：助次良、徳次良、善次良、傳次良	基 础	[向拝]・[身舎]基壇の上龜腹
軸 部	[向拝]角柱、几帳面、水引虹梁、海老虹梁 [身舎]丸柱、地覆・腰・縁・内法長押、手扶	組 物	[向拝]三手先、木鼻 [身舎]二手先 [腰組]出組
中 備	[身舎]本幕股 [向拝]板幕股	軒	[向拝]二軒飛檐打越繁垂木、支輪(彫刻、彩色) [身舎]二軒繁垂木
妻 飾	二重虹梁大瓶束、笠形、虹梁間・板幕股・支輪(彫刻 波)、鰐付蕉懸魚、降り懸魚(蝶)	柱 間 装 置	[身舎]両開桟唐戸、壁：板壁
縁・高欄・脇障子	三方切目縁、登高欄、擬宝珠高欄、粗高欄、脇障子(彫刻、彩色)	床	板張
天 井	[身舎内部]板打上	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	朱塗、極彩色(手扶、木鼻、幕股、彫刻)	飾 金 物 等	破風板：拝、破風尻金具、垂木：木口金具、
繪 画	なし	材 質 櫛	
彫 刻	木鼻[獅子・狛]、正面扉(恵比須・大黒)、原臨(鯉の滝登り)、胴羽目(七福神)、脇障子(捨得・寒山)、手扶(桐花に鳳凰)、隅組物(蟹)、板支輪(波に菊花)、大瓶束結縛(獅子)、懸魚(蕉懸魚)、下懸魚(菊花、蝶)		



写31-2 全景



写31-3 侧面



写31-4 正面



写31-5 向拝幕股



写31-6 向拝彫刻



写31-7 被災木鼻

伎舞台と称され、間口5間、側面5間半、入母屋造の固定式農村歌舞伎舞台である。舞台の特徴は、平舞台、二重、三重から成り、二重舞台に左右にガントウを設け、上演時には二重舞台が左右のガントウに移動し舞台の拡張が図られる機構となっている。三重舞台は平舞台より85cm高く、上演時には奥壁が外に倒され、奥深く見せる違見機構となる。

### まとめ

本殿の建造年代は身舎彫刻から出た墨書、被災した木鼻の墨書並びに『敷島村誌』の資料等から再建年代が一致するため、本殿は安永3年(1774)に再建

されたと推定する。鏡の森歌舞伎舞台は下座、下下座と觀客の小屋掛けを組み立てれば直ぐにでも開演できる状態に保存されている。『赤城村誌』によると建造年代は「舞屋木数覚之帳」に明治2年(1869)に建造されたとあり、19世紀前期から後期にかけて、この地方に発達した農村歌舞伎舞台の機構と「農村歌舞伎舞台の研究」資料等から、この歌舞伎舞台の建造年代を19世紀中期と推定する。敷島村には鏡の森歌舞伎舞台の他に、上の森歌舞伎舞台(人形舞台)と同じ機構を持ち現存している。また近隣には上三原田の歌舞伎舞台も現存し、この年代に発達した県内の農村歌舞伎舞台を考察する大変重要な遺構である。

(藤井宏典)

### 【参考文献】

- 『敷島村誌』群馬県勢多郡敷島村誌編纂委員会 昭和34年
- 『赤城村誌』赤城村誌編纂委員会 平成元年
- 『農村歌舞伎舞台の研究』松崎茂 昭和42年
- 『渋川北群馬神社要覧』群馬県神社庁渋川北群馬支部 平成25年

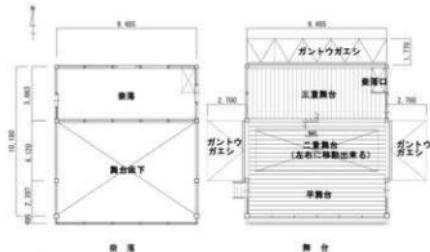


図31-3 平面図(歌舞伎舞台)

表31-3 歌舞伎舞台

建造年代／根柢	19世紀中期	構造・形式	正面(9.48m)、側面(10.18m)、入母屋造、鉄板葺、妻入、船檣造
工 匠	[大工]不明	基 础	礎石
軸 部	角柱	組 物	なし
中 備	なし	軒	一軒疊垂木
妻 鈔	木造格子	柱 間 裝 置	ガントウ含め板戸、壁：板張り
縁・高欄・脇障子	なし	床	板張
天 井	平舞台・三重舞台：小屋裏表し、二重舞台竿 緑天井	須弥壇・厨子・宮殿	なし
塗 装	なし	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	杉、松
彫 刻	なし		



写31-8 正面



写31-9 侧面ガントウガエシ



写31-10 内部

## 32 七社神社〔しちしゃじんじゃ〕

表32-1

神社名	七社神社	所在地	渋川市小野子2158
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人 七社神社
主祭神	天御中主神	神事	節分祭(2/2)、例祭(4/3に近い日曜)、秋祭(9/29に近い日曜)
創立・沿革	大同元年(806)創建。七社大明神と号し後に七社神社と称する。京より配流された小野金善が帰る際、村人に贈ったとされる神像を守り神とし、西の沢・富士山・三田野・如意庵・金善寺・甲里・本宮の7カ所に神社や石室を造り祀った。その後明治40年(1907)に6カ所の七社神社と大山祇神社・神明宮・源訪神社・菅原神社が合祀された(『小野上村誌』)。		
文化財指定	上小野子獅子舞(市重無民 昭和51年5月)		

## 位置・配置(図32-1、写32-1)

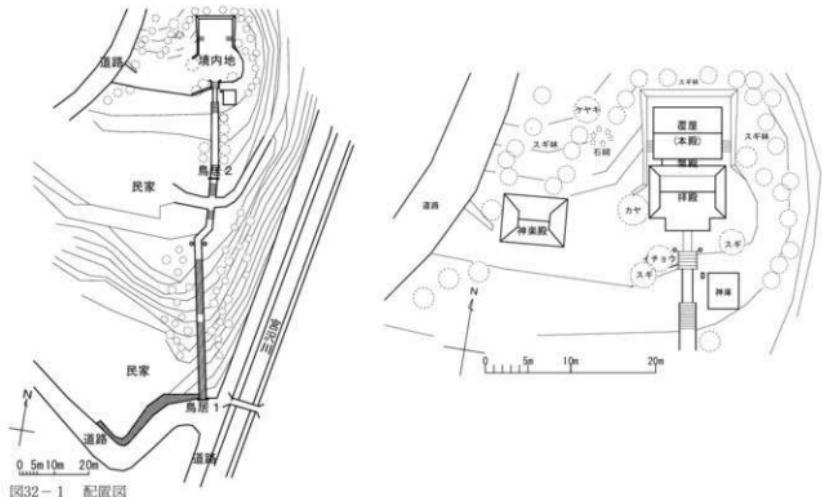
国道353号線を中之条方面に向かい道の駅「おのこ」の手前、JRの高架下を右折し入った宇宮の地内山中に位置する。参道入口に「正一位七社大明神」の鳥居と急な石段がある。二の鳥居には宝暦9年(1759)の刻みと「正一位七社大明神」「正八幡大神」の額が付いている。坂道と合計百二十段を越える石段の参道を登ると境内になる。正面に拝殿と幣殿と覆屋が連なって建ち、西側には神楽殿がある。覆屋内には本殿が2社鎮座している。建物周囲は杉・銀杏・カヤ・櫸の大木があり、東側・北側は杉林につながっている。境内にある燈籠には応永の刻みが読み、拝殿西北の斜面には数基の石碑がある。

## 由来および沿革

『小野上村誌』によると、平安初めの大同元年(806)創建。七社大明神と号し、後に七社神社と称



写32-1 境内拝殿覆屋



する。京より配流された小野金善が、坂上田村麿の東国平定に参加活躍し小野子に移住する。その後金善が京に帰る際、村人に贈ったとされる神像を守り神とし、西の沢・富士山・三田野・如意庵・金善寺・甲里・本宮の7カ所に神社や石室を造り祀った。明治40年(1907)に6カ所の七社神社と大山祇神社、神明宮、諏訪神社、菅原神社が合祀されている。旧七社神社三田野と如意庵には現在も鳥居と石碑が残っている。

ほんてん しちしゃだいめいこうじん  
本殿(七社大明神)(図32-2、表32-2、写32-2~32-7)

東側本殿には、「正一位七社大明神」が祀られて

いる。一間社流造に向拝1間が付き、屋根は板葺で基礎はなく覆屋の床に置いている。向拝の水引虹梁は簡素で、袖切・弓眉に唐草絵様は渦の形は円形に近く離れて若葉がある。中央部に円形の紋が入ったような彫物が付いている。中備は雲と玉の厚板彫刻であるが、複雑なものではない。木鼻は正面に模の彫刻、側面はない。身舎の妻飾は、菊花の木蔓股があるが、虹梁には唐草絵様ではなく束が立つだけである。海老虹梁も絵様はなく反っているが高さの差は小さい。特徴は虹梁・組物等が彩色され、各所に絵が描かれていることである。正面階の下には箒を彈く女に子守人と子、身舎右側面には老師と子、左側面は3人の老師、脇障子は龍、建具裏面に牡丹・菊

表32-2 本殿(七社大明神)

建造年代／根据	正徳4年(1714)/檜札	構造・形式	一間社流造(1.11m)、側面1間(0.91m)、向拝1間、板葺
工 匠	[大工]須田喜兵衛(棟札)	基 础	なし
軸 部	[身舎]丸柱・長押・貫 [向拝]角柱・水引虹梁、海老虹梁	組 物	[身舎]平三斗 [向拝]連三斗
中 備	[身舎]本蔓股(影刻) [向拝]影刻嵌込	軒	二軒半繁垂木
妻 飾	虹梁・東・懸魚(蕉)、六葉	柱 間 装 置	桟唐戸・板壁(絵画)
縁・高欄・脇障子	大床三方、跳高欄、登高欄(擬宝珠)、脇障子(絵)	床	拭板張
天 井	なし	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	朱塗・極彩色(絵画)	飾 金 物 等	隅部、建具、垂木(木口)
繪 画	階下(簞弾女・子守女・子)、側面(右:老師・子、左:老師3人)、後面(不明)、脇障子(龍)、材建具裏(牡丹・菊)	質	不明
彫 刻	水引虹梁上(雲・玉)、蔓股(菊)、正面木鼻(模)、身舎(拳)、桟唐戸(牡丹)、戸脇(菊)		



写32-2 二社並ぶ本殿



写32-3 正面



写32-4 向拝



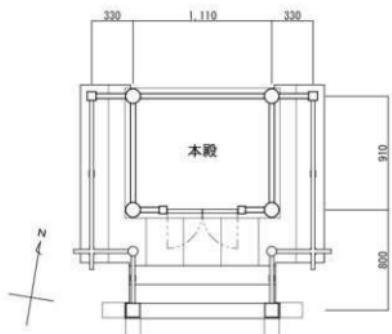
写32-5 側面・妻飾



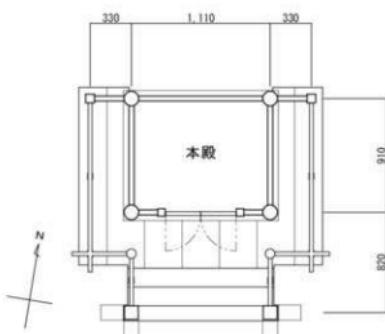
写32-6 海老虹梁・木鼻



写32-7 階下(絵)



写32-2 平面図(本殿 七社大明神)



写32-3 平面図(本殿 金善寺八幡大神宮)

等がある。風化が進み絵の不明な部分も多い。本殿内には「奉建立 正徳四甲午 大工須田喜兵衛」等が記された棟札が残されており、併せて唐草絵様等の様子から建造年代は正徳4年(1714)と判断する。

ほんでん きんぜんじ はきさんだいじんぐう  
本殿(金善寺八幡大神宮)(図32-3、表32-3、  
写32-8～32-10)

西側本殿には、「金善寺八幡大神宮」が祀られて

いる。構造・規模・特徴とも東側本殿と同じである。向拝の水引虹梁中央部に円形の彫物があり、こちらは「八」の字が読める。虹梁上の厚板彫刻は龍である。木鼻は正面に獅子の彫刻、身舎の姿飾や海老虹梁、虹梁・組物の彩色なども東側本殿とはほぼ同様である。異なるところは各所に描かれている絵である。正面階の下には書を習う子と遊ぶ子、身舎右側面には老師と子が釣りをする、左側面は老師が書

表32-3 本殿(金善寺八幡大神宮)

建造年代／根据	18世紀前期／建築様式	構造・形式	一間社流造(1.11m)、側面1間(0.91m)、向拝1間、板葺
工 匠	不明	基 础	なし
軸 部	[身舎]丸柱、長押、貫 [向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁	組 物	[身舎]平三斗 [向拝]連三斗
中 備	[身舎]本蘆股(影刻) [向拝]影刻嵌込	軒	二軒半繁垂木
妻 飾	虹梁・東、懸魚(鯉)、六葉	柱 間 装 置	桟戸戸、板壁(絵画)
縁・高欄、脇障子	大床三方、跳高欄、登高欄(擬宝珠)、脇障子(絵)	床	拭板張
天 井	なし	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	朱塗、極彩色(絵画)	飾 金 物 等	頭部、建具、垂木(木口)
繪 画	附下(手書き)、側面(右:老師・子が釣り、左:老師読書)、後面(不明)、脇障子(右:波と太陽、左:波と月)、建具裏(牡丹・紫陽花)	材 質	不明
彫 刻	水引虹梁上(龍)、幕股(牡丹)、正面木鼻(獅子)、身舎(拳)、桟戸戸(牡丹)、戸脇(牡丹)		



写32-8 正面



写32-9 向拝



写32-10 側壁・臨障子

を読む、脇障子は右が波と太陽、左が波と月、建具裏面に牡丹・紫陽花等がある。建造年代を示す棟札は不明であるが、大きさ、特徴、風蝕の状態から東側本殿と同時期の18世紀前期に造られたと推定する。

### まとめ

覆屋内には規模や特徴が同じ本殿が二社並んでいる。明治13年(1880)の神社明細帳に、現存に合う規模の本社記載があるが数の記載は特にない。覆屋は間口3間半奥行2間3尺と一社の本殿が十分に入る規模で現存のものと思われる。明治40年(1907)に合祀された神社の本殿で一致するものは見つからない。明細帳に相殿「譽田別命」とあり、宝曆9年

(1759)の鳥居に「正一位七社大明神」と「正八幡大明神」の名称が有ることから、本殿二社は同時期に並んで造られていたと推察する。氏子の人々は「七社神社」と呼んでいる。江戸中期の建造年代が明らかな本殿は、この地域の神社建築の指標となる貴重なものである。4月の例祭に小野子の元禄獅子と呼ばれる市指定重要無形民俗文化財「上小野子獅子舞」が奉納される。

(林 美幸)

### 【参考文献】

『小野上村誌』小野上村役場 昭和53年

『上野国神社明細帳』群馬県文化事業振興会 平成15年

### 33 常将神社【つねまさじんじゃ】

表33-1

神社名	常将神社	所在地	北群馬郡棟東村山子田2527
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人 常将神社
主祭神	上総介千葉常将(平常将)	神事	元旦祭(1/1)、春祭(4月上旬第2日曜日)、祇園祭(7月上旬第1日曜日)、秋祭(11/15前日の日曜日)
創立・沿革	常将は船尾山等覚院柳沢寺の觀世音に祈願し、祈願成就の上は諸堂宇を改築することを立願したが志を果たさずに没した。常将の夫人によって承暦3年(1079)に柳沢寺の諸堂宇が完成した。そのことにより船尾山の總鎮守の宮として常将宮が奉祀されたという(『棟東村誌』)。		
文化財指定	常将神社太々神樂(村重無民 昭和46年5月)		

位置・配置(図33-1、写33-1)

県道26号線山子田の信号を西に進み、柳沢寺入口を北に向かい、300m程進むと常将神社がある。北面・南面・東面を道路に接し、道を挟んで南側にコミュニティセンター、南西に柳沢寺がある。参道正面の石段を上ると鳥居があり、鳥居をくぐると右手

に社務所と吾妻社、左手に神楽殿がある。境内を進むと石段の手前に「上総介千葉常将公生誕一千年記念碑」がある。石段を登ると正面に東向きに建つ拝殿、幣殿、本殿を配する。社殿南には天満宮の鳥居、東には境内社が並ぶ。社殿背面は樹木に囲まれている。



写33-1 境内全景

#### 由来および沿革

常将は桓武天皇の子孫で、永承年間(1046~1053)源頼義とともに奥州に出陣し、戦功をあげた武将である。『棟東村誌』によると、常将は船尾山等覚院柳沢寺の觀世音に祈願し、祈願成就の上は諸堂宇を改築することを立願したが志を果たさずに没した。常将の夫人によって承暦3年(1079)に柳沢寺の諸堂宇が完成した。そのことにより船尾山の總鎮守の宮として常将宮が奉祀されたという。元禄年中(17世紀末)山子田村をあげて現在の地に新社殿を造営し、元禄14年(1701)に完成遷座した。享保17年(1732)10月2日に正一位常将宮の宗源宣旨を受けている。明治40年(1907)許可を得て合併し、境内社は菅原社、秋葉社、神明宮、本宮社、庖瘡社となっ

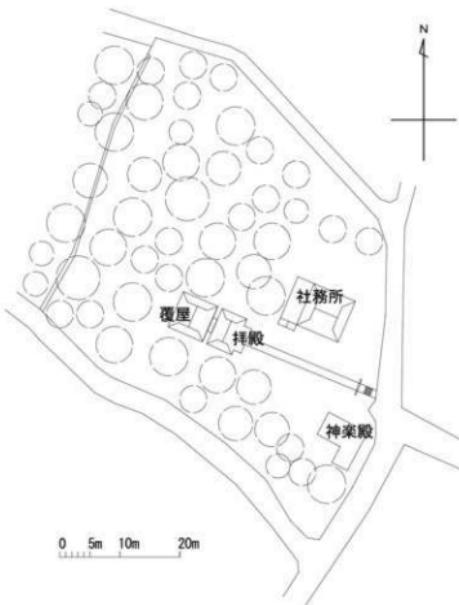


図33-1 配置図

た。神楽殿は間口2間、側面3間、入母屋造鉄板葺で大正末期に新築している。その後増築や改築をしている。

#### 本殿 (図33-2、表33-2、写33-2~33-7)

建造年代は本殿小屋裏にあった棟札に「奉造當正一位常持成就所 明和九壬辰歲四月廿九日 別當柳沢寺」とある。17世紀後期にしては進んだ様式がみられるが、17世紀の特徴を示していることから、棟札の明和9年(1722)で間違いであろう。また閑口文次郎、閑口松治郎他14名が確認できた。

本殿は正面を東に向く、1間社である。正面1間、側面1間の隅木入春日造柿葺、向拝1間付、階5段を設ける。向拝角柱、水引虹梁に地紋彫を施す。組物は出三斗、木鼻(獅子・象)、透彫の手挟が付く。海老虹梁は外側内側に絵様。擬宝珠は登高欄のみで四方に一枚板の縁を廻す。身舎の組物は三手先、拳鼻、中備に幕板、彫刻板支輪とする。正面の両開扉に地紋彫を施す。内部は一室とし、天井が付く。身舎上部の組物は二手先、左右に彫刻脇障子(松)が付く。

#### 幣殿 (図33-2、表33-3、写33-8~33-10)

正面1間(2.66m)、側面2間(3.63m)に両下造瓦棒鉄板葺。正面に覆屋(当初茅葺)が付く。天井表しの勾配天井。両側面に木製窓が付く。昭和25年(1950)に改築工事を行っている。建造年代を示す資料は確認できなかったが、拝殿と幣殿境の虹梁に見られる絵様が装飾化している。建築様式より拝殿と同時期の19世紀中期と推定する。

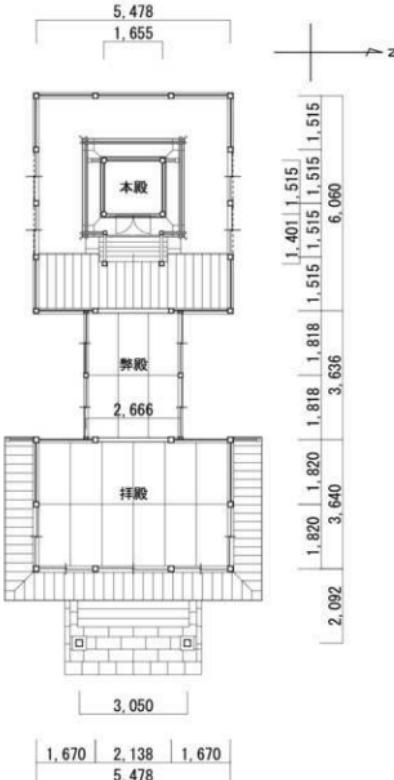


図33-2 平面図(社殿)

表33-2 本殿

建造年代／根拠	明和9年(1722)／棟札	構造・形式	一間社隅木入春日造(1.61m)、側面1間(1.51m)、向拝1間、柿葺、覆屋付
工 匠	[大工]同國勢多郡上田沢彌物大工 閑口文治郎、閑口松治郎他	基 础	切石基礎
輪 部	[身舎]丸柱、地長押、頭貫 [向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁	組 物	[身舎]二手先、三手先、尾垂木、拳鼻 [向拝]出組
中 備	幕板	軒	二軒繁重木、彫刻板支輪
妻 飾	虹梁大瓶束、笈形	柱 間 裝 置	桟唐戸、板羽目
縁・高欄・脇障子	三方縁、擬宝珠高欄、脇障子	床	板張
天 井	板張	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	檜、杉
彫 刻	[身舎]木鼻(絵様)、板支輪、脇障子(松) [向拝]木鼻(獅子・象)、水引虹梁(絵様)、海老虹梁(絵様)、手挟		



写33-2 全景



写33-3 正面



写33-4 側面



写33-5 向拝物



写33-6 向拝



写33-7 拳鼻

表33-3 拝殿

建造年代／根据	19世紀中期／建築様式	構造・形式	正面1間(2.66m)、側面2間(3.63m)、両下造、瓦棒鉄板葺(当初不明)
工 匠	[大工]樺梁 横東村長岡 遠藤口平	基 础	切石基礎
軸 部	丸柱、樺木	組 物	なし
中 備	なし	軒	一軒疊垂木
妻 飾	なし	柱 間 装 置	引違窓
縁・高欄・脇障子	なし	床	畳敷
天 井	野地板表	須弥壇、扇子・宮殿	なし
塗 装	素木	飾 金 物 等	なし
繪 画	なし	材 質	杉
彫 刻	なし		



写33-8 全景



写33-9 側面



写33-10 内部

## 拝殿（図33-2、表33-4、写33-11～33-13）

建造年代は『横東村誌』によると、天保15年（1844）拝殿再建ある。建造年代を示す資料は確認できなかったが、唐草と若葉が一体化していること

から19世紀中期と推定する。

拝殿は正面3間(5.47m)、側面2間(3.64m)、入母屋造瓦葺(当初茅葺)、向拝1間が付く。向拝組物は平三斗、水引虹梁、拳鼻が付く。繋ぎ虹梁は

表33-4 拝殿

建造年代／根据	19世纪中期／建築様式	構造・形式	正面3間(5.47m)、側面2間(3.64m)、入母屋造、平入、向拝1間、瓦葺(当初茅葺)
工 匠	[大工]棟梁 棟東村長岡 遠藤口平	基 础	切石基礎
軸 部	[身舎]角柱、虹梁 [向拝]角柱、虹梁	組 物	なし
中 備	[外部]幕股 [内部]なし	軒	一間疊垂木、船櫓造
妻 飾	木連格子	柱 間 装 置	棟唐戸、板壁
縁・高欄・脇障子	三方切目縁、脇障子	床	畳敷
天 井	竿縁天井		須弥壇・扇子・宮殿 なし
塗 装	素木	飾 金 物 等	なし
繪 画	なし	材 質	杉
彫 刻	[身舎外部]木鼻(絵様) [身舎内部]虹梁(絵様) [向拝]木鼻(絵様)、虹梁(唐草絵様)		



写33-11 全景



写33-12 側面



写33-13 内部

なく、三方縁、板脇障子に階3段を設ける。正面、側面に引違戸が付く。妻飾は木連格子。内部は一室とし、正面に幣殿が付く。内部に組物はない。

#### 社務所 (図33-3、表33-5、写33-14~33-16)

社務所は旧神楽殿を大正4年(1915)5月20日に社務所に変更。それ以前は神楽殿として使用していたと伝わる。小屋裏に棟札は確認できなかった。建造年代を示す資料は確認できていないが、19世纪中期と推定する。

正面を南に開く。正面9.12m、側面7.28mの社務



図33-3 平面図(社務所)

表33-5 社務所

建造年代／根据	19世纪中期／建築様式	構造・形式	正面12.77m、側面8.18m、入母屋造、平入、鉄板葺(当初茅葺)
工 匠	[大工]棟梁 棟東村長岡 遠藤口平	基 础	自然石基礎、鉄筋コンクリート
軸 部	[身舎]角柱、土台	組 物	なし
中 備	なし	軒	一軒疊垂木、船櫓造
妻 飾	木連格子	柱 間 装 置	板壁、アルミサッシ
縁・高欄・脇障子	なし	床	畳敷、土間コンクリート、板張
天 井	竿縁天井		須弥壇・扇子・宮殿 なし
塗 装	素木	飾 金 物 等	なし
繪 画	なし	材 質	杉
彫 刻	なし		



写33-14 全景



写33-15 側面上部



写33-16 内部

所は入母屋造鉄板葺（当初茅葺）と西に正面3.65m、側面8.18mの切妻造鉄板葺の下屋を付ける。下屋は南より、吾妻社と物入・押入、水廻りを置く。内外とも当初の壁仕様等は確認出来ない。東に出入りの階段を付ける。西の下屋、東の階段は後補である。社務所は一室で40畳の大空間である。東面外部より大断面の柱、梁が使われていることが確認できる。

吾妻社は1間社流造柿葺、千鳥破風付、向拝1間が付く。向拝組物は出三斗、木鼻（獅子・象）、蟇股（波）、手挟に絵様、水引虹梁と海老虹梁の絵様はレリーフ化している。身舎組物は三手先、尾垂木、彫刻板支輪（極彩色）、蟇股（植物）、脇障子が付く。正面の両開戸の一部、両脇に彫刻を施し、三方に縁を廻す。妻飾は菱形（波模様）、壁に彫刻は

ない。絵様がレリーフ化していることから、建造年代は18世紀後期～19世紀前期頃と推定する。

### まとめ

常将神社より南西にある柳沢寺は常将神社の別当寺であり、関係が深い。今回の調査で棟札に閑口文治郎、閑口松治郎の名前が確認できたことは貴重である。今後の調査に期待したい。

（森田万己子）

### 【参考文献】

『棟東村誌』 棟東村 昭和63年

『棟東村の文化財』 群馬県棟東村教育委員会 平成元年

『渋川北群馬神社要覽』 群馬県神社庁渋川北群馬支部 平成25年

## 37 (宿)稻荷神社 ((しゅく)いなりじんじゃ)

表37-1

神社名	福井神社	所在地	北群馬郡棟東村大字広馬場4195-6
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人 稲荷神社
主祭神	宇迦之御魂神、波瀬夜麻姫命	神事	元旦祭(1/1)、初午祭(2/11前後の日曜日)、獅子舞奉納、春祭(4月第2日曜日)、秋祭(10月第1日曜日)
創立・沿革	天文10年(1541)創建と伝わる。箕輪城鬼門の守護神社として信仰を集め、大正元年(1912)榛名神社を合祀してからは地域の鎮守として信仰される。		
文化財指定	宿稻荷神社の彫刻(村重文 平成5年10月)、宿稻荷神社獅子舞(村重無民 昭和46年5月)		

位置・配置 (図37-1、写37-1)

県道安中線柏木沢の信号を高崎へ進む右手に、榛名山の丘陵が広がる。神社銘の看板を曲がり、丘陵の中央に一団の森、そこが宿稻荷神社の鎮守である。南東から入る境内は、鳥居を潜ると右手に手水舎がある。その奥正面に社殿があり、東側には榛名神社(大正期、合祀した榛名神社の建物を移築し、

旧社務所とし使っていたが、元の形に復元)、小さな稻荷社(前橋より移築)等の建造物がある。西隣は靈園となっている。また、本殿と榛名神社の間には、「蚕影山大神」の石神があり、明治期養蚕信仰が盛んな地域の面影を残す。他に、万延元年(1860)の石灯籠、文化10年(1813)の手水鉢など古い石造物もあるが、社殿の彫刻の豪華さが際立っている。

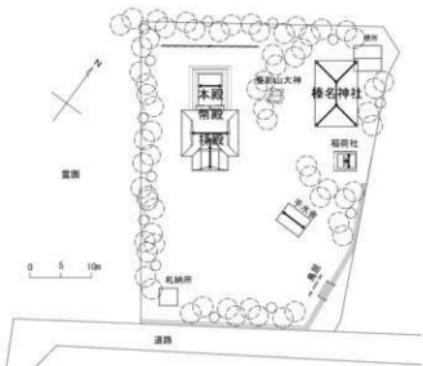


図37-1 配置図



写37-1 境内全景

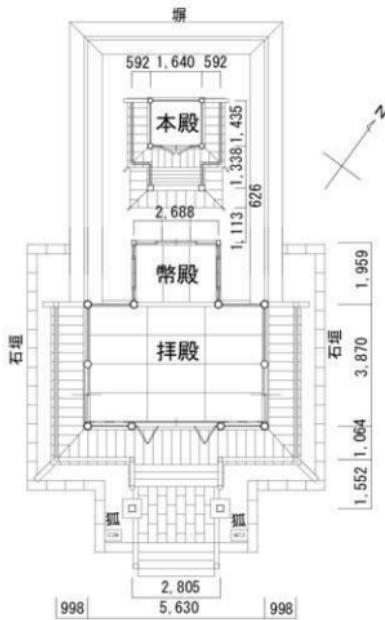


図37-2 平面図

## 由来および沿革

天文10年(1541)4月8日、大江氏の子孫が東国下向の際に、遠祖阿保親王の象を、在原業平朝臣の住んでいた地に勧進した時を創建と伝わる。箕輪城(現高崎市箕郷町)の鬼門の守護として信仰を集めていた。大正元年(1912)棟名神社を合祀してからは、地域の鎮守として信仰される。村重要無形民俗文化財指定の「宿稻荷神社獅子舞」、夢幻書の神社額、弘化3年(1846)天井絵、寛政5年(1793)他数年の宗源宣旨など同地域における文化的価値も高い神社である。また、彫刻等に刻銘された寄進者と、奉賀額の寄進者が、西毛から東毛まで広い地域にわたる事から、多くの参拝者を集めていた。日頃は静寂な境内が、祭日に催される獅子舞に、多くの人々が集う賑わいは、歴史的価値と同じく、地域の鎮守として人々に親しまれた神社であることを強く感じる。

日本式  
本殿(図37-2、表37-2、写37-2~37-7)

建物は一間社流造、平入、銅板葺で正面に向拝を1間付ける。軒は向拝側を打越二軒繁垂木、背面側を二軒繁垂木とする。向拝の角柱は龍の丸彌となっており、県下でも極めて珍しい。二手先、彫刻木鼻、水引虹梁、籠彫刻海老虹梁と手挾を配する。身舎は切石積基壇上に亀腹を置き、敷土台上に丸柱を立てる。柱上に三手先など組物を置き、刻線彫の地・内法長押を回す。棟唐戸脇と両側背壁面に彫刻を飾

る。頭貫上に彫刻と2段の彫刻板支輪、妻には二重虹梁大瓶束、二手先、虹梁間に彫刻と彫刻板支輪を組む。破風に彫刻の懸魚と桁隠を置く。三方に縁を回し、擬宝珠高欄、彫刻脇障子を配する。正面に浜床を置くが後設である。下部縁下は彫刻、組物はないが、縁支柱には刻線彫がされている。

本殿は棟札等の確認がされていないので、建造年は拝殿に掛かる奉賀額より、元治元年(1864)築造とされている。文化8年(1811)の「御宮造立勅進帳」の写しが社伝されており、造営までに半世紀を要したと考える。また先日、本殿造営のとき、他所へ移築した「前宮」の解体修理のおり、棟木裏に「正一位稻荷大明神御宮一宇文化十一歳(1814)甲戌之晚冬」、彫刻裏に「上州花輪村 石原吟藏彫人藤原義景」の墨書きが発見された。このことも19世紀中期の造営と確認される。大工は不明であるが、彫工は奉賀額と拝殿周りの彫刻の刻銘より常造(3代目石原常八)と一門、沼田 関左膳正義と推定する。3代目常八は本社造営2年前に須影八幡神社(埼玉県羽生市)の彫刻を手掛けている。関左膳正義は、大山祇神社(高崎市箕郷町)、慶應2年(1866)松尾神社本殿(沼田市須賀神社境内)、慶應3年(1867)三光院本堂(沼田市)に彫工として参加している。

日本式  
幣殿(図37-2、表37-3、写37-8~37-10)

建物は切妻造、銅板葺である。軒は一軒疊垂木、角柱に組物はなく、縁長押、内法長押を配する。本

表37-2 本殿

建造年代／根据	元治元年(1864)／奉賀額(拝殿)	構造・形式	一間社流造、正面1間(1.64m)、側面1間(1.43m)、向拝1間、銅板葺
工 匠	[大工]不明 [彫工]花輪 3代目石原常八一門、沼田 関左膳正義	基 壁	切石積基壇、亀腹
軸 部	[身舎]敷土台、丸柱、頭貫、縁長押、内法長押 [向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁、手挾	組 物	[身舎]二手先、尾垂木 [向拝]連三斗、持送
中 備	なし	軒	[向拝]打越二軒繁垂木 [背面]二軒繁垂木
妻 鮑	[妻壁]二重虹梁大斗東、二手先、彫刻、彫刻板支輪 [破風]彫刻懸魚、彫刻桁隠	柱 間 裝 置	[身舎]正面棟唐戸、両脇背面板壁
総・高欄・脇障子	[身舎]三方縁、擬宝珠高欄、彫刻脇障子 [向拝]登高欄擬宝珠付	床	内部不明、前面浜床(後付)
天 井	不明	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木	飾 金 物 等	[正面扉]八双金物 [破風]八双金物 [垂木]小口金物 [高欄]鍵化粧金物 [擬宝珠]鈎物
繪 画	なし	材 質	檜
彫 刻	向拝柱(龍丸彌)、水引虹梁(飛龍唐草)、海老虹梁(龍龜彫)、手挾(松・鶴龜彫)、両脇障子(表:狐・裏:仙人)、木鼻(獅子・狛)、彫刻(龍・鳥)、板支輪(波千鳥、菊文)、妻壁彫刻(牡丹・戌)、同支輪(鶴)、懸魚(鶴)、桁隠(菊・菖蒲)、両側背面桐羽目(故事)、長押・階段・支柱(刻線彫)		



写真37-2 本殿正・南側面



写真37-3 向拝組物



写真37-4 海老虹梁、手挟



写真37-5 本殿北側面



写真37-6 本殿背面



写真37-7 北側面彫刻



写真37-8 本殿側面



写真37-9 菩殿南側面



写真37-10 北側面

殿側妻壁に大斗束を置き、腕木で棟木を受けている。両脇を板壁とし、内障子付の火灯窓を置く。床は拝殿より一段上疊敷。天井は小屋表となっている。

幣殿の建築は拝殿柱改修構との取合いから、改修棟札「大正9年(1920)9月 大工 松岡出雲正藤原富盛 松岡出雲正要盛光男 松岡久五郎徳盛 後開定房 屋根工 新井金平」と判断出来る。同時

に拝殿屋根の銅板葺替を行っている。

#### 拝殿 (図37-2、表37-4、写37-11~37-16)

拝殿は入母屋造、平入、銅板葺で正面に千鳥破風、向拝を唐破風とする。軒は二軒繁垂木、向拝は打越二軒繁垂木である。向拝角柱は刻線彫の中に紋（抱著荷、立沢瀬）があり、根巻金物を有する。組

表37-3 币殿

建造年代／根柢	大正9年(1920)/ 棟札	構造・形式	正面1間(2.68m)、側面1間(1.95m)、切妻造、銅板葺(当初柿葺)
工 匠	[大工]松岡出雲正藤原富盛 他3名	基 礎	切石基礎 敷土台
輪 部	角柱、縁長押、内法長押	組 物	なし
中 備	なし	軒	一軒繁垂木
妻 飾	なし	柱 間 装 置	4枚引硝子戸、両引内障子付火灯窓、板壁
縁・高欄・船障子	なし	床	疊敷
天 井	小屋裏表	須弥壇・厨子・宮殿	なし
塗 装	素木	飾 金 物	なし
繪 画	なし	材 質	杉
彫 刻	なし		

物は連三斗と菖蒲桁、彫刻木鼻と水引虹梁、上部に彫刻、籠彫刻持送、海老虹梁、2対の籠彫刻持送と1対の手挟を置く。屋根周りは彫刻軒檼、唐破風妻壁彫刻、彫刻兎ノ毛通、千鳥破風妻壁に平三斗、虹梁、破風に彫刻懸魚を配する。身舎は切石基礎上に切石基礎、土台を敷く。丸柱、拳鼻付出組で桁を受け、彫刻木鼻を置き、隅は二手先、隅木受に彫刻、二方面向獅子木鼻を置く。正面は両折戸の棟唐戸に龍の彫刻を配し、繫虹梁（菊水唐草彫）を置く。両脇は引違戸、虹梁、頭貫上に彫刻を配する。

写37-4 拝殿

建造年代／根据	元治元年(1864)／奉賀額(拜殿)	構造・形式	正面3間(5.63m)、側面2間(3.87)、入母屋造、平入、千鳥破風付、向拝1間唐破風付、銅板葺、(当初柿葺)
工 匠	[大工]不明 [彫工]花輪 3代目石原常八一門、沼田 関左膳正義	基 础	外周 切石布基礎
軸 部	[身舎]丸柱、縁長押、内法長押、頭貫、敷土台 [向拝]角柱(刻線彫)、水引虹梁、持送、海老虹梁、手挟	組 物	[身舎]二手先 (隅柱)三手先 彫刻隅木受 [向拝]連三斗
中 備	なし	軒	[身舎]二軒繫垂木 [向拝]打越二軒繫垂木
妻 鮑	[身舎](妻壁)出組、虹梁、斗付束(破風)彫刻懸魚	柱 間 裝 置	[身舎](正面)中央両折棟唐戸、両脇格子戸(両側背面)格子戸、板壁
締・高欄・船脛子	三方縁・擬宝珠高欄・彫刻脇障子	床	疊敷
天 井	[身舎]格天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 裝	素木	飾 金 物 等	棟唐戸(八双金物)、擬宝珠、長押(釘隠)、破風(八双金物)、向拝柱(根巻金物)
繪 画	天井画	材 質	檜、杉、松
彫 刻	[外部]木鼻(獅子・犀)、水引虹梁(水・亀・唐草)、同上彫刻(故事)、海老虹梁(唐草絵様・刻線彫)、持送(波瀬彫)、手挟(松・鷺・鳥)、頭貫上彫刻(松・鳥)、軒板支輪(菊水)、棟唐戸(龍)、千鳥破風懸魚(龍)、唐破風妻壁彫刻(狐)、同鬼ノ毛通(飛竜)、妻破風懸魚(龍)、脇障子(獅子)、虹梁(唐草絵様)、向拝柱(刻線彫) [内部]奉納額額縁付(龍)		



写37-11 拝殿正面



写37-12 向拝組物



写37-13 海老虹梁・手挟



写37-14 拝殿組物



写37-15 内部正面



写37-16 内部東南面

建造は本殿と同じ、元治元年(1864)である。改修は棟札を残す大正3年(1914)、社殿改修記念碑の残る平成2年(1990)に行われている。拝殿にもかかわらず装飾化されていること、唐草絵様の巻若葉などから判断して、本殿と同じ19世紀中期の建物である。

### まとめ

本社殿は棟札がなく、拝殿の奉賀額と天井画より元治元年築造とされる。彫刻などに花輪の彫刻集団が関わったため、流行を多く取り入れ、後年の作とも思えるところもあるが、基本の要素は19世紀中期の特徴を良く残した建物である。大正4年(1915)の「社殿登録書」に記載された、文政12年(1829)築造

の茅葺神楽殿が無くなったのは残念であるが、榛名神社(旧社務所)の天井画に、金井鳥洲・森田梅子の銘が発見され、「前宮」からは彫工石原吟藏が確認出来た。多くの資料の残る建物であり、新たな歴史の発見が期待される。

(貝殻博子)

### 【参考文献】

- 『榛東村誌』榛東村 昭和63年
- 『榛東の文化財』榛東村教育委員会 平成元年
- 『多野郡東村誌 通史編』東村 平成10年
- 『御宮造立寄進帳 写』神社所蔵 文化8年
- 『社殿及び造作登録申請書』神社所有 大正4年
- 『幣殿屋根葺替更許可願』神社所有 大正9年
- 『社殿変更登録書』神社所有 大正10年

## 38 三宮神社（さんのみやじんじゃ）

表38-1

神社名	三宮神社	所在地	北群馬郡吉岡町大久保字宮1
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人 三宮神社
主祭神	御神体：十一面觀音像（丸太一木造、室町時代作）、祭神：彦火々出見命、少彦名命、豊玉姫	神事	元旦祭（1/1）、例祭 獅子舞神樂（4月第一日曜日）、大久保水祭り（8月）、秋祭（10月第一日曜日）
創立・沿革	創建は天平勝宝2年（750）というが不詳。渋川市有馬に祀られていた伊香保神社は棟名ニツ岳の噴火により吉岡町大久保に遷座、後の鎌倉時代に伊香保温泉の伊香保神社に遷り、元地が三宮神社となった（『吉岡村史』より）。		
文化財指定	三宮神社（町重文 昭和63年2月）、満祭三宮神社獅子舞（町重無民 平成15年5月）、三宮神社太々神樂 三楽講（町重無民 平成23年11月）		

位置・配置（図38-1、写38-1）

吉岡町大久保地区通称溝祭の地に鎮座。境内東側が関越自動車道の側道に面している。駒寄スマートIC（下り）より950m。

境内は、ほぼ矩形・平坦で北・東・南を道路、西を民地に接している。南東の角で道路と2m程の段差があり、敷地南東に社務所、北に社殿、西に神楽殿が配置されている。階段を下りると鳥居があり、道路南側の森の中を参道が続いている。



写38-1 構内全景

### 由来および沿革

創建は天平勝宝2年（750）というが不詳。渋川市有馬に祀られていた伊香保神社は棟名ニツ岳の噴火により吉岡町大久保に遷座、鎌倉時代に伊香保温泉

の伊香保神社に遷り、元地が三宮神社となった。大久保宿の鎮守として長い歴史があり、令和元年10月6日には三宮神社例大祭（獅子舞屋台巡行）が行われ、20年ぶりに5台の屋台が巡行した。



図38-1 配置図

### 本殿（図38-2、表38-2、写38-2～38-7）

一間社流造、銅板葺き（間口1.60m、奥行1.32m）。向拝部が内部化されているため幣殿・拝殿と一体となっている。基礎は二重礎石、軸部は身舎円柱を地覆、腰長押、縁長押、頭貫で固め組物は二手先支輪付。腰組の連続する小戸。向拝は海老虹梁で身舎円柱と繋ぎ、連三斗、手抉をつける。海老虹梁の浮出する絵様。虹梁の梅の浮彫、妻飾部の地紋彫の二重虹梁、二手先組物、虹梁、大瓶束、懸魚、木鼻。駒寄村誌によれば嘉永3年（1850）の改築をしている。建造年代の指標を欠くが、腰および台輪上の連続する小斗（巻斗）が設けられていることや、文久3年（1863）の額を残しているなどから19世紀前期の建造と考える。

身舎丸柱・向拝方柱間に壁を設け大床・階部分を室内化し、方柱に幣殿壁がつながって一体化している。大正9年（1920）9月11日、本殿屋根、赤銅葺き

に葺き替え（『駒寄村史』小林達次郎編）。

昭和55年幣殿改修時、大床・階部を室内化し、虹梁上に束を設置している。

#### 拝殿（図38-2、表38-3、写38-8～38-10）

三間二間入母屋造向拝付き鋼板葺き（間口6.55m、奥行3.82m）。十四帖、格天井、柱間装置は杉板張り、長押上部は塗壁、板戸。軒は一軒疎垂木、せがい。海老虹梁は古いデザインの線彫。昭和55年（1980）改修（境内石碑）。

#### 幣殿（図38-2、表38-4、写38-11～38-13）

一間二間切妻造鋼板葺き（間口2.426m、奥行4.545m）。四帖半、船底天井。柱間装置は杉板張り、長押上部は塗壁、障子、ガラス戸。室内化した向拝の大床・階部分とは扉なしで繋がっている。昭和55年改修（境内石碑）。

表38-2 本殿

建造年代／根据	19世紀前期／建築様式	構造・形式	一間社流造(1.6m)、側面(1.32m)、向拝1間、鋼板葺
工 匠	不明	基 础	礎
輪 部	[身舎]丸柱、頭貫、内法・縁・腰長押、地覆、手挾 [向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁	組 物	二重礎石、龜腹 [腰組]二手先、通肘木、化粧斗 [身舎]三手先、支輪、軒天 [向拝]連三斗
中 備	[身舎]通肘木、化粧斗	軒	二軒疎垂木、支輪
妻 飾	虹梁、二手先、二重虹梁、大瓶束、懸魚、木鼻	柱 間 装 置	板張
縁・高欄・船障子	登り高欄、禪宗様高欄	床	板張
天 井	不明	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 裝	朱塗	飾 金 物 等	破風
絵 画	なし	材 贊	檻
彫 刻	海老虹梁、木鼻、手挾、二重虹梁(地紋彫)、水引虹梁		



写38-2 社殿正面



写38-3 社殿側面



写38-4 向拝



写38-5 拝殿・幣殿・本殿



写38-6 本殿 身舎妻組物



写38-7 本殿向拝

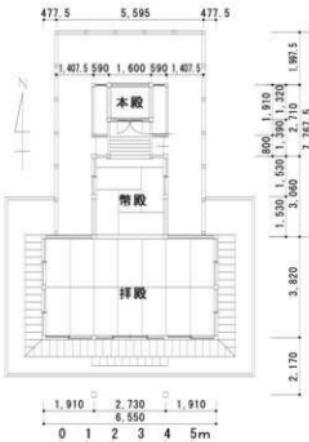


图38-2 平面图(社殿)

## まとめ

三宮神社は大久保宿の鎮守として長い歴史があり、毎年春の例祭には、獅子舞や太々神楽が奉納されている。

装飾化の進んだ時代の建築であるが、三面の大床、板貼の脇障子、彫刻が虹梁・木鼻に限る落ち着いた佇まいとなっている。

(荻野 浩)

表38-3 拝殿

建造年代／根拠	19世紀前期／建築様式	構造・形式	正面3間(6.55m)、側面2間(3.82m)、入母屋造、平入、向拝1間、銅板葺
工 匠	不明	基 础	礎石
軸 部	[身舎]角柱 [向拝]方柱、海老虹梁	組 物	[身舎]出桁造 [向拝]海老虹梁、出三斗
中 備	なし	軒	一軒疊垂木
妻 飾	なし	柱 間 装 置	アルミサッシ、塗壁
縁・高欄・脇障子	三方縁	床	畳敷
天 井	井 格天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	朱塗、黒塗	飾 金 物 等	破風、垂木小口、隅木小口
繪 画	なし	材 質	不明
彫 刻	なし		

表38-4 幟殿

建造年代／根拠	19世紀前期／建築様式	構造・形式	正面1間(2.42m)、側面2間(4.54m)、両下造、銅板葺
工 匠	不明	基 础	礎石
軸 部	[身舎]角柱	組 物	なし
中 備	なし	軒	一軒疊垂木
妻 飾	なし	柱 間 装 置	塗壁
縁・高欄・脇障子	なし	床	畳敷
天 井	杉粧合板敷目貼(船底天井)	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	朱塗	飾 金 物 等	なし
繪 画	なし	材 質	不明
彫 刻	なし		



写真38-8 幢殿の腰組と通し肘木を連続する小斗



写真38-9 拝殿内部1



写真38-10 拝殿内部2



写真38-11 幢殿



写真38-12 本殿の水引虹梁



写真38-13 本殿の組物

## 【参考文献】

『駒寄村史』小林達次郎編 昭和5年

『駒寄郷土誌』明治43年

『吉岡村誌』吉岡村教育委員会 昭和55年

『上野国神社明細帳6』丑木幸男編 群馬県文化事業振興会 平成14年

『渋川北群馬神社要覧』群馬県神社庁渋川北群馬支部 平成25年

## 40 (北下)諏訪神社 ((きたしも)すわじんじゃ)

表40-1

神社名	諏訪神社	所在地	北群馬郡吉岡町北下505
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人 諏訪神社
主祭神	諏訪名方命	神事	元旦祭(1/1)、例祭(4/1)、例祭(4/18)、天皇祭(7/15)、秋祭(10/9)
創立・沿革	当国桃井城主房久が文禄慶長(1593~1615)の頃勧請したと伝わる。社殿創立は元亀天正(1570~1593)の頃。元禄6年(1693)7月吉日辰石鳥居建立。元文2年(1737)9月11日京都神祇官領兼雄幣帛を獻寿(『寺伝』)。		
文化財指定	なし		

位置・配置 (図40-1、写40-1)

諏訪神社は明治小学校より南西、高崎渋川バイパス千代開の信号より北東に鎮座する。北面と東面を道路に接し、南と西に住宅がある。東より石鳥居をくぐると境内があり、北に北下西南部住民センター、その脇に遊具が設置されている。正面の右手に手水舎、左手に石碑が建つ。石段を上ると狛犬、東に向く拜殿・幣殿・本殿を配する。社殿南に境内社を祀り、背面は樹木に囲われている。

由来および沿革

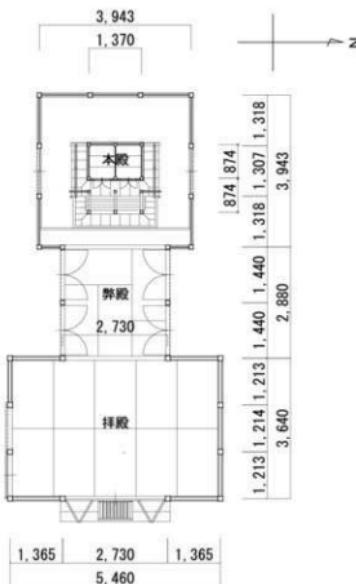
創建は不詳。当国桃井城主房久が文禄慶長(1593~1615)の頃勧請したと伝わる。社殿創立は元亀天



正(1570~1593)の頃。元禄6年(1693)7月吉日辰石鳥居建立。元文2年(1737)9月11日京都神祇官領兼雄幣帛を獻寿。元文5年(1740)7月吉日に末社の馬場社を勧請。天明元年(1781)神殿増築し、明治6年北下村鎮守諏訪神社と改めた。明治41年(1908)4月12日八幡宮、熊野神社を合祀している。境内には廻り舞台があったと伝わる。神楽殿は明治40年(1907)10月8日に削除許可となった。覆屋は神社所蔵史料によると、大正3年(1917)に新築願を出している。

本殿 (图40-2、表40-2、写40-2~40-8)

建造年代は本殿内部の室境にあった墨書「宝曆七



年丁丑口 上野上野田村より、宝曆7年(1757)である。様式からみて墨書の年代で間違いないであろう。

本殿は二間社流造、正面2間、側面1間、千鳥破風付、千木付。本殿は扉が2箇所、内部も2室に分かれている。それぞれに内陣があり中に觀音様を祀る。向拝は出組、手狭、木鼻に獅子と象が付く。角柱上部に八双金物模様の地紋彫、水引虹梁、海老虹梁に地紋彫が施されている。海老虹梁の外側は地紋彫、内側を絵様とし、中央を高くした綺麗な半円の弧を描く。身舎外部は木鼻、三手先、尾垂木、幕股、彫刻板支輪を施す。三方に切目縁が廻り、腰組は三手先。側面と背面の壁に彫刻はない。脇障子は彫刻で正面に松、背面に鳥、下部に持送が付く。内部の組物は出組とし、扉裏の上部に下絵の落書きがある。妻飾は笈形で上部に木鼻が付く。

表40-2 本殿

建造年代／根据	宝曆7年(1757)／内部隔壁面墨書	構造・形式	二間社流造、正面(1.37m)、側面1間(0.87m)、千鳥破風付、向拝1間、柿葺、覆屋付
工 匠	不明	基 础	基礎、切石積2段
軸 部	[身舎]丸柱、内法長押、頭貫 [向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁、手挟	組 物	[身舎外部]三手先、尾垂木 [身舎内部]出組、尾垂木 [腰組]三手先 [向拝]出組
中 備	[身舎]幕股	軒	二軒繁垂木
妻 飾	虹梁大瓶束	柱 間 裝 置	両間柱唐戸、板壁
締・高欄・船椅子	三方切目縁、擬宝珠高欄、脇障子	床	拭板張
天 井	板張	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木、朱塗、黒塗、極彩色(彫刻)	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	檜
彫 刻	[身舎]木鼻(獅子)、幕蛙、彫刻板支輪、脇障子(松・鳥) [向拝]木鼻(獅子)、虹梁(地紋彫・絵様)、海老虹梁(地紋彫・絵様)、手挟、角柱(地紋彫)		



写40-2 全景



写40-3 向拝



写40-4 身舎上部



写40-5 向拝



写40-6 妻側上部



写40-7 脇障子正面



写40-8 脇障子背面

表40-3 幣殿

建造年代／根拠		19世紀前期／建築様式	構造・形式	正面1間(2.73m)、側面2間(2.88m)、両下造、瓦棒鉄板葺、覆屋付
工 匠	不明	基 础	礎	切石基礎
軸 部	角柱、棟木	組 物	なし	
中 備	なし	軒	一軒疊垂木	
妻 飾	なし	柱 間 裝 置	木製窓	
縁・高欄・脇障子	なし	床	畳敷	
天 井	井 野地板表	須弥壇・扇子・宮殿	なし	
塗 装	素木	飾 金 物 等	なし	
絵 画	なし	材 質	質 杉	
形 刻	なし			



写40-9 侧面



写40-10 内部



写40-11 内部

表40-4 拝殿

建造年代／根拠		19世紀前期／建築様式	構造・形式	正面3間(5.47m)、側面3間(3.64m)、入母屋造、平入、鉄板葺(当初茅葺)
工 匠	不明	基 础	礎	切石基礎
軸 部	[身舎]土台、角柱 [向拝]なし	組 物	なし	
中 備	なし	軒	一軒疊垂木、せがい造	
妻 飾	なし	柱 間 装 置	両開折戸、引戸、板壁	
縁・高欄・脇障子	なし	床	畳敷	
天 井	井 野縁天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし	
塗 装	素木	飾 金 物 等	垂木小口	
絵 画	なし	材 質	栗、松	
形 刻	なし			



写40-12 全景



写40-13 侧面



写40-14 内部

などの装飾はなく、簡素な造りであり、建築様式からみて妥当である。

また多くの史料を残しており、歴史を繋ぐ神社として貴重である。

(岩崎謙治・森田万己子)

### まとめ

諏訪神社は4月の例祭で小学校に入学する子供達を対象とした新入生祈願を行っている。神社信仰を継承していくための重要な行事といえる。また今回調査した北群馬郡にある神社の中で唯一の二間社であり、特に柱や虹梁の地紋彫、彫刻は見事である。

### 【参考文献】

『吉岡村誌』吉岡村教育委員会 昭和55年

『渋川北群馬神社要覧』群馬県神社庁渋川北群馬支部 平成25年

『群馬郡誌（上巻）』群馬郡教育会 昭和47年

#### 44 玉村八幡宮 (たまむらはちまんぐう)

表44-1

神社名	玉村八幡宮	所在地	佐波郡玉村町下新田1
旧社格	県社	所有者・管理者	宗教法人 玉村八幡宮
主祭神	醫祖別命・豊受大神・少彦名命・比咩神	神事	戊・亥八幡崇敬会大祭(初戌日・初亥日)、八坂祭・夏越大祓(7月第4土日)、人形感謝大祭(10月初旬)
創立・沿革	建久6年(1195)に源頼朝が上野奉行安達藤九郎盛長をして鶴岡八幡宮より御分靈を勧請して創建した八幡神社(角渕八幡宮)が本宮である。慶長10年(1605)関東都代の伊那備前守忠次が、当地の新田開発の任に当たってその成就を角渕八幡宮に祈願し、慶長15年(1610)無事竣工し、現在地に奉斎した(「上野那波郡玉村府内角渕八幡宮縁起」(1615)「上野国玉村八幡宮本紀」(1686))。		
文化財指定	玉村八幡宮本殿(国重文 平成18年8月)、玉村八幡宮拝殿・幣殿、隨神門、神楽殿(町重文 平成28年2月)、玉村八幡宮国魂神社(旧玉村尋常高等学校奉安殿)(国登録 平成26年10月)、祇園祭(下新田)(町重無民 昭和46年4月)、五丁目屋台(町重文 昭和62年12月)、六丁目屋台(町重文 昭和63年9月)		

### 位置・配置(図44-1、写44-1)

玉村町中心部よりやや西の下新田と上新田の境目、旧日光例幣使街道の北側に面して位置する。境内は大変広く、境内中央を流れる濠により南は社務所などの居住域、北は濠に囲まれた神域に分けられている。南の街道より一ノ鳥居をくぐり、参道を進



图44-1 配置图

み隨神門をくぐると、右手に社務所・参集殿、左手駐車場奥には自動車修祓所・安産子育て祈願所、淡島神社・猿田彦神社・御水舎と続く。二ノ鳥居をくぐり豪にかかる太鼓橋、山門を過ぎると神域となり承応元年(1652)の石灯籠がある。正面に拝殿・幣殿・本殿を配し、その南西に北向きに神楽殿、社殿西方に国魂神社、社殿東には塚に囲まれた巖島神社がある。樹木は御水舎手前に御神木の大きな楠木がありその奥は黒松などが茂っている。本殿周囲は黒松、櫻等が茂り森のようになっている。

## 由来および沿革

建久6年(1195)に源頼朝が上野奉行安達藤九郎盛長をして鶴岡八幡宮より御分靈を勧請して創建した八幡神社(角渕八幡宮)が元宮である。その後安達氏と地頭の玉村氏が滅亡し大破していたところ応永18年(1411)に関東管領足利満家が再興したが後に全焼、さらに永正4年(1507)に白井城主の家臣吉里対馬入道が再建したが、兵乱により大破していた。慶長10年(1605)関東郡代の伊那備前守忠次が、当地の



#### 写44-1 境内全量

新田開発の任に当たってその成就を角渕八幡宮に祈願した。前橋の總社から天狗岩用水を延長する代官堀（滻川用水）を開削して開田するという一大事業が慶長15年（1610）無事竣工し、角渕八幡宮の神靈と社殿の一部を新しく開発された玉村町新田の現在地に遷し、玉村八幡宮が開創された。なお遷宮の実務は別当神楽寺の山伏良源が携わったとされる。

#### 本殿（図44-2、表44-2、写44-2～44-7）

正面3間、側面2間の三間社流造で柿葺（当初は檜皮葺）、3間向拝付とし、身舎手前1間を外陣、

後方1間を内陣とする。三方に擬宝珠高欄付切目縁を廻し、脇障子を立てる。軸部は身舎は丸柱に足固め貫、腰貫、頭貫で固め、拳鼻を付ける。向拝は面取角柱とし中央を異形虹梁、両脇を水引虹梁とし、木鼻は象のようであり、くの字に入込んだ翼（しかもみ）が見られる。海老虹梁は反りは少なくやや段違いに架けられている。中備は身舎、向拝とも本幕股とし、内部の彫刻は板内に納り、肩が張り足は短い。木鼻の溝は比較的よく巻込んでいる。塗装は身舎正面内法長押から上と向拝虹梁より上に極彩色が施されている。身舎正面柱には金欄巻、正面の2本

表44-2 本殿

建造年代／根据	慶長15年(1610)／「上野国玉村八幡宮本紀」	構造・形式	三間社流造(5.49m)、側面2間(3.16m)、向拝3間、柿葺
工 匠	不明	基 础	礎 自然石
軸 部	「身舎」丸柱、貫、長押 [向拝]角柱、異形虹梁、水引虹梁	組 物	「身舎」平三斗、四隅：連三斗、背面：出組 [向拝]出組二段積上変形
中 備	「身舎」本幕股 [向拝]本幕股	軒	二軒繁垂木 [正面]打越二軒繁垂木
妻 飾	虹梁太瓶束、猪の目懸魚	柱 間 装 置	[正面]棟唐戸、開き戸 [背面]板壁 [側面]板壁に棟唐戸・火燈窓嵌込
縁・高欄・脇障子	三方大床 擬宝珠高欄付、切目縁、板脇障子付	床	拭板張(「玉村八幡宮社誌」による)
天 井	竿縁(「玉村八幡宮社誌」による)	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	「身舎外部」朱塗(東背面軸組)、金欄巻・金箔押(正面柱)、極彩色(正面虹梁より上・幕股)、黒漆喰(階)、胡粉塗(壁) [向拝]朱塗(柱・虹梁)、極彩色(上部)	飾 金 物 等	なし
繪 画	なし	材 質	不明
彫 刻	「身舎外部」幕股(花、植物に鳥、竹に虎、牡丹に獅子・雲に麒麟、波に犀)、木鼻(溝) [向拝]異形虹梁(唐草絵様)、幕股(牡丹、菊)、木鼻(溝、獅子)		



写44-2 西面



写44-3 正面



写44-4 向拝側面



写44-5 向拝外部組物



写44-6 身舎外部組物



写44-7 身舎幕股

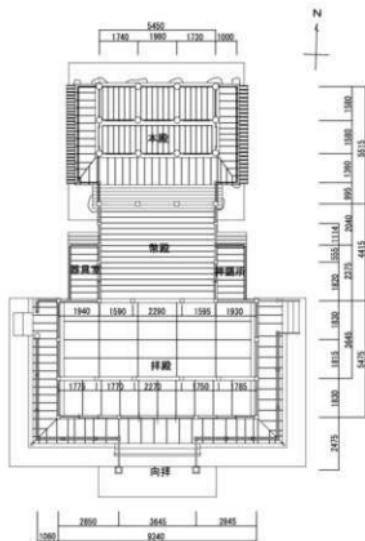


图44-2 平面图(社殿)

表44-3 挤股

建造年代／根据	18世紀初期／建築様式	構造・形式	正面3間(9.34m)、側面3間(5.49m)、背面5間、入母屋造、平入、銅板葺千鳥破風付、向拝1間軒唐破風付
工 匠	不明	基 础	[身舎]自然石 [縁・向拝柱]切石
軸 部	[身舎]角柱、土台、貫、長押 [向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁、手挾(2付)	組 物	[身舎]舟肘木 [向拝]連三斗
中 備	[身舎]なし [向拝]嵌込彫刻	軒	身舎一軒半繁垂木 [正面]飛擔打越二軒半繁垂木、茨垂木
妻 飾	木連格子、燕懸魚	柱 間 裝 置	[正面]木製引違戸、[側背面]板壁
縁・高欄・脇障子	三方大床切目縁脇障子(板)、擬宝珠高欄	床 座	疊敷
天 井	梁間手前1間(板張、竿縁天井)	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	[身舎外部]朱塗(軸部・板壁・縁・垂木)、胡粉塗(小口) [向拝]朱塗(軸部)、墨塗(柱地紋彫)、檍彩色(彫刻)	飾 金 物 等	[向拝]押金具・破風尻金具(破風)、小口金具 [身舎内部]蘿戸吊金具(梁)
絵 画	なし	材 質 杉	
彫 刻	[向拝]軒唐破風兔毛通(雲に鳳凰)、中備(波に龍)、水引虹梁(唐草絵様)、海老虹梁(唐草絵様・錫杖彫)、木鼻(正面獅子・側面獅)、手挾(外側透し彫波に龍、内側唐草絵様)、柱(地紋彫)		



344-8 金骨



写44-9 海老虾蟹



第44-10 内部

の柱に金箔押し、その他朱塗、胡粉塗、黒漆喰、墨塗が施されている。本殿には附指定の6枚の棟札の他3枚の棟札が残されており、そのうち元禄17年(1704)等の棟札より当時は檜皮葺であったこと、明和8年(1771)の棟札より、向拝中央の異形水引虹梁、身舎正面中央間と外陣側面の棟唐戸、内陣側面の花頭窓などを改変したことが分かる。しかしこれらの棟札はいずれも修復のものである。建造年代については、永正4年(1507)と慶長15年(1610)年の2説がある。「上野那波郡玉村府内角測八幡宮縁起」と「上野国玉村八幡宮本紀」によると、永正4年の社殿再興は同じであるが、前者は慶長15年(1610)に玉村八幡宮を修理、後者は慶長15年より日あらずして玉村八幡宮を造立とある。また室町末期の様式が見られるが根拠は不足している。建造年代は建築的特徴や各種資料から判断すると、古材を一部転用し、慶長15年(1610)新築と推定する。

挂殿 (図44-2, 表44-3, 写44-8~44-10)

当建物は正面3間、側面3間、背面5間の入母屋造平入、銅板葺千鳥破風付、向拝1間軒唐破風付と

する。当初は檜皮葺であった。身舎手前一間通りは疊敷とし内部空間であるが当初は部材に残る痕跡から吹放ちであったことが分かる。三方切目縁を廻し脇障子を立てる。組物は身舎を舟肘木、向拝を連三斗とする。海老虹梁は反りも大きくかなり段違いに架けられている。虹梁の唐草様は各虹梁により意匠は違うが、渦と若葉は離れている。彫刻は向拝の柱の地紋彫と虹梁より上に見られ、極彩色で彩られている。当建物に残された棟札は数枚あるが、みな修復に関わるもので建造年代を示すものはない。享保11年(1726)の最も古い棟札に拝殿が記されていることからこの時期には建てられていたと考えられる。のことと向拝意匠から建造年代は18世紀初期と推定する。

#### 幣殿（図44-2、表44-4、写44-11～44-13）

正面1間、側面3間、両下造柿葺で当初は檜皮葺であった。内部は床を拭板とし天井は化粧軒裏とする。幣殿に関わる棟札は拝殿のものと同様であり、幣殿は拝殿と同時期に建てられたと考えられることから、当建物の建造年代は拝殿と同様18世紀初期と推定される。拝殿と幣殿は、本殿が単独で建っていたところに後から付け加えられたものである。

#### 隨神門（図44-3、表44-5、写44-14～44-16）

建造年は棟札より慶応元年(1865)(上棟)である。明治33年(1900)の「隨神門大修理略記」によれば、當隨神門が安政7年(1860)の別當神楽寺の火事の延焼により罹災したため、文久2年(1862)起工、慶応元年(1865)8月に竣工と記されている。建物は3間1戸の棟門造で屋根は入母屋瓦葺である。当初から上層の天井と床は張られていない。組物は初層、上層とも二手先とし、中備は初層に組物と嵌込彫刻、上層に組物と本蘆戸を用いている。軒は二軒繁垂木とし、板支輪、蛇腹支輪を廻す。彫刻は浮彫、丸彫

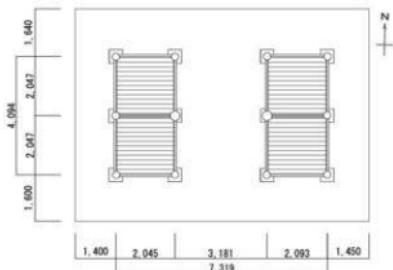


図44-3 平面図(隨神門)

表44-4 幣殿

建造年代／根据	18世紀初期／建築様式	構造・形式	正面1間(5.47m)、側面3間(4.41m)、両下造柿葺
工 匠	不明	基 础	礎石
輪 部	角柱、土台、長押	組 物	舟肘木
中 備	なし	軒	一軒疊垂木
要 鈑	なし	柱 間 裝 置	板壁、舞良戸・格子窓(増築部)
縁・高欄・脇障子	なし	床	拭板張
天 井	化粧屋根裏	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木	飾 金 物 等	なし
繪 画	なし	材 質	杉
彫 刻	なし		



写44-11 内部



写44-12 内部天井



写44-13 外部舟肘木

表44-5 隣神門

建造年代／根据	慶応元年(1865)／棟札	構造・形式	3間1戸楼門(7.31m)、側面2間(4.09m)、入母屋造、平入、瓦葺
工 匠	[大工]棟梁 越後國中之鳩 浅野喜内藤原長正 [彫工]武藏國玉井村 小林榮次郎、同国先玉村 万次郎 [石工]當所 星野榮吉	基 础	切石
軸 部	[下層]丸柱、貫、台輪、虹梁 [上層]丸柱、長押、貫、台輪	組 物	[下層]二手先 [上層]二手先尾垂木付
中 備	[下層]嵌込彫刻 [上層]木幕股	軒	二軒繁垂木 [下層]板支輪、蛇腹支輪 [上層]彫刻板支輪、蛇腹支輪
妻 飾	虹梁太平東笈型付、彫刻懸魚	柱 間 裝 置	[下層](正面・中・背面)木建嵌段・板壁、(側面)板壁 [上層](正面中央)格子、(他)板壁
縁・高麗・脇障子	[上層]四方廻廊高欄付	床	不明
天 井	[下層]格天井 [上層]不明	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 裝	素木、胡粉塗(兼木小口)、朱塗(上層彫刻板支輪)、素木	飾 金 物 等	[上層]釘隠(内法長押)
絵 画	なし	材 質	檜
彫 刻	[下層]中備(雲に鶴)、木鼻(獅子)、虹梁(正面中央梅と鳥浮彌・正面脇間松・他唐草絵様)、虹梁下4ヶ所(植物に鳥) [上層]板支輪(波に植物)、幕股(植物)、木鼻(獅子)、虹梁(唐草絵様・波)、正面脇間板壁(龍)		



写44-14 南面



写44-15 初層脇上部



写44-16 上層組物

りなど精巧に作られ、これらは江戸後期の特色を表している。棟札には彫師として武藏國玉井村の小林榮次郎の名がある。また、玉村町の民家には当建物に関する多くの文書が残されており、建築時の様子や彫刻の寸法、代金などが記されている。

#### 神楽殿 (図44-4、表44-6、写44-17~44-19)

入母屋造で屋根は金属葺、軒は一軒繁垂木とする。平面は北面を正面とし吹放ちの舞台、南側を楽屋とする。舞台の三方に高欄付の縁を廻し、舞台と縁同じ高さとし拭板で仕上げる。虹梁の唐草様は装飾され木鼻の渦も線が太い。令和2年に大改修が行われたがこの改修の際、玉村町教育委員会の調査により建物下の土から天明3年(1783)の浅間山大噴火による泥流痕が見つかった。更に掲額「日々御神樂」裏面に享和2年(1802)の文字が記されている。

一方文化3年(1806)までに制作された「例幣使道分

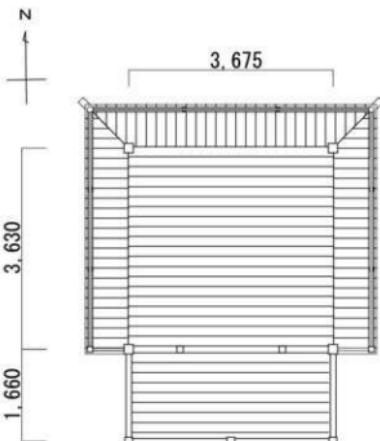


図44-4 平面図(神楽殿)

表44-6 神楽殿

建造年代／根据	19世紀初期／建築様式	構造・形式	正面1間(3.67m)、側面2間(5.29m)、入母屋造、銅板葺
工 匠	不明	基 础	切石
輪 部	角柱、土台、虹梁、貫、台輪	組 物	〔内部〕大斗肘木
中 備	束立笈形付	軒	一軒繁垂木
妻 飾	木連格子、燕懸魚	柱 間 裝 置	漆喰壁
縁・高欄・脇障子	三方大床切目縁脇障子(板)、擬宝珠高欄	床	拭板
天 井	化粧小屋裏	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木、朱塗(高欄、脇障子軸)	飾 金 物 等	なし
繪 画	なし	材 質	不明
彫 刻	木鼻(拳)、虹梁(唐草絵様)		



写44-17 北面



写44-18 外部組物



写44-19 内部組物

間絵図」には神楽殿は描かれていないが、文政12年(1829)の「玉村八幡宮祭礼図」には描かれている。また当神社は建造年代について文化年間(1804~1818)頃と伝えている。以上のことから当建物の建造年代は19世紀初期頃と推定される。

#### 末社国魂神社(旧玉村尋常高等小学校奉安殿) (図44-5、表44-7、写44-20~44-22)

当建物は、玉村小学校の奉安殿として明治43年(1910)に建築されたものである。『玉村小学校八百年史』(昭和57年)に記されている。奉安殿とは天皇皇后陛下の写真と教育勅語を安置する建物で、GHQの指令で戦後焼却されるなどし現存するものは少なく貴重である。当建物は戦後地元の人々により玉村八幡宮に移築され、昭和45年(1970)に国魂神社の社殿となった。正面1間、側面1間の切妻造銅板葺平入とし木造の小規模な建物である。外部は壁面、扉をトタンで覆われている。内部は背面側に内陣を設け、外陣床、壁とも板張りとし天井は格天井とする。

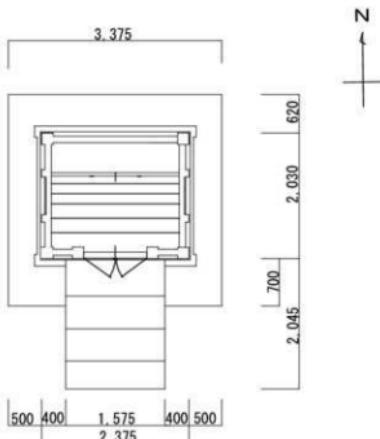


図44-5 平面図(国魂神社)

表44-7 村社国魂神社(旧玉村尋常高等小学校奉安殿)

建造年代／根据	明治43年(1910)／『玉村小学校百八年史』昭和57年(1982)	構造・形式	正面1間(2.35m)、側面1間(1.99m)、切妻造、平入、銅板葺
工 匠	不明	基 础	鉄筋コンクリート
輪 部	角柱	組 物	なし
中 備	なし	軒	一軒半繁垂木
妻 飾	虹梁束立	柱 間 裝 置	〔外部〕開戸トタン張、側背面トタン張 〔内部〕板壁
縁・高欄・脇障子	なし	床	〔内陣〕不明 〔外陣〕拭板
天 井	〔内陣〕不明 〔外陣〕格天井	須弥壇・扇子・宮殿	不明
塗 装	胡粉塗(垂木)、朱塗(扉内側)	飾 金 物 等	小口金物
絵 画	なし	材 質	不明
彫 刻	なし		



写44-20 南面



写44-21 東面



写44-22 内部

### まとめ

当神社は町の鎮守として古くから人々の信仰を集め、現在多くの参拝客が訪れる。本殿は装飾が少なく簡素な造りで江戸初期の様式を表し県内の神社建築の流れを知る上で貴重な建物である。拝殿、幣殿は江戸中期に建築されたものであるが、虹梁や彫刻などの様式にその特徴がよく表されている。また境内には戦前教育の一端を担った国魂神社が存在する。本殿の江戸初期から隨神門の幕末、更に明治期に至るまでの歴史的建造物を保持している。また紙

祭など町の文化の中心地としても評価が高く保持されている。以上のことから当神社は歴史的・文化的価値が大変高いものである。

(角倉ゆき枝)

### [参考文献]

『玉村八幡宮社誌』玉村八幡宮 宮司 梅林肇 平成25年  
『玉村町誌 別巻III 玉村町の建造物』玉村町 平成3年  
『重要文化財 玉村八幡宮本殿 保存修理工事報告書』宗教法人 玉村八幡宮 平成3年

## 45 (角渕)八幡宮 ((つのぶち)はちまんぐう)

表45-1

神社名	八幡神社	所在地	佐波郡玉村町角渕2075
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人 八幡神社
主祭神	誉田別命	神事	例大祭(4/15、10/15)、角渕紙園祭(7月前半土日)
創立・沿革	建久4年(1193)源頼朝が那須野での狩りの帰りに角渕で休み、烏川の風景が鎌倉の由比ヶ浜に似ているというので、足立盛長に命じて鎌倉の鶴岡八幡宮の分靈を勧請せしめたのが角渕八幡宮のはじめという。榮華をほこっていたが、荒廃による荒廃や再建を繰り返した(「上野那波郡玉村府内角渕八幡宮縁起」より)。		
文化財指定	紙園祭(角渕)(町重無民 昭和46年4月)		

位置·配置(图45-1、图45-1)

佐波郡玉村町の南、玉村町から新町へ向かう県道藤岡大胡線の東側、烏川より北に600m程の位置にある。参道は烏川土手沿いから北に延びる公道と境内に入る部分から本殿までとに別れている。建物配置は敷地中央部に拝殿般殿本殿と直線に北に延び、同東に山車小屋、宝物殿を配している。境内参道西

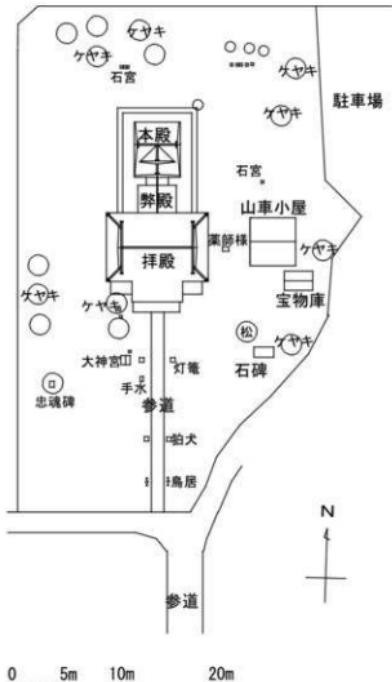


图45-1 配置图



### 写45-1 境内全景

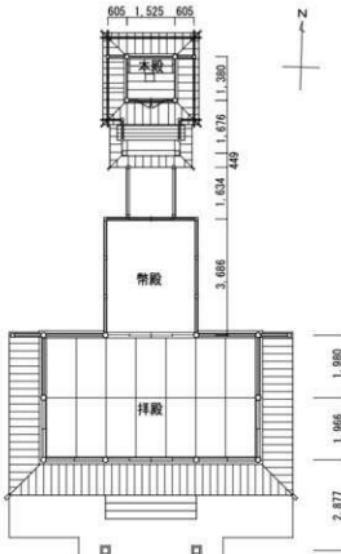


图45-2 平面图(社殿)

に水神様を祀る。又その参道入り口付近には、源頼朝が腰かけたと伝わる石があり、本殿南西には天保2年と刻まれた石灯籠もある。拝殿南西には文政10年の石宮があり、東側には薬師様の石像がある。

### 由来および沿革

「上野国那波郡玉村府内角渕八幡宮縁起」によるところ、建久6年(1195)源頼朝が立ち寄った際、烏川の風景が鎌倉の由比ヶ浜に似ているということで上野奉行足立九郎盛長に命じて、鶴ヶ岡八幡宮より御分霊を勧請し角渕八幡宮が創建された。玉村保の地頭玉村太郎の領地で交通の要地であり薬師如来の祭られていた地であった。本堂本社・鐘楼・山門・鳥居が建立され、49社が奉祀された。その後足立氏・玉村氏の滅亡と戦乱により大破していたが、応永18年(1411)関東管領足利満家により再建されたが後に全焼、更に永正4年(1507)白井城主家臣吉里対馬入道が再建したがこれも兵乱により大破していた。慶長10年(1605)、関東郡代伊奈備前守忠次が角渕八幡宮

に玉村一帯の新田開発を祈願し、滻川用水をひいてこれに成功すると、慶長15年(1610)荒廃した角渕八幡宮の社殿を玉村の上新田と下新田の境に移築修造し神靈を遷し、玉村八幡宮と名を改め奉った。現在の角渕八幡宮の社殿は江戸時代後期に建築されたものである。

### ほんてん 本殿 (図45-2、表45-2、写45-2~45-7)

一間社流造側面1間で1間の向拝を配する。幾度か改修がなされているが、平成22年に銅板葺替等の修復が行われた。身舎組物は二手先出組で中備は彫刻が嵌め込まれた木臺股である。木鼻には1か所に10匹の神獣が見られる。外部は腰から軒下に至るまで浮彫、透し彫、丸彫の精巧で迫力ある彫刻で飾られている。向拝内側に見られる唐草絵様は、渦の巻きが浅く、若葉が渦に接しており装飾化も進んでいる。登り高欄の右上擬宝珠に天保2年(1831)の刻銘がある。また古文書の「角渕村明細書帳」には、「天保二卯年再興御本社五尺四方」の記述がある。

表45-2 本殿

建造年代／根据	天保2年(1831)／擬宝珠の刻銘	構 造 ・ 形 式	一間社流造(1.52m)、側面1間(1.38m)、千鳥破風付、向拝1間軒唐破風付、銅板葺
工 匠	不明	基 础	切石基段1段、亀腹
軸 部	[身舎]土台なし、丸柱、貫、長押 [向拝]角柱、虹梁、海老虹梁、手挟	組 物	[身舎外部]三手先 [腰組]二手先 [向拝]二手先
中 備	[身舎外部]彫刻臺股 [向拝]嵌込彫刻	軒	[正面]打越二軒繁垂木 [背面]二軒繁垂木
妻 飾	[身舎]二重虹梁大楓束笠形付、板支輪、燕懸魚	柱 間 装 置	棟唐戸、板壁
縁・高欄・脇障子	四方切目縁脇障子、腰組付、擬宝珠高欄、登高欄付	床	拭板張
天 井	竿縁天井		須弥壇・扇子・宮殿なし
塗 装	素木	飾 金 物 等	小口金具、棟唐戸(隅金具、辻金具、一字文字金具)、破風(拝金具、破風尻金具)
繪 画	なし	材 質	檜
彫 刻	[身舎]正面(昇龍降龍)、正面本柱(梅)、側背面壁(中国故事)、脇障子(松と牛)、幕殿(鳥・植物)、木鼻(神獣10匹)、長押(地紋彫)、妻虹梁(唐草様)、軒支輪(浮彫) [腰組]腰壁(波と獅子)、腰長押下(波) [向拝]柱(地紋彫)、虹梁(表:植物浮彫 裏:唐草様刻線彫)、海老虹梁(表:唐草様刻線彫と地紋彫 裏:唐草様)、幕殿(龍)、木鼻(獅子)、手挟(松)、唐破風下(不明)、浜床壁面(波と亀)		



写45-2 全景



写45-3 背面



写45-4 向拝侧面



写45-5 妻飾



写45-6 向拝唐草様



写45-7 東面腰組

装飾化された細部意匠や建築的特徴から天保年間頃の建築とみてよいであろう。

#### 拝殿 (図45-2、表45-3、写45-8~45-10)

建造年代は棟札 (『玉村町誌』による) や内壁面の刻銘によると嘉永2年(1849)である。内壁面の刻銘により大工は当所の田中茂三郎ほか2名、彫物師は中山道吹上村内田徳森とある。正面3間側面2間入母屋造瓦葺平入で、正面に1間の向拝を配する。手挾と墓股に透し彫が見られ、それぞれ松や植物が題材である。墓股は肩が丸く足も伸びている。海老虹梁は反りが見られ段差を付けて架けられている。

## まとめ

角渕八幡宮は創建以来の歴史の中で盛衰を繰り返してきたが、玉村八幡宮の本宮として、また地域の鎮守として敬われ、江戸時代から続くという角渕祇園祭も賑わいを見せる。当建物は精巧な彫刻や建築的特徴により、装飾化の進んだ江戸時代後期の様式をよく表す建物として価値がある。

(角倉ゆき枝)

#### [参考文献]

- 『玉村町誌 別巻II「玉村町の文書』 玉村町 昭和63年
- 『玉村町誌 別巻III「玉村町の建造物』 玉村町 平成3年
- 『玉村八幡宮社誌』 玉村八幡宮 宮司 梅林肇 平成25年

#### 表45-3 拝殿

建造年代／根拠	嘉永2年(1849)/ 棟札、内壁面の刻銘	構 造 ・ 形 式	正面3間(6.80m)、側面2間(3.94m)、入母屋造、平入、向拝1間、瓦葺
工 匠	[大工]棟梁:當所 田中茂三郎、井田又左エ門、武内若狭 [彫工]中山道吹上村 内田徳森	基 础	コンクリート基礎
軸 部	[身合]土台なし、丸柱、貫、長押 [向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁、手挾	組 物	[身合外部]拳鼻付突出組 [身合内部]平三斗 [向拝]拳鼻付変形突出組
中 備	[身合]彫刻墓股 [向拝]嵌込彫刻	軒	[正面]打越二軒繁垂木 [側背面]二軒繁垂木、板支輪(彫刻)
妻 飾	虹梁、嵌込彫刻、蕉懸魚	柱 間 裝 置	アルミ戸引連、舞良戸引連、板壁
締・高欄・船障子	三方大床切目縁、船障子	床	疊敷
天 井	格天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木	飾 金 物 等	小口金具、破風尻金具
繪 画	[内部]天井画(花鳥)桂芳(墨書)	材 質	[柱]柳、[長押]桧、[垂木]杉
彫 刻	[身合外部]虹梁(唐草絵様)、木鼻(獅子)、墓股(花・植物)、支輪(波) [身合内部]虹梁(菖蒲) [向拝]柱(地紋彫)、虹梁(唐草絵様)、墓股(龍に波)、木鼻(獅子)、手挾(松)		



写45-8 全景



写45-9 向拝海老虹梁



写45-10 内部天井 虹梁

## 46 火雷神社【からいじんじゃ】

表46-1

神社名	火雷神社	所在地	佐波郡玉村町下之宮甲524
旧社格	郷社	所有者・管理者	宗教法人 火雷神社
主祭神	火雷神	神事	節分祭、蚕蠶祭(3/15)、春祭り(4/3)、秋祭り(10/17)、夏薪御神事(旧10月末~)
創立・沿革	第10代崇神天皇元年の創建と言われ、景行天皇の時代に上野の国御絶別王が祀ったと言われる。延暦15年(796)官社となる(「下之宮火雷神社縁起」)。		
文化財指定	麥稭御神事(下之宮)(町重無民 平成12年4月)、脇差(藤枝太郎英義作)(町重文平成12年4月 玉村町歴史資料館保存)		

### 位置・配置 (図46-1、写46-1)

北に利根川を控えた当地東の端にあたる。佐波郡玉村町を通る国道354号線下之宮交差点を南に入り、少し先の細い道を進むと参道入り口がある。内に進むと石鳥居、小さな石橋を経て狛犬を見て拝殿に出る。境内は南北に長い。参道の西には社務所と神楽殿があり、その北に蚕蠶神社がある。本殿西側には大きな立ち木(櫻、桜)が林立し、そこにひつそりと19社の小さな石宮が祀られている。

### 由来および沿革

上野12社のうち八の宮になっている。本神社は旧郷社とされている。第10代崇神天皇元年の創建とされ、その後、景行天皇の代に、東国に派遣された御絶別王(崇神天皇四世孫)も祭祀したと伝わる。泰

斎氏族は佐味と考えられていると記されている。この宮は利根川をはさんである倭文神社を上之宮としていることからそこと対峙していたため「下之宮」されたため現地名となっているといわれている。



写46-1 参道より境内

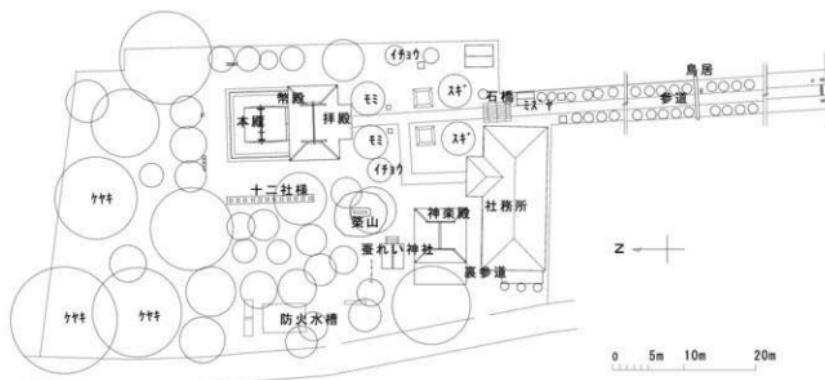


図46-1 配置図

「延喜式」神社帳に上野の国那波郡には「火雷神社」と記され式内社にされている。また、長元3年(1030)の「上野國交替実錄帳」に「正二位火雷神社」とある。「上野國神名帳」には、總社本に鎮守10社の8番目、一宮本で同10番目「從一位火雷大明神」と記されている。近世の天神信仰により「火雷神社」と称され、明治5年(1872)、近代社格制度により郷社とされた。

#### 本殿(図46-2、表46-2、写46-2~46-7)

大工、工匠などは不明。構造、規模は三間社流造銅板葺き平入り、側面2間、輕木、置千木一对を載せている。切り石の基壇に土台を載せ向拝は角柱、水引、海老虹梁、木鼻、板支輪を備え、身舎は丸柱、切目縁、内法長押、頭貫、拳木鼻組み物として、向拝が連三斗、身舎に二手先三斗。中備には身舎に彫刻蔓股がある。軒は、正面が打越二軒重垂木、背面、側面は二軒、蛇腹支輪、板支輪。妻飾は二重虹梁太平東笈型付き鰐付き燕懸魚。柱間装置には彫刻入り棟唐戸、側、背面と脇障子に墨絵施され四方切目縁高欄浜床も残る。天井は竿縁、身舎正面に向拝覆屋下に極彩色の絵様がある。銚金物も棟唐戸、長押、破風に付けられている。特に彫刻は身舎の正面蔓股に花鳥棟唐戸に花鳥(雉)支輪正面に花、側面に花、背面が松に兎他。脇障子には唐の故事由来を思わせる人物や花鳥などが、向拝の木鼻に

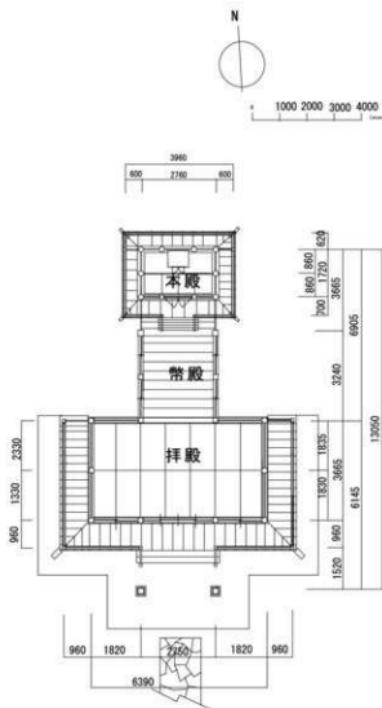


図46-2 平面図(社殿)

表46-2 本殿

建造年代／根拠	18世紀前半／建築様式	構造・形式	三間社流造(2.76m)、側面2間(1.72m)、向拝1間、銅板葺
工 匠	不明	基 础	切石
軸 部	【身舎】土台、丸柱、切目・内法長押、頭貫、木鼻、拳木鼻組み物	物	【身舎】二手先出三斗 【向拝】連三斗
中 備	【身舎】彫刻蔓股 【向拝】不明	軒	【正面】打越二軒繁垂木、彫刻板支輪、背面二軒蛇腹支輪、側面蛇腹支輪、板支輪
妻 飾	二重虹梁太平東笈型付 鰐付き燕懸魚	柱 間 装 置	【正面】棟唐戸一部彫刻あり 【側面】【背面】墨絵
縁・高欄・脇障子	四方切目縁、浜床、登高欄、高欄、脇障子	床	不明
天 井	竿縁	須弥壇・扇子・宮殿	厨子あり
塗 裝	【身舎】正面に向拝覆屋下 極彩色 [厨子]ベンガラか漆 外部ベンキ塗り	飾 金 物 等	棟唐戸・長押と柱交差部・端部 破風 端部・中央
絵 画	【身舎】正面切目長押下	材 質	【丸柱】櫻 【角柱】杉
彫 刻	【身舎】正面蔓股(鳥、花 棟唐戸 鳥、花) 正面支輪(花) 側面蔓股(花) 背面蔓股(松、兎他) 脇障子 右は(松と人物) 左は(菊と人物) 【向拝】木鼻 側面(龍 手挾 篠彫 花)		



写46-2 全景(東)



写46-3 西側面



写46-4 本殿正面(幣殿より)



写46-5 本殿組物



写46-6 本殿海老虹梁



写46-7 銚金物、組込絵様

は龍、手挟には花などの籠彫りがあしらわれている。建造年代は「下之宮火雷神社縁起」に寛永4年(1627)とあるが虹梁の若葉などの建築様式から18世紀前半と推定する。

#### 拝殿 (図46-3、表46-3、写46-8～46-10)

大工、工匠などは不明。構造、規模は三間社流れ造り瓦葺入母屋造平入り、側面2間、自然石の基礎、向拝は角柱、水引虹梁に年代が下がると思われる彫刻(梅など)あり、木鼻は極彩色の象と獅子を

備え、身舎は丸柱、切目縁、内法長押、縁長押には唯一の金物が四隅にある。拳木鼻組み物として、向拝が連三斗、身舎に平三斗。向拝中備には彫刻幕板がある。軒は、正面が二軒重垂木、背面・側面は二軒、妻飾は猪の目懸魚のみ。柱間装置には正側面格子戸、板脇障子三方切目縁高欄。天井は格天井花鳥の絵が描かれている。

銚金物は縁長押四隅にみる。特に彫刻は身舎なく向拝の正面水引虹梁に梅の枝が、手挟、水引、海老虹梁には唐草などの彫りがあしらわれている。建

表46-3 拝殿

建造年代／根拠	19世紀前半／建築様式	構 造 ・ 形 式	正面3間(6.39m)、側面2間(3.665m)、入母屋造、平入、向拝1間、瓦葺
工 匠	不明	基 础	自然石
輪 部	[身舎]丸柱、切目・内法長押、頭貫、拳鼻 [向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁、木鼻獅子、象	組 物	[身舎]平三斗 [向拝]連三斗
中 備	[身舎]なし [向拝]彫刻幕板	軒	[正面]二軒繁垂木、背面 二軒、側面 二軒
妻 飾	猪目懸魚	柱 間 裝 置	[正面]格子戸腰舞ら戸 [側面][背面]格子戸
幕・高欄・船障子	三方切り目縁、浜床、登高欄、高欄、脇障子(板)	床	疊:
天 井	格天井、絵画(花鳥)	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 裝	[身舎]輪部・組み物 朱塗り [向拝]木鼻、水引虹梁 極彩色	飾 金 物 等	縁長押角
絵 画	[身舎]天井画	材 質	[丸柱]櫛 [角柱]杉
彫 刻	[身舎]水引、海老虹梁(唐草) [向拝]水引虹梁(地紋、梅)、木鼻正面(獅子)、側面(象)、手挟(唐草)		



写46-8 拝殿正面



写46-9 木鼻



写46-10 海老虹梁



写46-11 水引虹梁背面



写46-12 幂殿への柱間



写46-13 天井繪

造年は「下之宮火雷神社縁起」に寛永4年(1627)とあるが虹梁の若葉などの建築様式から19世紀前期と推定する。

### まとめ

火雷神社としては南北朝時代成立の「神道集」に「八宮ヲハ那波の上之宮火雷神社」とあることから、歴史的には古くから祀られていると思われる。今回残念ながら、棟札等は天井裏にも発見できず確証が得られなかった。そのため、大工をはじめとした

工匠は不明である。水引、海老虹梁、幕股、木鼻、手鍊などの彫刻や銹金物、支輪、地覆などに施された絵様、外部柱間の墨絵などが目を引く。

また、彩色された内陣内の厨子の造りも良く保存状態も良い。

(福田峰雄)

### 【参考文献】

『群馬県の地名』平凡社 昭和62年

『中世諸国一宮制の基礎的研究』中世諸国一宮制の研究会編 平成12年

## 47 あら町諏訪神社（あらまちすわじんじゃ）

表47-1

神社名	あら町諏訪神社	所在地	高崎市あら町85-1
旧社格	無格社	所有者・管理者	あら町会
主祭神	建御名方神、速須佐命、宇氣母智命	神事	春季例大祭(4/27)
創立・沿革	慶長4年(1609)に箕輪下社より、この地に移される。戦国時代武田信玄の持つ48個のご宝石の内二つを沼田城主の真田氏が信州諏訪神社より譲受け箕輪上に祀った。そのうちの一つを祀っている。元々は同市下町造堀条東側にあった八坂神社をこの地に移設。その後文化4年(1807)諏訪神社が消失、同11年(1814)4月に新しく造営し遷宮される。明治43年(1911)高崎神社に合祀。		
文化財指定	新町諏訪神社本殿及び御宝石(市重文 平成2年2月)		

位置・配置(図47-1、写47-1)

現高崎市役所の東南、JR高崎駅より駅前通りを市役所に向かって進むと田町通りとの交差点すぐ脇にある。区画整理前はその田町通りに面してあった。現在は市役所通りに面して10mの参道があり、区の集会所と地区山車庫と共に鎮座する。三方を高層の建物に囲まれて少し暗い。大きな通りに面しているため人通りも車の往来もかなり多く喧騒の中に

ひっそりと佇んでいる。

### 由来および沿革

慶長4年(1599)、箕輪城下の下社よりこの地にうつされたと地誌「高崎誌」にある。戦国時代、武田信玄の持つ49個の御宝石の二つを沼田城主の真田氏が信州の諏訪神社より譲受け箕輪城に祀った。そのうちの一つをお祀りしている。元は高崎市下町、造堀条東側にあった八坂神社をこの地に移した。その後、文化4年(1807)に諏訪神社消失、同11年4月新しく造営され、遷宮された。明治40年(1907)8月24日に高崎神社に合祀された(町保存会役員さんより)。

享保14年(1729)文化4年(1807)の二度の火災にあって。近年の修復工事の折、屋根材や彫刻の一部にその痕跡が残る。礎石背面に文化11年(1814)の刻銘がある。高崎城下の名所の一つであったらしく、太田蜀山人の「壬戌紀行」にも紹介される。また、信州諏訪にゆかりの御宝石は宝篋印塔の台座に安置されている。

本殿(図47-2、表47-2、写47-2~47-7)

二度の火災に遭っているため、初期の造営は不明



図47-1 配置図



写47-1 参道より

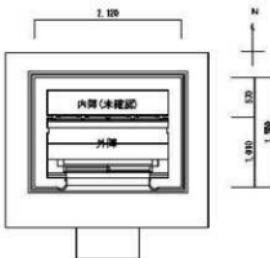


図47-2 平面図(本殿)

であるが、文化11年(1814)の再建の記録は境内に残る礎石に刻まれている(文化11甲戌 初夏良且造為)大正14年(1925)瓦葺きを銅板に葺き替え、平成20年に塗り壁、平成26年に屋根等を修理している。

正面1間、側面1間の一間社入母屋造銅板葺千鳥破風付平入、向拝なし。

自然石の基壇、身舎丸柱左官塗込、拳木鼻、中備えに彫刻欄間がある。軒は一軒疊垂木。妻飾はない。

柱間装置として正面に格子引き違戸。側面、背面は木彫となっている。

外観は2層の入母屋に見えるが、裳階のついた平屋建で外観は腰部分は海鼠壁、上が漆喰塗壁となっている。その絵柄は、七賢人を表した手の込んだ漆

喰彫刻である。波しぶき、飛龍、牡丹、正面には昇龍、下龍などを塗り込んだ鳥居を同化している。その左官の業は目を見張る。

### まとめ

市街地にあるお宮であることから数度にわたり火災にみまわれ今の外観になったと思われる。一般的な木造のお宮の形式とはかなり違った市街地にある防火建築としての特異的な形を成している。ただ、今でも地域の人々が大切に保存している様子はうかがえる都市型寺社建築としても価値があり左官漆喰彫刻は見事である。

(福田峰雄)

表47-2 本殿

建造年代／根拠	文化11年(1814)／礎石刻銘	構 造 ・ 形 式	一間社入母屋造(2.12m)、側面(1.58m)、平入り、千鳥破風付銅板葺
工 匠	初期は不明、大正10年造営時は新井富次郎	基 础	自然石
軸 部	[身舎]丸柱、左官塗込	組 物	[身舎]なし
中 備	[身舎]嵌込彫刻欄間	軒	[身舎]一軒疊垂木
妻 飾	なし	柱 間 裝 置	[正面]格子引き戸　[側面] [背面]木彫(中國故事)
縁・高欄・脇障子	なし	床	不明
天 井	外陣：格子	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	[身舎]素木	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 贊	不明
彫 刻	[身舎]木鼻(渦)、欄間、扉(左官塗込彫刻)		



写真47-2 正面



写真47-3 本殿正面



写真47-4 側面



写真47-5 背面



写真47-6 漆喰彫刻



写真47-7 内陣柱間装置　扉は先の火災の焦げ跡が残る

## 48 倉賀野神社〔くらがのじんじゃ〕

表48-1

神社名	倉賀野神社	所在地	高崎市倉賀野町1263
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人 倉賀野神社
主祭神	大國魂天神	神事	冠稲荷初午大祭(2/11)、春季例大祭(4/19)、秋季例大祭(10/19)
創立・沿革	第十代崇神天皇の御代、皇子の豊城入彦命は父帝から東国を平定するよう命ぜられ、出立の時に御愛石(亀形の自然石)を受けられた。倭大國魂神の御分靈といわれ、命は当地に至るや、御愛石を御魂代として祭祀をされたという。今もご本殿に奉安される(社伝)。		
文化財指定	倉賀野神社本殿(市重文 平成4年3月)、倉賀野神社算額(市重文 昭和51年1月)		

## 位置・配置(図48-1、写48-1)

高崎市南部、旧中山道の倉賀野宿であった地域に位置する。北側には東西に旧中山道が走り、西側には古墳群があり、南側には倉賀野中学校や倉賀野城跡があり、その先に烏川が東流している。東側の市道から表参道に入り鳥居をくぐると手水舎、社務所、参集殿がある。その先にある社殿は東側を正面とする。社殿の南側から西側にかけて、国魂池、北向道祖神、神楽殿、山車庫、甲子大黒天、冠稲荷

社、神奥倉、天神社、末社が並ぶ。社務所の南側には飯玉会館や宮司宅があり、参拝者用の駐車場がある。

## 由来および沿革

大同2年(807)、坂上田村麿は東征凱旋の途中、この地で造営舞楽を奏上した。この時の翁面が社宝として伝わる。建長5年(1253)武藏七党の児玉党の



図48-1 配置図



写48-1 境内全景

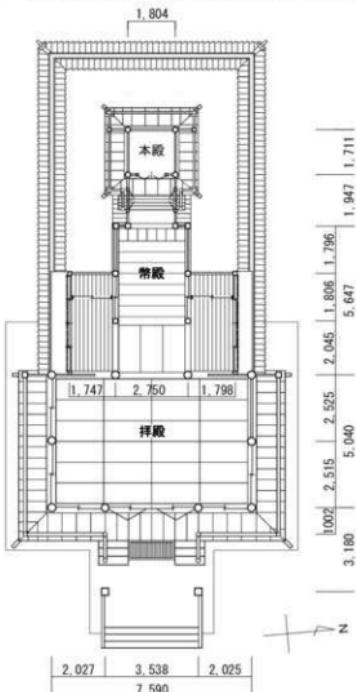


図48-2 平面図(社殿)

余流、倉賀野三郎高俊が社殿を造営。倉賀野氏の氏神としてこの地に修復・造営が重ねられ、江戸時代は近隣七ヶ郷の總鎮守となる。旧社名は飯玉大明神。明治10年(1877)に大國魂神社と改称し、明治43

年(1910)に近隣神社合祀を経て倉賀野神社となる。

ほんてん  
本殿(図48-2、表48-2、写48-2~48-7)

古文書によると本殿は嘉永6年(1853)年に境内の

表48-2 本殿

建造年代／根拠	慶応2年(1866)／古文書	構造・形式	一間社流造(1.80m)、側面1間(1.71m)、向拝1間、正面・背面軒唐破風付、銅板葺(当初檼葺)。(権現造)
工 匠	[大工]藤岡 寺大炊 [彫工]高崎 新井金十郎、勘藏、信州 北村喜代松／古文書 [柿師]高崎 加藤嘉兵衛六代孫一清／棟札	基 础	玉石積基壇1段(社殿全面)、切石積基壇1段、布基礎石
輪 部	[身舎]丸柱、長押(切目、腰、内法)、頭貫〔腰組〕丸柱、土台、足元長押、足元貫、台輪〔向拝〕角柱、長押(半、腰)、水引虹梁、二重虹梁 海老虹梁、差鴨居、手扶	組 物	[身舎]四手先組、尾垂木〔腰組〕拳鼻付出組〔向拝〕連三斗積上菱形(斗・肘木4段)
中 備	[身舎]詰組、嵌込彫刻〔向拝〕嵌込彫刻	軒	二軒累垂木、彫刻板支輪
妻 鮑	[駕]二重虹梁菱形付太瓶束、三手先組、尾垂木、嵌込彫刻、彫刻板支輪〔破風〕反り破風、瑞雲賜付猪目懸魚、六葉、降懸魚(浮彫 瑞雲)	柱 間 裝 置	[身舎正面]諸折線唐戸〔身舎側面背面〕鏡板張〔向拝部側面〕内開枝唐戸、ガラス嵌ごろし
縁・高欄・脇障子	四方切目縁、削高欄、登高欄付、脇障子	床	不明
天 井	不明	須弥壇・扇子・宮殿	不明
塗 裝	全体的に素漆、朱塗(木鼻等靈獸の口、兎毛通萬の口、向拝目抜龍 口・腹・玉、大床鐵込影刻 鯉の鱗)、黄・黒(靈獸の目)、白(組物一部、垂木端部)	飾 金 物 等	正面諸折線唐戸の鎌金具、隅縁葛端部入八双金物
繪 画	不明	材 質	檜、杉、松
彫 刻	[身舎外部]土台(地紋彫 鎧苗紋様)、足元貫(地紋彫 紗綾形紋様)、腰羽目彫刻(透彫 龜・波、兎・波、羊・波)、正面大床鐵込影刻(透彫 鯉)、正面胴羽目彫刻(透彫 异龍、降龍)、内法長押、頭貫(地紋彫 入子菱紋様)、拳鼻(刻線彫 唐草紋様、尚渦紋様)、木鼻(九形 獅子)、嵌込彫刻(透彫 獅子、千鳥・波、鳩・松)、板支輪(浮彫 菊水、雲鶴、摩耶羅)、兎毛通(透彫 鳳凰)、妻部虹梁(浮彫 菊水、唐草紋様)、妻飾嵌込影刻(透彫 夫婦鶴、雲鶴、瑞雲、鷹・兔、龜)、大瓶東下部(九形 離鶴)、笠形(透彫 菊水)、脇障子柱(地紋彫 算木菱紋様)、脇障子架木(地紋彫 入子菱算木紋様) [向拝]水引虹梁上嵌込影刻(透彫 目抜龍)、水引虹梁(浮彫 唐草紋様)、二重虹梁(刻線彫、沈彫 唐草紋様)木鼻(九形 獅子)、拳鼻(刻線彫 唐草紋様)、海老虹梁(九形 女龍男龍)、太鼓羽目彫刻(透彫 松)、兎毛通(透彫 鷹・松)、差鴨居(地紋彫 菱青海波紋様)、手扶(透彫、飛竜・波)		



写48-2 全景



写48-3 正面



写48-4 背面



写48-5 妻面



写48-6 海老虹梁



写48-7 正面 梁唐戸・羽目彫刻

社木を伐採して工事が開始された。嘉永7年(1854)に「飯玉宮御普請仕様書」と「飯玉宮御本社木割仕様帳」が作成され本殿と幣殿の見積がされた。安政3年(1856)の倉賀野宿の大火で工事は一時停滯するも、元治2年(1865)3月に上棟の儀式が行われ、慶応2年(1866)に完成した。柿師による慶応元年(1865)8月の棟札も残る。奉納額より明治24年(1891)に屋根修繕、明治33年(1900)の柿葺改修。群馬県知事への銅使用届より昭和12年(1937)に柿葺から特許山中式檜皮形銅板平葺へ改修。令和2年(2020)には御代替り奉祝記念事業として銅板葺替工事が行われた。

本殿と幣殿は工匠が同じで、大工は藤岡の宮寺大炊、彫工は、高崎市の新井金十郎、勘藏、信州の北村喜代松である。宮寺大炊は倉賀野河岸鎮座の大杉神社拝殿・幣殿の普請にも関わり、建物は現在、棟東村の八幡宮社殿として移築されている。新井金十郎は棟名神社国租社の修復で腕を振るった。

現在の社殿は本殿・幣殿・拝殿の屋根が連続する権現造であるが、本殿は一間社流造である。軒は二軒繁垂木であり、前面は地垂木、打越垂木、飛檐垂木と3段に軒を伸ばす。内部は未確認だが、「新編高崎市史 資料編14 社寺」より内陣と外陣からなる。組物は身舎が尾垂木付の四手先組で、腰組が拳鼻付組である。向拝は連三斗積上変形で、斗・肘木が4段ある。中備や妻飾には嵌込彫刻や彫刻板支輪があり、壁や脇障子は鏡板張である。減り張りのある彫刻配置なので細やかな彫刻も目に付きやすい。

#### 幣殿(図48-2、表48-3、写48-8~48-10)

工事が完成したのは古文書より本殿と同時期で慶応2年(1866)と推定する。本殿とは異なり、この時の拝殿と幣殿の状態を示す資料はない。元治2(1865)年4月6日付けの「普請臨時諸控之簿」に屋根葺の記載があり、本殿と幣殿の屋根の取合い部が図で示されている。本殿と幣殿は一体的であ

表48-3 幣殿

建造年代／根拠	慶応2年(1866)／古文書より推定	構造・形式	正面1間(2.75m)、側面3間(5.64m)、両下造 桟瓦葺(権現造)
工 匠	[大工]藤岡 宮寺大炊 [彫工]高崎 新井金十郎、勘藏、信州 北村喜代松／古文書 [柿師]高崎 加藤嘉兵衛六代孫一清／棟札	基	礎 玉石積基壇1段(社殿全面)、礎石(切石)
軸 部	八角形柱、土台、内法長押、頭貫、台輪、丸柱(拝殿2本)、角柱(本殿向拝間2本、増築部)、差鴨居(正面、外側は虹梁型)	組 物	[外側]拳鼻付組 [外側本殿向拝接続部]連三斗 [屋内]拳鼻付二手先組
中 備	[外側]嵌込彫刻 [屋内]幕板(側面)、詰組(正面)	軒	二軒繁垂木、彫刻板支輪
妻 飾	なし	柱 間 装 置	鏡板張、障子 [増築部]ガラス戸、舞良戸、格子
縁・高欄・脇障子	なし	床	盤、拭板張
天 井	井板(格天井(鏡板)) [増築部]目透天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	全体的に素木、格縁(朱塗・黒)	飾 金 物 等	なし
繪 画	なし	材 質	漆
彫 刻	拳鼻(刻線彫 唐草紋様)、絵様実木(刻線彫 満紋様) [外部]木鼻(丸彫 獅子、獣)、嵌込彫刻(透彫 千鳥と波)、板支輪(浮彫 菊水) [拝殿側正面]木鼻(籠彫 牡丹)、虹梁型差鴨居(浮彫 唐草紋様)、虹梁型差鴨居中備下部(丸彫 獅咀)		



写48-8 側面



写48-9 外部組物



写48-10 天井

り、少なくとも、この時点では幣殿の本殿側の小屋組はできていたと考えるのが自然である。柿師は8月に「奉葺壹宇處」と棟札に書いており、9月に屋根葺の代金を受け取っている。その後の代文支払いに関する資料がないことから、幣殿の屋根の代金も含まれており、本殿と幣殿で毫末、すなわち一棟の建物と捉えていたと考えられる。また、3月の上棟式の様子を描いた図は、本殿に行くために幣殿に梯子をかけているように見える。慶応3年(1867)7月付けの「飯玉宮拝殿修復願母子連名簿」に本殿と幣殿が完成したことと、拝殿がいまだに大破の状態であることが述べられているが、慶応2年(1866)9月に行われた遷宮の時には本殿と幣殿は新築され、拝殿は元の位置に戻し幣殿と接続されたと推定する。

棟札より明治33年(1900)に柿葺から瓦葺に改修、奉納額より昭和27年(1952)に屋根修繕。宮司より幣殿両側面の増築は昭和30年代である。奉納額より昭和39年(1964)に瓦の葺き替えをした。

規模は正面1間、側面3間で両下造棧瓦葺である。両側面に各4疋の大きさの増築部がある。内部

は、もとは一室である。南側の増築部の床下は外部物置であり、本殿玉垣内への通路も兼ねている。組物は外側が拳鼻付組で、屋内が拳鼻付二手先組である。外部出組の通肘木・丸桁間は彫刻板文輪で、屋内二手先組の通肘木間は板支輪である。中備は外部が嵌込彫刻で、屋内は側面が幕股、正面が詰組である。壁面は鏡板張である。本殿と幣殿の彫刻では、新井金十郎が安政2年(1855)8月に仕事始めをして12月にかけて木鼻の獅子などを彫った。倉賀野宿の大火での中断後、文久3年(1863)に勘藏が仕事をしている。勘藏は元治元年(1864)に途中、信州善光寺で3か月仕事をして戻り海老虹梁等を彫った。その後に北村喜代松が善光寺仁王門復旧工事から合流し以後二人で仕事をした。勘藏は嘉永2年(1849)、戸隠神社中院旧社殿の彫工棟梁としても腕を振るっている。

#### 拝殿(図48-2、表48-4、写48-11~48-13)

本殿・幣殿の新築時、拝殿は新築せず以前のものが継続して使われた。古文書には明治8年(1875)に

表48-4 拝殿

建造年代／根拠	明治8年(1875)／古文書	構造・形式	正面3間(7.59m)、側面2間(5.04m)、入母屋造、平入、千鳥破風付、向拝1間軒唐破風付、棧瓦葺(権現造)
工 匠	[大工]藤岡 富吉大炊 [彫工]信州 北村喜代松／古文書、高崎 石川兼次郎藤原豈重／刻銘	基 磯	玉石積基壇1段(社殿全面)、礎石(切石)、布基礎石 [向拝]脊石、檼盤
軸 部	[身舎]丸柱、地覆、切目長押、差鴨居(外側は虹梁型)、須貫 [向拝]角柱、水引虹梁、二重虹梁、海老虹梁、手扶	組 物	[身舎外部]二手先組、尾垂木 [屋内]拳鼻付組 [腰組]持肘木、二手先組 [向拝]連三斗積上変形(斗・肘木4段)
中 備	[身舎]幕股、詰組(正面・背面中央間) [向拝]嵌込彫刻	軒	二軒繁垂木、彫刻板支輪
妻 館	[壁]虹梁大瓶束、須覆、拳鼻付組、詰組、幕股(千鳥破風部)、彫刻板支輪、[破風]反り破風(眉欠3段)、若葉付蕉懸魚、六葉、櫛口、透影懸魚(千鳥破風部)	柱 間 裝 置	諸折棟唐戸、疎舞良戸、ガラス戸
縁・高欄・脇障子	三方切目縁、擬宝珠高欄、登高欄、脇障子	床 床	覺
天 井	板邊格天井(鏡板)	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	全体的に素木 黒(格縁角)、朱塗(高欄、人や雲獸の彫刻の口)、黄色・黒(雲獸彫刻の目)	飾 金 物 等	擬宝珠、隅緑葛端部
繪 画	雲龍画(壁面展示) 狩野法眼探雲作	材 質	漆
彫 刻	[身舎]腰組持肘木(刻線彫 唐草紋様)、虹梁型差鴨居(浮彫 千鳥・波、唐草紋様、刻線彫・沈彫 唐草紋様)、木鼻(丸形 獅子、範形 牡丹)、拳鼻(刻線彫 唐草紋様)、幕股(肩・脚 刻線彫 満滴紋様、脚内 地紋彫 菱形紋様)、彫刻板支輪(浮彫 瑞雲、波)、脇障子柱(地紋彫 七宝紋様)、破風部虹梁(刻線彫・沈彫 瑞雲)、結縛(浮彫 瑞雲)、[千鳥破風部]幕股(透彫 鯉・波)、彫刻板支輪(浮彫 波)、虹梁(浮彫 菊)、結綿(浮彫 菊)、懸魚(透彫 飛龍)、[向拝]角柱(地紋彫 紗綾形紋様)、水引虹梁(表 浮彫 亀・波、裏 刻線彫、沈彫 唐草紋様)、水引虹梁持送(範形 亀・波)、二重虹梁(表 刻線彫、沈彫 瑞雲)、木鼻(丸形 獅子、狹)、水引虹梁間嵌込彫刻(透彫 飯玉紋様)、海老虹梁(浮彫 波・瑞雲、唐草紋様)、海老虹梁持送(龍彫 千鳥・波)、手扶(範形 鷹・松・鳥・瑞雲)、太鼓羽目彫刻(透彫 鄭思遠・虎)、毛毛通(透彫 風凰・仙人・笙)		



写48-11 正面



写48-12 向拝組物



写48-13 内部組物(幣殿正面)

上棟し、明治13年(1880)の完成まで工事が少しづつ進められたことが記されている。奉納額より昭和27年(1952)に屋根修繕、昭和39年(1964)に瓦の葺き替えをした。幣殿との境に飯玉大明神の扁額がある。

棟梁は宮寺大炊で彫刻師は信州の北村喜代松と高崎の石川兼次郎藤原豊重である。規模は正面3間、側面2間の入母屋造平入桟瓦葺で1間向拝が付く。組物は外部が尾垂木付の二手先組で屋内は拳鼻付岡組である。向拝部は連三斗積上変形で斗・肘木が4段である。外部二手先組の通肘木間は彫刻板支輪で、屋内出組の通肘木・天井廻縁間は板支輪である。中備は板蟇股で、正面と背面中央間は詰組である。軒は二軒繁垂木であり、向拝部は地垂木、打越垂木、飛檐垂木と3段に軒を伸ばす。向拝部は豊重による飯玉縁起の嵌込彫刻がつく。豊重は江戸彫物師御三家の一つ石川家二代目藤吉信豊の元で活躍し、後に高崎に移り住んだ名工である。喜代松は新潟、富山、長野で活躍し、長男は大理石彫刻の第一人者で帝展審査員となり、孫正信は近代彫刻に貢献した。また、拝殿の屋内南側壁面には天明7年(1787)狩野探雲63歳のときの作画である縦3m、横2.3mの雲龍画が展示されている。建て替える前の旧幣殿・拝殿は棟札より寛政元年(1789)の上棟である。雲龍画はその前からあることになる。

## まとめ

建物は檜による素木造であり、細やかな彫刻と鏡板張の壁面が組み合わさっており、建造年代の特徴をよく示している。本殿・幣殿と拝殿を比較すると拝殿の彫刻がより細やかになっており、幕末と明治の様式の変化を感じることができる。造営に関する古文書が多数保存されており、「飯玉宮御本社木割仕様帳」と「飯玉宮御普請仕様書」には部材の名称、寸法、数量が記載されている。「倉賀野神社造営史料」として書籍にまとめられており、市井での建築研究の助けになっていることは特筆に値する。部材名称、工匠名、制作年代が明らかなので、古建築を調べる際の指標になり、工事収支記録や、役所への対応記録などから、建築当時の社会情勢を知ることもできる。

(島崎重徳)

### 【参考文献】

- 『倉賀野神社造営史料』倉賀野神社編集 昭和63年
- 『新編 高崎市史 資料編14 社寺』高崎市市史編さん委員会 平成15年

## 49 小祝神社【おぼりじんじゃ】

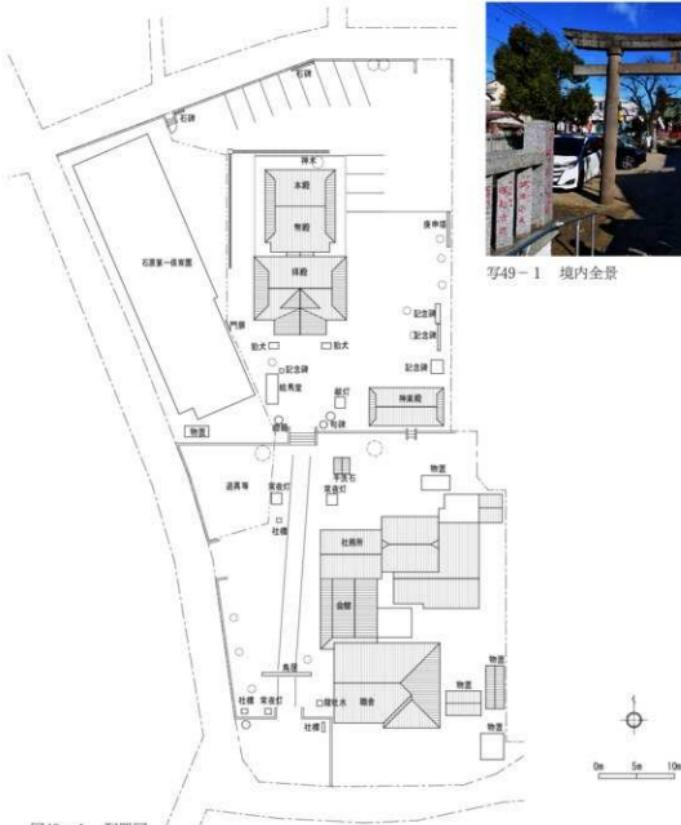
表49-1

神社名	小祝神社	所在地	高崎市石原町1245
旧社格	郷社	所有者・管理者	宗教法人 小祝神社
主祭神	少彦名命	神事	春祭(4/19)、秋祭(10/19)
創立・沿革	神社の創建は不詳。「三代実録」の元慶4年(880)5月25日条に「正五位、小祝神社」賜ったとされている。		
文化財指定	小祝神社本殿(市重文 平成14年2月)		

### 位置・配置 (図49-1、写49-1)

高崎市の西、烏川に架かる聖石橋の南方、右岸に位置する。県道71号線吉井街道から東に入り道路沿い南側より参道に入る。南側及び北側は道路を挟ん

で住宅地、東に石昌寺境内、西に石原第一保育園がある。北側に駐車場、南面鳥居を潜ると、東側に南から職舎、会館、社務所が建っている。さらに北側に神楽殿を配置し、社殿へと続く。



写49-1 境内全景

図49-1 配置図

## 由来および沿革

神社の創建は不詳。「三代実録」の元慶4年(880)5月25日条に「正五位、小祝神社」賜ったとされている。『延喜式神名帳』に記載ある小社で上野国十二社(式内社)の一つである。

ほんてん  
本殿(図49-2、表49-2、写49-2~49-7)

現本殿 正徳3年(1713)高崎城主であり、老中にまでなった真鍋越前守詮房が造替。享保2年(1717)棟上げされたことは真鍋の短歌の残存からも明らかである。

本殿は三間社入母屋造、側面3間、銅板葺、向拝3間を付している。二軒繁垂木で手挟を付ける。四方に大床を貼りめぐらし、脇障子を設ける。前2間を外陣、後1間を内陣とし、厨子が安置されている。大床背面高欄部に鳥居を設け、身舎背面中央に扉付拝所を設ける。組物は向拝に連三斗積上変形、身舎は外部に二手先、内部に出組としている。中備は向拝外部に幕股、身舎外部内部ともに幕股、外陣出入口の両脇間のみに間斗束としている。軒支輪は蛇腹支輪とし、海老虹梁は反りがある。妻飾は虹梁大瓶東としている。床は外陣を疊、内陣を拭板とし、天井は外陣を格天井、内陣を鏡天井としている。彫刻に関しては、木鼻や水引虹梁(刻線彫)、海老虹

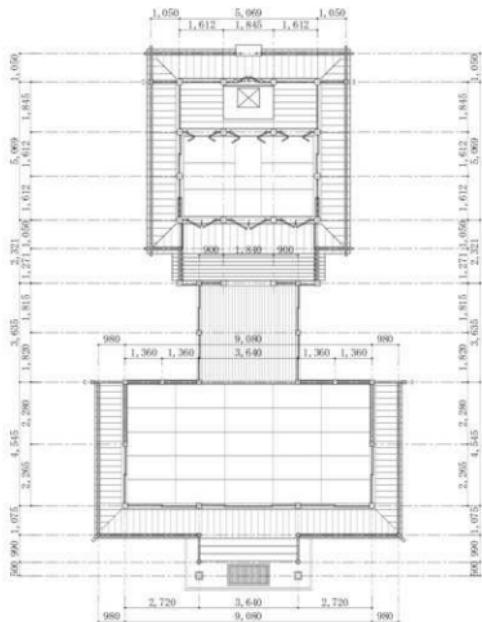


図49-2 平面図(社殿)

## 表49-2 本殿

建造年代／根据	享保2年(1717)／掲額	構造・形式	三間社入母屋造(5.069m)、側面3間(5.069m)、平入、千鳥破風付、向拝3間唐破風付、銅板葺
工 匠	[大工] 梁大 塚彦平 木挽 高橋嘉助 外陣: 格天井 内陣: 格天井	基 础	切石、土台
軸 部	[身舎]丸柱、長押(切目・腰・内法) [向拝] 角柱	組 物	[身舎外部]二手先 [身舎内部]出組 [向拝] 連三斗積上変形
中 備	[身舎]外部: 幕股、内部: 間斗束、幕股 [向拝] 幕股	軒	二軒繁垂木
妻 飾	虹梁大瓶東	柱 間 装 置	[正面]両開戸3か所 [壁]板壁・彫刻・引違戸
縁・高欄・脇障子	四方縁大床高欄付、登高欄擬宝珠付、脇障子: 板	床	外陣: 疋敷、内陣: 拭板
天 井	外陣: 格天井、内陣: 鏡天井	須弥壇・扇子・宮殿	内陣に厨子
塗 装	[身舎]朱色、内法長押上部極彩色、柱上部金欄巻 [向拝]朱色	飾 金 物 等	なし
繪 画	鏡天井	材 質	不明
彫 刻	[向拝]木鼻、幕股内部、手挟(透彫)、組物尾垂木、背面壁面、水引虹梁(唐草絵様刻線彫)、海老虹梁(唐草絵様刻線彫)		



写49-2 全景・背面



写49-3 身舎背面



写49-4 正面・向拝



写49-5 内陣正面



写49-6 組物



写49-7 格天井

梁（刻線彫）、幕股、手挟（透彫）、尾垂木、背面壁などに見られる。享保5年(1720)彫刻色彩と寛政6年(1794)の壁画彫刻、妻肘木の巻の元禄、海老虹梁の若葉など、各々に年代差があるのは興味深い。彩色に関しては全体的に朱色を基調とし、内法長押上部に極彩色、身舎柱上部に金襴巻となっている。幕股内に彫刻が施されていないこと、海老虹梁に彫ら

れた簡素な渦と若葉の状態、蛇腹支輪の簡素な状態より彫刻は享保5年(1720)頃と推定できる。

#### 幣殿 (图49-2、表49-3、写49-8～49-10)

正面1間切妻造、側面2間、銅板葺。床は板敷、天井は板貼。建造年代は神社明細帳及び建築様式から明治中期当初のものと推定する。

表49-3 幣殿

建造年代／根柢	明治中期／建築様式	構造・形式	正面1間(3.64m)、側面2間(3.635m)、切妻造または両下造、銅板葺
工 匠	不明	基 础	切石、土台
軸 部	角柱	組 物	なし
中 備	なし	軒	なし
妻 鮑	なし	柱 間 裝 置	〔正面〕なし 〔壁〕板壁・引違窓
縁・高欄・脇障子	なし	床	板敷
天 井	板貼り	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	朱色	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材	質 不明
彫 刻	なし		



写49-8 側面



写49-9 内部



写49-10 内部 天井

表49-4 拝殿

建造年代／根拠	明治中期／建築様式	構造・形式	正面3間(9.08m)、側面2間(4.545m)、入母屋造、千鳥破風付、向拝1間軒唐破風付、銅板葺
工 匠	不明	基 础	礎石
軸 部	[身舎]角柱、長押(切目・半) [向拝]角柱	組 物	[身舎]外部：出三斗 [向拝]出三斗
中 備	[身舎]外部：平三斗	軒	二軒半繁垂木
妻 飾	懸魚、彫刻支輪	柱 間 装 置	[正面]引違戸 [壁]板壁・引違戸
縁・高欄・脇障子	三方碌大床高欄付、登高欄擬宝珠付、脇障子：板	床	疊敷
天 井	格天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	[身舎]朱色、梁上部極彩色、柱上部金襷巻、中間間(雲) [向拝]朱色	飾 金 物 等	垂木小口
繪 画	なし	材 質	不明
彫 刻	唐破風懸魚、千鳥破風懸魚、向拝木鼻		



写49-11 正面



写49-12 唐破風



写49-13 向拝 海老虹梁

#### 拝殿（図49-2、表49-4、写49-11～49-13）

正面3間入母屋造、側面2間、銅板葺。床は疊敷、天井は板貼格天井。向拝に設けられた海老虹梁や手挟の刻線唐草絵様より明治中期頃と推定される。

#### まとめ

現在の小祝神社は拝殿、幣殿、本殿が一体となつた三間社であるが、拝殿、幣殿を除く享保2年(1717)に棟上げされたとされる本殿に至っては、歴史も古く、随所に凝った古の技術が見受けられる。組物に連三斗積上変形、二手先、出組、中備に墓股、間斗束など、蛇腹支輪や虹梁の彫刻、微かに伺

える各所彩色に関しても興味深い。特に、身舎背面に扉を付けた拝所と大床背面高欄の小型鳥居、壁面の彫刻パネルは、特徴的で、他の彫刻との年代差があることから、歴史的背景や風習慣習など、民俗的価値があることを容易に想像できる。高崎では古い享保2年の神社本殿建築や、後付けの彫刻は装飾の考え方の変遷を知る上で重要である。

(山本和之)

#### 【参考文献】

『小祝神社本殿建築調査報告書』村田敬一 平成14年  
『高崎市史 資料編14 社寺』高崎市市史編さん委員会  
平成15年

## 50 (山名)八幡宮 ((やまな)はちまんぐう)

表50-1

神社名	八幡宮	所在地	高崎市山名町1581-1
旧社格	郷社	所有者・管理者	宗教法人 八幡宮
主祭神	玉依比売命、豈陀和氣命、慧見足比売命	神事	初詣(1/1~)、追懺式(節分祭)(2/3)、春の例大祭(4/15)、秋の例大祭(10/15)、七五三祭(11月中)
創立・沿革	山名八幡宮は源氏の一族、新田氏の祖義重の子、三男義範が山名城にあって、平安時代後期安元年中(1175~77)に豊前の国(大分県)の八幡宮の總氏神の宇佐八幡宮より勧請されたと伝わる〔社伝〕。		
文化財指定	本殿・幣殿(市重文 平成7年3月)、山名八幡宮算額(市重文 昭和50年1月)		

### 位置・配置 (図50-1、写50-1)

高崎市の南、上信電鉄山名駅の北西に隣接し、通称八幡山の中腹にある。山の上の碑、金井沢の碑に通ずる遊歩道「石碑の路」の経由地でもある。

東の県道が参道入口。鳥居をくぐり西に進むと「石碑の路」の石碑、その先に「たちわりの石」があり、上信電鉄の線路下のトンネルを抜けて隨神門に至る。隨神門には、隨神と神馬が祀られる。隨神

門から北に手水舎、数個の神社を祀る。隨神門の南西に參集殿がある(1階は休憩スペース、2階はカフェ等)。隨神門から西に進み、鳥居をくぐり、階段を上ると社殿(拝殿)となる。拝殿南に御札受所、祈祷控室、安産多産の犬の彫刻とつづき、本殿裏に大きな獅子頭を祀る。境内背面に八幡山が座す。社殿北に神楽殿、弁財天、水神宮を配し、弁財天を囲むように池がある。

### 由来および沿革

山名八幡宮は源氏の一族、新田氏の祖義重(1135~1202)の子、三男義範が山名城にあって、平安時代後期安元年中(1175~1177)に豊前の国(大分県)の八幡宮の總氏神の宇佐八幡宮より勧請されたと伝わる。また、山名伊豆守義範は、文治年中(1185~1190)社殿を造営した。

室町時代、後醍醐天皇(1288~1339)の孫、君(尹)長親王が山名城に滞在の折、城主の世良田政義の娘が親王の子を懷妊し安産祈願された。無事産まれた男子は良王君と名付けられ、その後も健やかに成長されたと伝わって以来、安産、子育ての宮として称えられ、今も多くの参拝者が賑わう。



図50-1 配置図 全体



写50-1 境内全景

鎌倉時代後期には門前に宿や市で賑わい、南北朝時代には僧侶7人それぞれ坊をもち住んでいた。

宝永2年(1705)、領主である前橋藩主の酒井雅楽頭忠享より社地2町7反1畝7歩を賜り、乗り鞍1具を寄進された。『上野名蹟図誌』には、現在の參集殿部に「構」関係の建物が点在し、本殿奥の八幡山山頂に奥宮や鐘楼が見られる。

ふたまた大根の信仰があり、拝殿天井に大黒様が二叉大根を担ぐ絵があるとともに、和算の奉納額に

は、二叉大根の問題がある。また、ふたまた大根を備えると願いが叶うと伝わる。

#### ほんてん 本殿 (図50-2、表50-2、写50-2~50-7)

建造年代は、18世紀後期。屋根の銅板葺時に確認された端材に明和4年(1767)8月4日の墨書がある。江戸時代に前橋藩主・酒井雅楽頭によって再建された。

流造(権現造)銅板葺、正面3間、側面3間。内

表50-2 本殿

建造年代／根据	明和4年(1767)／部材墨書	構 造 ・ 形 式	三間社流造(4.12m)、側面3間(3.44m)、(背面)千鳥破風付、向拝1間唐破風付、銅板葺(権現造)
工 匠	[影工]彫物師 関口文治郎／手挟裏面 墨書、明和6年(1769)6月14日	基 础	基礎(切石)、龜腹
軸 部	[身舎]丸柱、長押 [向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁、手挟	組 物	三手先、尾垂木 [上虹梁部]二手先 [腰組]持送の上二手先
中 備	本幕股	軒	二軒繁垂木、支輪(板・蛇腹)
要 飾	二重虹梁大瓶束、菱形付	柱 間 裝 置	[正面]両開き戸 [側面・背面]板壁 [向拝側面]板戸
縁・高欄・脇障子	四方縁、脇障子(影刻)	床	拭板張
天 井	棹縁天井	須弥壇・扇子・宮殿	不明
塗 装	[外部]黒(柱)、白(壁)、他極彩色、柱上部金欄巻 [向拝内部]黒・朱(垂木、蛇腹支輪、海老虹梁)、素木	飾 金 物 等	破風板、垂木、内法・地・腰長押、脇障子、隅木抜首、階
繪 画	なし	材 質	漆
影 刻	[身舎外部]菱形(流水)、虹梁(流水)、板支輪上(流水・雲)下(流水・雲・菊)、幕股(松、花)、木鼻(獅子)、尾垂木(蟹、象)、三手先(鳳凰、龍、獅子、狛、象)、頭貫(地紋彫)、内法長押(地紋彫)、脇障子(鳥、松、雲)、腰長押(地紋彫)、腰長押(地紋彫)、腰持送(雲) [背面]千鳥破風懸魚(鯛)、虹梁(若葉)、唐破風兔毛通(牡丹)、妻飾(松・鳥)、虹梁(唐草) [向拝]水引虹梁(唐草)、海老虹梁外(流水)内(唐草)、手挟(菊)、木鼻(獅子、狛)		



写50-2 全景



写50-3 背面・側面



写50-4 向拝



写50-5 身舎正面



写50-6 妻飾



写50-7 腰組

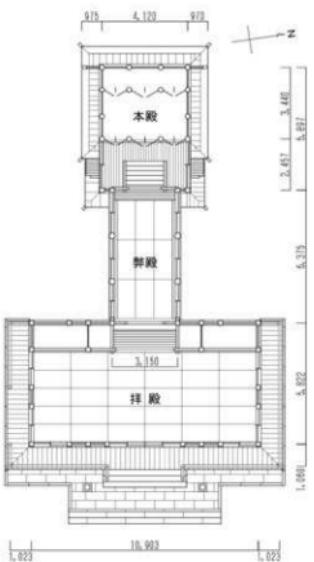


図50-2 平面図(社殿)

部は未確認だが、「高崎市史資料編14」より、前方2間を下障、後方1間を内陣との記載あり。彫刻師は手挾裏面に明和6年(1769)彫物師関口文治郎と墨書きがある。彫刻は外部の内法長押上に多く、妻の簀形は瀧、二重虹梁間の組物は二手先、彫刻板支輪と升、下虹梁の下の組物は三手先、板支輪、蛇腹支輪、幕股上に升、尾垂木に6種類の神獣(蟹、象、鳳凰、龍、獅子、狛)が見られる。また、背面の唐破風兔毛通(牡丹)、妻飾(松・鳥)が配される。四方縁に高欄の痕跡と思われる穴がある。地紋彫は頭貫、内法長押、地長押、腰長押に施されている。

色鮮やかな外部は、平成2年暮~平成3年12月(期間1年)日光小西美術工藝社にて彩色工事が施された。極彩色の彫刻、柱の金襴巻共に鮮やかである。

「高崎市史資料編14」(平成15年)に記載の平面図と階部周辺が異なるため、近年改修したと思われる。

#### 幣殿 (図50-2、表50-3、写50-8~50-10)

建造年代・工匠共に資料がなく不明であるが、建築様式より本殿とほぼ同時期と考える。正面1間、側面3間。

表50-3 幣殿

建造年代／根拠	18世紀後期／建築様式	構造・形式	正面1間(3.15m)、側面3間(6.37m)、両下造、銅板葺(椎現造)
工 匠	不明	基 础	切石
軸 部	正面背面柱: 角柱、中柱4本: 丸柱、長押、地覆	組 物	出組拳鼻付
中 備	本幕股	軒	二軒蟇垂木、板支輪
妻 飾	なし	柱 間 装 置	板壁、板戸
縁・高欄・脇障子	なし	床	畳敷、板張
天 井	格天井	須弥壇、扇子、宮殿	なし
塗 装	[外部]朱(柱、組物、頭貫、内法長押、腰長押、土台)、黒(垂木、台輪、付鶴居、板戸枠)、白(盤、板戸の板)、彫刻部極彩色、柱上部金襴巻 [内部]漆木	飾 金 物 等	垂木、六葉
繪 画	[外部]なし [内部]天井絵一部(人、花、竹、鳥)	材 質	漆
彫 刻	[外部]幕股(植物)、板支輪(流水・雲・菊)		



写50-8 拝殿



写50-9 板支輪 幕股



写50-10 内部

両下造で本殿・拝殿に接続する。丸柱は上部棕だが、腰部は8角柱になっている。

外部柱上部に金欄巻、軒支輪、棊股の彫刻は本殿と同柄の彫刻で、本殿と同じ色彩が施されている。内部組物は出組拳鼻付。素木造りで彩色は無い簡素な造りである。側面引戸は黒枠に金箔貼。

格天井の一部に絵が描かれている、拝殿の天井絵と同時期の天井絵と推察。

#### 拝殿（図50-2、表50-4、写50-11～50-13）

建造年代は昭和61年、境内に石碑がある。設計・大工は山田荒木社寺設計事務所である。

素木の拝殿で、向拝部に極彩色の彫刻があり、向拝角柱下部は窄まっている。内部の格天井の絵は、中央部に新しい模様、周囲に古い絵が配され、古い絵には南八幡地区の町名が確認できる。その中の一枚に大黒様がふたまた大根を担ぐ絵がある。

『高崎市史資料編14』に、明治10年(1877)の棟札、棟梁：高崎(若松町)近藤多吉、松田龍八他。

彫刻師：石川兼五郎、西川松五郎。との記載があるが、以前の建物と推察。『みなみやわたの歩み 第九集』に大正14年(1925)の拝殿の外観写真が掲載されている。写真より、正面約3間、側面2間、入母屋造、平入、向拝付、瓦葺と推察。

#### まとめ

本殿の彫刻師は関口文治郎で、桐生市の天満宮本殿(1789)や櫻名神社(1806)など多数の寺社の彫刻を手がける。外部の全組物の尾垂木に神獣が彫られ、妻二重虹梁間の組物間の升飾りは特徴的で、蛇腹支輪の広い蛇腹間隔、虹梁の浮彫など時代を反映している。手挟みの菊、棊股内部の透彫の草花、柱の金欄巻など極彩色であり、向拝内部の板支輪、蛇腹支輪、棊股等ともに素木で一部に朱・黒を使用している。手挟みは内部からは見えず、組物の尾垂木に彫刻は無く、外部の彫刻、極彩色との対比が面白い。

幣殿は本殿向拝への接続部、拝殿への接続部は角柱であるが、他の柱は丸柱で上部棕となり、腰部は

表50-4 拝殿

建造年代／根拠	昭和61年(1986)／石碑	構 造 ・ 形 式	正面10.90m、側面5.82m、入母屋造、千鳥破風付、平入、向拝1間軒唐破風付、銅板葺(権現造)
工 匠	[大工]設計・大工：山田荒木社寺設計事務所、基礎工事：吉井建設株式会社、屋根葺き：小野鋼板所、石工事：藤岡石材	基 础	基壇、青石、独立コンクリート基礎、亀腹
軸 部	[身合]角柱、頭貫、台輪、押、土台 [向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁	組 物	[身合外部]平三斗、拳鼻 [向拝]出三斗
中 備	[正面]棊股 [側面・背面]撥束	軒	二軒繋垂木、
妻 飾	束、横格子	柱 間 装 置	板壁、ガラス引戸
縁・高欄・船脚子	三方縁、擬宝珠高欄、登高欄付	床	疊敷、一部板張
天 井	[中央]格天井(一部に絵) [両端]竿縁天井	須弥壇、眉子・宮殿	なし
塗 装	[身合]素木、白(垂木) [向拝]極彩色(兎の毛通、水引虹梁刻線部、木鼻、嵌込彫刻	飾 金 物 等	破風、六葉、擬宝珠、向拝柱元
繪 画	天井絵	材 質	漆
彫 刻	[身合外部]懸魚(猪の目)、虹梁(唐草)、拳鼻(渦文)、棊股(植物) [内部]、虹梁(唐草)、梁(唐草)、棊股(植物) [向拝]兎毛通(鳳凰)、妻飾(松・鳥)、虹梁(若葉)、中備嵌込彫刻(人・松・鳥)、水引虹梁(流水)、手挟(若葉)、海老虹梁(若葉)、木鼻(獅子)		



写50-11 正面



写50-12 内部



写50-13 天井絵(ふたまた大根)

八角柱である。本殿・幣殿は、組物、軒支輪、棊股等の建築様式より同時期の建造と推察する。また、本殿・幣殿とともに、平成2年(1990)の彩色工事により鮮やかである。

拝殿は、昭和61年(1986)に建替えられ、素木造である。

手水石は元禄13年(1700)山名村で寄進。高崎市内の手水石の中では古く、個人の寄進が多い時代のなか村で寄進されたのは珍しい。正月・春・秋祭り、安産・子育ての宮からお宮参り・七五三参りも賑わう。

(伊藤美保子)

#### 【参考文献】

- 『高崎市史 資料編14 社寺』高崎市市史編さん委員会 平成15年
- 『高崎市史 資料編13 近世石像物 信仰編』高崎市市史編さん委員会 平成15年
- 『多野藤岡地方紙 総説編』多野藤岡地方紙委員会 昭和51年
- 『図説 高崎の歴史』石原征明・飯野信義 昭和63年
- 『群馬の社寺彫刻』小林一好 平成11年
- 『上州のお宮とお寺 神社編』丸山知良・近藤義雄 昭和53年
- 『上野国神社明細帳8 多野郡・南甘楽郡・緑塙郡』群馬県文化事業振興会 平成15年

### 51 烏子稻荷神社（すないごいなりじんじゃ）

卷1-1

神社名	烏子稻荷神社	所在地	高崎市上小島町564
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人 烏子稻荷神社
主祭神	宇迦之御魂命、大日靈命、素戔鳴命、菅原道真公	神	新年祈願(毎年1/1)、七草祭(1/7)、天神事祭(1/25)、節分祭(2/3)、初午祭(2月初午)、例大祭(4月第二日曜日)、新嘗祭(11/23)
創立・沿革	延暦2年(783)に公卿藤原金吾が山城國(京都府)の藤ノ森稻荷神社御分靈を勧請したのが始まりとされる(社伝による)。		
文化財指定	烏子稻荷神社本殿(市重文 平成7年3月)、上小島稻荷山古墳(市史跡 平成3年3月)		

位置·配置 (图51-1, 图51-2)

北部環状線上小塙付近に朱塗コンクリート製大鳥居がある。この鳥居を北上した位置に本神社が存在

する。社殿は樹木で覆われた上小塙稻荷古墳の上に南方面を正面として鎮座。境内は南中央部を入口として、参道に御影石を敷き詰める。本製鳥居を抜けて

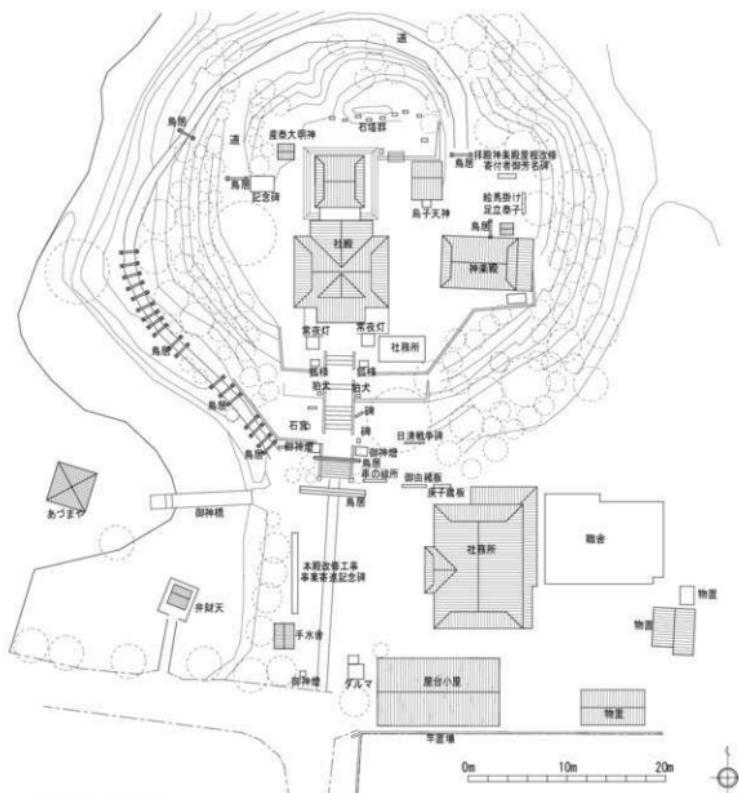


图51-1 配置图



写真51-1 境内全景

て石段を登り、石造鳥居を抜けて登りつめる  
と社殿に至る。

#### 由来および沿革

延暦2年(783)に公卿藤原金善が山城国(京都府)の藤ノ森稻荷神社御分靈を勧請したのが始まりとされる。

#### 本殿(図51-2、表51-2、写51-2~51-7)

一間社入母屋造、正面1間、側面1間、鉄板葺で向拝1間を付ける。向拝二軒繁垂木及び身舎は彫刻板軒、大床を正面、側面の三方にめぐらせ、彫刻脇障子を設ける。前方1間を外陣、後方1間を内陣としている。床は外陣内陣共に板敷、天井は外陣内陣共に竿縁天井としている。蛇腹支輪が使用され、海老虹

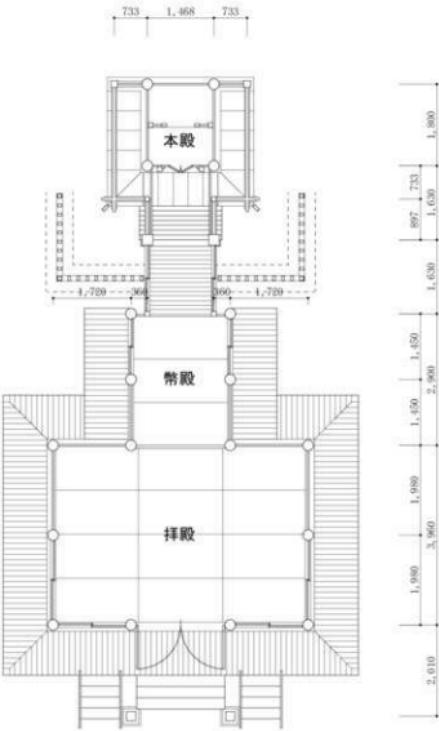


図51-2 平面図(社殿)

#### 表51-2 本殿

建造年代／根拠	18世紀後半／建築様式	構造・形式	一間社入母屋造(2.934m)、側面1間(1.800m)、 平入、向拝1間、銅板葺
工 匠	不明	基 础	切石龜腹・土台
軸 部	[身舎]丸柱・長押(足固・切目・腰・内法) [向拝]角柱	組 物	[身舎]外部：三手先詰組、内部：未確認 [向拝]連三斗積上
中 備	[身舎]外部：幕股、内部：未確認 [向拝]未 確認	軒	[身舎]彫刻板軒 [向拝]正面打越二軒繁垂木
妻 飾	虹梁大瓶束式菱形付、懸魚	柱 間 装 置	[正面]幣軸構 [壁]横板壁
緑・高欄・脇障子	三方縁大床跳高欄付、登高欄擬宝珠付、脇障 子：彫刻(龍)	床	外陣：板敷、内陣：板敷
天 井	外陣：竿縁天井 内陣：竿縁天井	須弥壇・扇子・宮殿	未確認
塗 装	[身舎]素木 [向拝]素木	飾 金 物 等	高欄擬宝珠、尾垂木小口
繪 画	なし	材 質	不明
彫 刻	向拝木鼻(繁縝鼻先正面：獅子 頭貫鼻先側面：象)、向拝紅菱形頭貫上部、中備幕股内部、手挾(透彫)、脇障 子		



写51-2 全景



写51-3 背面・側面



写51-4 屋根 千鳥破風



写51-5 身舎組物 向拝組物



写51-6 身舎組物 軒



写51-7 臨障子

梁が単純な仕様となっている。また、棊股の彫刻が飛び出している形態より、18世紀の建物と推定される。内部に関しては拝殿外部より目視によるとところが大きいため、詳細については不明である。

#### 幣殿 (图51-2、表51-3、写51-8～51-9)

正面1間切妻造、側面2間、銅板葺。床は疊敷、天井は格天井。内部に関しては拝殿外部より目視によるところが大きいため、詳細については不明である。明らかに拝殿との一体で作られた状態より江戸末期と推定。

表51-3 币殿

建造年代／根柢	江戸末期／建築様式	構造・形式	正面1間(2.188m)、側面2間(2.900m)、両下造、銅板葺
工 匠	不明	基 础	礎石
軸 部	丸柱、長押(切目)	組 物	出組
中 備	棊股	軒	二軒本繁重木、蛇腹支輪
妻 飾	なし	柱 間 装 置	[正面]なし [壁]横板壁
縁・高欄・船障子	側面切目縁	床	疊敷
天 井	格天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	主が朱木、柱が朱色	飾 金 物 等	垂木小口
繪 画	なし	材 質	不明
彫 刻	木鼻、棊股内部、蛇腹支輪、繁栱		



写51-8 側面



写51-9 側面2

表51-4 拝殿

建造年代／根柢	江戸末期／建築様式	構造・形式	正面3間(5.628m)、側面2間(3.960m)、入母屋造、千鳥破風付、平入、向拝1間軒唐破風付、銅板葺
工 匠	不明	基 础	礎石
軸 部	[身合]丸柱、長押(切目) [向拝]角柱	組 物	[身合]出組 [向拝]出三斗
中 備	[身合]藻井	軒	二軒本繁重木、蛇腹支輪
要 飾	虹梁大瓶束、懸魚	柱 間 装 置	[正面]中央間: 嵌込両開戸、両脇: 舞良戸 [壁]横板壁
縁・高欄・脇障子	四方切目縁	床	疊敷
天 井	格天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 裝	[身合]主が素木、柱が朱色 [向拝]主が素木、柱が朱色	飾 金 物 等	垂木小口
絵 画	なし	材 質	不明
彫 刻	向拝木鼻、手挟、向拝頭貫、頭貫上部、木鼻、藻井内部、蛇腹支輪、繁梁、唐破風懸魚、千鳥破風懸魚		



写51-10 正面



写51-11 唐破風



写51-12 向拝 海老虹梁

## 第五節 拝殿 (図51-2、表51-4、写51-10~51-12)

正面3間入母屋造、側面2間、銅板葺。床は疊敷、天井は格天井。水引虹梁は浮彫であり、上部に彫刻の嵌め込みが見受けられる。海老虹梁は透彫。彫刻支輪が設けられている。以上の特徴より江戸末期の建物と推定される。内部に関しては拝殿外部より目視によるところが大きいため、詳細については不明である。

## まとめ

本殿は反りの少ない太い海老虹梁、三方大床、唐

草絵様と、古い手法の建築技術が見られる一方で、彫刻板軒、透彫障子など、比較的装飾的凝った手法も見受けられる。資料に見られる寛政2年(1790)の配置図からも建造年代は18世紀後半と推定されるが、手法変遷を辿るに貴重な建造物であると考えられる。

(山本和之)

## 【参考文献】

『高崎市史 資料編14 社寺』高崎市市史編さん委員会  
平成15年

## 52 (八幡)八幡宮 ((やわた)はちまんぐう)

表52-1

神社名	八幡宮	所在地	高崎市八幡町甲655
旧社格	郷社	所有者・管理者	宗教法人 八幡宮
主祭神	菅原別尊、息長帝 姿命、玉依姫 命	神事	歳旦祭・夜神楽(元旦)、初神楽・成人祭(1月)、春祭り(4月)、秋大祓(7/29)、秋祭り(11/3)
創立・沿革	天徳元年(957)に京都の石清水八幡宮を勧請したのが始まりと伝える。		
文化財指定	八幡八幡宮本殿・幣殿・拝殿(市重文 平成10年2月)、八幡八幡宮の算額(県重文 昭和31年6月)、八幡八幡宮の胴丸(市重文 昭和47年5月)、八幡八幡宮唐銅燈籠一対(市重文 平成17年2月)、八幡八幡宮の太々神樂(市重無民 平成元年3月)		

位置・配置 (図52-1、写52-1)

市街地より北西に10kmほどの、碓氷川と烏川に挟まれた台地に鎮座する神社である。旧中山道である国道18号に面して大鳥居(二ノ鳥居)あり、そこから北へ500mほど進むと仁王門(二ノ神門)に至る。境内周辺には住宅や学校があり、敷地東側を以前別当時であった大型護国寺と接する。大鳥居から

本殿まではほぼ軸線上に並び、北側は鎮守の森となっている。

### 由来および沿革

京都の石清水八幡宮を勧請したのが始まりといい、源頼義・義家が奥州征伐の折に戦勝を祈願したことから大願成就がなされ、社殿の復興がされたと伝える。県下最古の中世の鎧である胴丸を所蔵することからも、武人の守護神として崇拝されてきたことがわかる。慶安元年(1648)に徳川三代將軍家光公より社領百石と諸役御免の朱印状を下賜され、長きにわたり社僧・社家によって年75回もの神事をおさめてきた。幕末に行われた大修復事業の記念として拝殿前に設置された唐銅燈籠は、高崎出身の糸商商人である野澤屋惣兵衛が大願主となって慶応3年

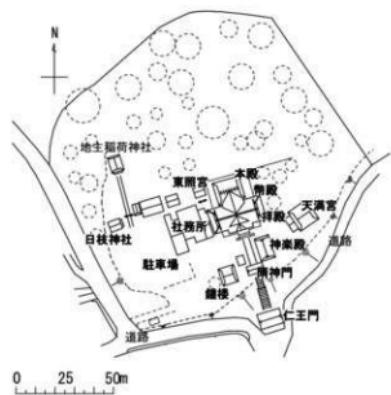


図52-1 配置図



写52-1 境内の様子

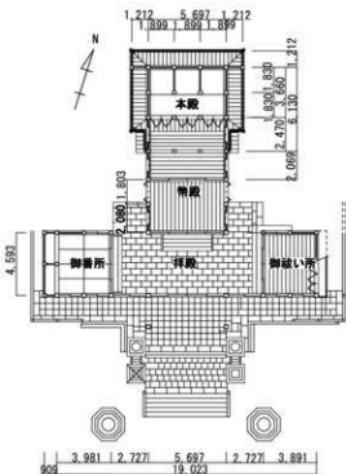


図52-2 平面図(社殿)

(1867)に奉納したものである。奉納者は市内に留まることなく広範囲に及び、市内網産業の発展と一国一社八幡宮への敬慕の念が窺える。現在でも地元から愛され、朝夕に神社を訪れる人が絶えない。年に数回行われる祭りには、市指定重要無形民俗文化財である太々神楽の奉納が続けられている。

ほんてん  
本殿 (図52-2、表52-2、写52-2~52-7)

建造年代は棟札および亀腹線刻文字より宝暦5年(1755)新初・宝暦7年(1757)上棟である。本殿・拝殿・幣殿の屋根は一体の銅板葺で、入母屋造の本殿屋根のみに銅板の千木と鰹木がある。身舎正面3間

側面2間の正面中央に二間繁垂木の軒をみせる向拝が付くが、外部からはその一部が確認できるのみである。四方に切目縁を廻し、脇障子、正面に木階5段をもつ。組物は外部三手先、内部二手先、腰組に至っては四手先である。向拝は組物を出三斗とし、獅子の彫刻木鼻をつけ、柱は身舎正面柱と同じく金箔貼りに金襴巻きを備える。向拝部は、内法長押より上を頭貫に至るまで極彩色で飾り、華やかである。正面の扉は赤漆に金箔張りの額縁内に、黒漆金箔張りの扉を備える。身舎内部は一室で素木、外部四方縁より60cm程度床をあげ、正面奥をさらに1.1m上げて三神を祀る。

写52-2 本殿

建造年代／根据	宝暦7年(1757)上棟／棟札	構造・形式	三間社入母屋造(5.69m)、側面2間(3.66m)、平入、向拝3間、銅板葺
工 匠	[大工]群馬郡和田山村 松本主水藤原栄貞(新編高崎市史掲載棟札)	基 礎	[外周部]切石上に亀腹 [内部]切石基礎
軸 部	[身舎]土台、丸柱、長押、頭貫 [向拝]角柱、水引紅梁、手扶	組 物	[身舎外部]三手先尾種付 [身舎内部]二手先 [腰組]四手先 [向拝]出三斗
中 備 なし	[身舎外部]幕股 [身舎内部]間斗束 [向拝]	軒	二軒繁垂木、彫刻板支輪
要 飾	虹梁大瓶束結綿付、嵌込彫刻、懸穗魚鱗付	柱 間 裝 置	板戸、板壁
締・高欄・脇障子	四方縁、浜床、組高欄、擬宝珠登高欄付、脇障子	床	拭板張
天 井	竿縁天井	須弥壇、扇子、宮殿	扇子
塗 装	朱塗、極彩色(彫刻)、金襴巻(柱)、金塗(扉)	飾 金 物	等 木口金物、鍵金物
繪 画	壁画(飛龍)	材 質	檜、他
彫 刻	彫刻木鼻(獅子・狛・象)、海老紅梁(絵様・六角形)、組物木鼻(絵様)、彫刻板支輪(波・菊)、水引虹梁(植物浮彫・沙綾形地紋彫)、手扶(珠輪雲)、幕股(波・動植物)、脇障子(獅子・花)		



写52-2 東側面



写52-3 北西面



写52-4 南正面・向拝



写52-5 水引紅梁



写52-6 身舎正面組物



写52-7 海老紅梁

## 幣殿（図52-2、表52-3、写52-8～52-10）

両下造妻入、正面1間侧面2間で本殿および拝殿に接続する。建造年を示す資料はないが、本殿の亀腹基壇が幣殿側となる正面には回らず、また細部意匠が似ている事から、本殿と同時期の建築と推定される。柱は丸柱であるが、前面の隅柱のみ八角形としている。正面は全面引違戸で、その枠下に柱と同等サイズの束があることから、以前は正面を三等分する柱が備えられていたとも考えられる。小屋裏には、幣殿の垂木が拝殿側に差し込まれる形で残る。

内部床は、手前部分のみ本殿向拝より一段下がる。床の段差部に後補と思われる格子付ガラス戸を入れて室を分けている。建具上部に仕切がないことから、向拝と幣殿の空間は一体である。本殿同様に内法長押より上に極彩色、側面柱上部に金欄巻を施す。組物も同じ二手先である。格天井の格縫間に青地に丸く縁取りされた花絵が描かれている。

## 拝殿（図52-2、表52-4、写52-11～52-13）

正面7間、側面2間の入母屋造で、正面中央に唐

表52-3 幣殿

建造年代／根拠	18世紀中期／建築様式	構造・形式	一間社両下造(5.60m)、側面2間(5.90m)、銅板葺
工 匠	不明	基 磨	切石、自然石
軸 部	土台、丸柱、八角柱	組 物	二手先
中 備	[外部]なし [内部]糞東	軒	繁垂木、彫刻板支輪
妻 飾	なし	柱 間 装 置	腰板付格子戸、格子付ガラス戸、歲欄間、火灯窓、折戸、板壁
縁・高欄・脇障子	なし	床	拭板張
天 井	格天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	朱塗、極彩色(彫刻)、黄(腰壁)、金欄巻(内部柱)	飾 金 物 等	十字金物、丁番金物、引手金物
繪 画	格天井格縫間(花)、頭貫より上(花鳥波雲)	材 質	檜
彫 刻	組物木鼻(絵様)、板支輪(波・菊)		



写52-8 東側面



写52-9 南正面



写52-10 内部組物

表52-4 拝殿

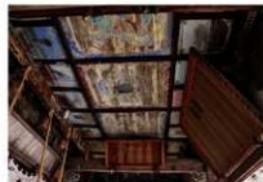
建造年代／根拠	18世紀後期／建築様式	構造・形式	七間社入母屋造(19.00m)、側面2間(4.50m)、平入、千鳥破風付、向拝1間軒唐破風付、銅板葺
工 匠	不明	基 磨	石積二重基壇、礎石、礎盤
軸 部	[身舎]丸柱、角柱(南)、貫、長押、差鶴居 [向拝]角柱、水引虹梁、海老紅梁、手扶	組 物	[外部]二手先尾垂木付 [内部]出組 [向拝]出三斗
中 備	[外部]なし [内部]詰組、糞東(御祓所)、禮摩堂) [向拝]詰組	軒	二軒繁垂木、蛇腹支輪
妻 飾	二重虹梁大瓶結綿笠形、蕉懸魚鉤付	柱 間 装 置	格子付板戸、板戸、板壁
縁・高欄・脇障子	なし	床	切石布敷(中央)、拭板張(御祓所)、疊(禮摩堂)
天 井	格天井、一部大間格天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木、極彩色(彫刻)	飾 金 物 等	破風飾金具、木口金物
繪 画	格天井格縫間(花鳥風月、龍、動物等)	材 質	檜
彫 刻	[外部]虹梁(絵様)、木鼻(獅子・花・植物)、頭貫、正面中央柱および差鶴居(地紋彫) [内部]組物・虹梁(絵様)、手肘木(波丸彫) [向拝]海老紅梁(龍丸彫)、水引虹梁(絵様浮彫・地紋彫)、手挾(花丸彫)、手肘木(波丸彫)		



写52-11 南正面



写52-12 向拝



写52-13 天井

破風付の向拝をもつ。平面は中央を石壇とし、東に板敷の御祓い所、西に疊敷きの護摩堂（御番所）を備え、割拝殿の形式をとる。全体として彫刻は壁面まで及んでいないものの、長押、頭貫、柱などに地紋彫がみられ、木鼻は獅子や花の彫刻である。龍の丸彫の海老虹梁は向拝木鼻となって前面に飛び出し、水引虹梁には花や水流が浮彫され、彫刻に彩色が施されるなど装飾化が進んでいる。

棟札は残されていないが、石積基壇に線刻文字で「明和九歳」と刻まれている。明和9年(1772)は11月16日に改元されて安永元年となっている。享和元年(1801)六月 確冰郡塙坂・八幡村往還通明細書上帳には、「拝殿 表間口拾間半 奥行式間半」([群馬県史 資料編10])とあり、ほぼ同規模となる。装飾化が進んだ建築意匠からも、18世紀後期の建築と推定した。

表52-5 天満宮(旧本地堂)

建造年代／根拠	享和元年(1801)／銘札	構造・形式	3間社入母屋造(5.80m)、側面3間(5.50m)、妻入、向拝1間軒唐破風付、銅板葺(以前柿葺)
工 匠	不明	基 础	石積一重基壇、自然石基礎、礎石、礎盤
軸 部	[身舎]土台、丸柱、長押、貫、台輪 [向拝]組物 角柱、水引虹梁、海老虹梁、手挾、手肘木	軒 連三斗	[外部]三手先尾垂木付 [内部]由組 [向拝]
中 備	なし	柱 間 装 置	二軒繁垂木、彫刻板支輪
妻 飾	二重虹梁大瓶束結縞菱形、鑄懸魚鰐付	床 床	半蔀戸、舞良戸、板壁
縁・高欄・脇障子	四方切目縁	拭板張	
天 井	格天井	須弥壇・扇子・宮殿	扇子、須弥壇
塗 装	素木、朱塗(丸桁・向拝組物)、黄(壁上部)、極彩色(彫刻)	飾 金 物 等	なし
繪 画	なし	材 质 檜	
彫 刻	[外部]木鼻(獅子・狛)、支輪(波・菊・紅葉)、正面虹梁(浮彫・地紋彫) [内部]支輪(蓮) [向拝]水引虹梁(花浮彫・縞様)、海老虹梁(植物・鳥浮彫)、手挾(獅子・植物丸彫)、手肘木(植物・滴丸彫) [唐破風]紅梁(松浮彫・地紋彫)、菱形(植物浮彫)、兎毛通(波と菊)		



写52-14 西正面



写52-15 向拝



写52-16 内部組物・彫刻支輪

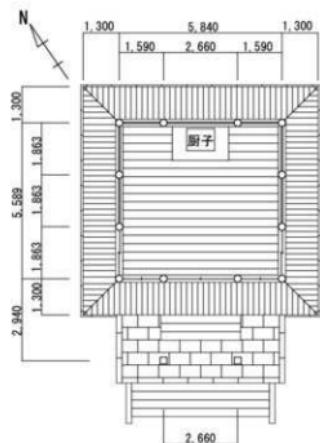


図52-3 平面図(天満宮)

影りを施し、格天井としている。

令和3年(2021)の屋根葺替工事の際、享和元年(1801)8月の屋根葺替時銘札が発見された。縦333mm、横約267mmの木板で、「新堂奉葺 御本地堂」と記されている。檜皮大工棟梁は一宮上ノ町の工藤宮内、葺師として信州松本城下の齐藤忠兵衛および同京都皇城の藤本嘉兵衛の名が墨書きされている。

#### 表52-6 鐘樓

建造年代／根拠	18世紀後期～19世紀初期頃／建築様式	構造・形式	正面3.60m、側面3.60m、入母屋造、鉄板葺、 袴腰付
工 匠	不明	基 磡	石積一重基壇、自然石基礎
軸 部	丸柱	組 物	出三斗
中 備	平三斗	軒	二軒半繁垂木
妻 館	虹梁大瓶束結綿笈形付、鑄懸魚鰭付	柱 間 裝 置	なし
縁・高欄	組高欄	床	拭板張
天 井	化粧屋根裏	須弥壇・厨子・宮殿	なし
塗 装	朱塗、黒(絵様・垂木)	飾 金 物 等	風鐸
絵 画	なし	材 質	檜
彫 刻	持送・組物・頭貫・木鼻・虹梁(絵様)		



写52-17 北西面



写52-18 頭貫鼻



写52-19 腰組

その他建造年代を示す資料としては、厨子内部「享和3年(1803)法印恵降代」墨書、文化元年(1804)3月に松声庵興が奉納した発句合の額裏面「鎮守御本地入仏供養捧之」墨書(「八幡村誌」)、燈籠側面の年号「文化八年(1811)」および寄進者「唐沢弥平治 くめ女」刻線彫、向拝礎石「柱石十四施主唐沢彌平次」刻線彫がある。厨子墨書の恵和尚は、隣接する大聖護国寺の第36代で、寛政2年(1790)から文化2年(1805)頃まで護国寺の住職を務め、中興させた人物である。天満宮に当厨子が安置された経緯は不明であるが、当時は神仏習合の時代であり、両寺社の深い関係を物語るものである。

#### 鐘 樓 (図52-4、表52-6、写52-17～52-19)

二重形式の鐘楼で、下層は正面側面2間、上層では正面側面1間、入母屋造である。下層には板金の袴腰がまわる。組物絵様は多様であるが、比較的線が太く、渦端にはっきりとした目玉のような円をもつ。釣鐘を支える虹梁には刻線彫で唐草絵様が彫られている。絵様はよく巻き円に近い。若葉は若干絵様から離れ、花のような渦を包容する。

八幡八幡宮の建造物造営役名を記した「八幡宮造営勤動姓名記」には、鐘樓堂上棟を天明3年(1783)12月2日と記す。伝承では、天明3年の建築予定を浅間山大噴火により翌年に延期した旨を軒札

に記し小屋裏に納めてあるという。また、現天満宮位置付近に鐘楼堂、敷地西側に阿弥陀(天満宮)が描かれた絵図面が残る。日付記載はないが、天満宮屋根葺が享和元年(1801)であることから、絵図面はそれより前のものであるとわかる。享和元年六月確水郡藤塚・八幡村往還通明細書上帳にも「本社南東之方本地堂」(『群馬県史 資料編10』)との記載があり、天満宮建築時に鐘楼堂を改築したとも考えられる。現段階では18世紀後期から19世紀初期頃の建築と推定する。

現在の釣鐘は昭和53年(1978)に寄進されたものである。太平洋戦争時に供出され、長らく釣鐘は不在

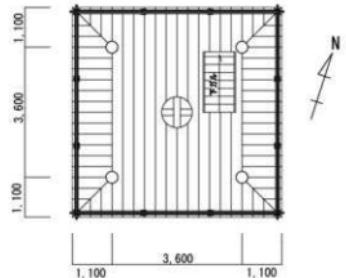


図52-4 平面図(鐘楼)

であったという。再建を求める声に募金活動を始めたところ、僅か数か月で目標額を遥かに超える淨財が寄せられた。

### 神楽殿 (図52-5、表52-7、写52-20~52-22)

正面1間を本殿に向かって、側面5間の手間2間を舞台、後方3間を樂屋とした入母屋造銅板葺である。舞台軸部は、土台に丸柱を建て貫と丸桁で固める。樂屋では、土台に角柱を建て丸桁でおさえる。舞台

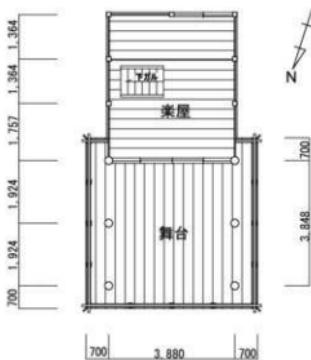


図52-5 平面図(神楽殿)

表52-7 神楽殿

建造年代／根拠	18世紀前期／建築様式	構造・形式	正面1間(3.80m)、側面5間(8.30m)、入母屋造、銅板葺
工 匠	不明	基 础	石積一重基壇、外周部鉄筋コンクリート基礎、内周部自然石基礎
軸 部	[舞台]土台、丸柱、頭貫、丸桁 [樂屋]土台、組物、角柱、丸桁	組 物	[舞台]出三斗 [樂屋]舟肘木 [腰]平三斗(持送板上)
中 備	[舞台]幕股 [樂屋]なし	軒	一軒半繁唐木
妻 飾	虹梁大瓶束結菱形付	柱 間 装 置	嵌込式舞良戸、舞良戸、板壁
縁・高欄・船障子	組高欄	床	[舞台]拭板張 [樂屋]拭板・疊
天 井	[舞台]格天井 [樂屋]竿縁天井	須弥壇・厨子・宮殿	なし
塗 裝	朱塗	飾 金 物	木口金物
絵 画	なし	材 质	漆
影 刻	持送板・組物木鼻・拳鼻・虹梁(絵様)		



写52-20 北正面



写52-21 東側面



写52-22 舞台組物・木鼻

と楽屋では材の寸法が異なり、舞台頭貫鼻が楽屋板壁に差し込まれている。また、舞台側の桁先端部には、屋根形状に合わせて上部に埋木が施されるなど不自然な納まりがある。組物は、舞台側が出三斗、楽屋側は舟肘木とする。頭貫は、上部が少し反りあがった拳鼻で先端が鳥の嘴のように尖り、比較的よく卷いた丸みのある絵様をもつ。木鼻下部の特徴的な二つの丸みから、腰組の持送板上部にある差肘木も同時期のものと思われる。

昭和42年(1967)の台風時に東側の杉の大木が倒れて建物が倒壊。その翌年、当初材を最大限使用して復元したという。舞台構造材や組物は経年を感じさせるため当初材と思われるが、基礎、組高欄、天井板などは復元時に取り換えたのである。以前は瓦葺き(『八幡村誌』口絵)であった屋根も、銅板葺きに変更されている。工事の際、「享保十二丁未正月」と墨書きのある天井板が発見された。現在のところ、墨書きの示す享保12年(1727)頃に建築されたと考える。

神楽殿では、春と秋の祭り、そして大晦日の夜神楽に大々神楽が奉納される。これは、高崎市的重要無形民俗文化財に指定されているものである。祭りには地元老若男女が集まり、舞台下で福投げを楽しみに待つ。巫女の舞手は地元の女学生で、練習を重ねる。

この地域にとって大切な行事となっている。

### 仁王門 (図52-6、表52-8、写52-23~52-25)

3間1戸で側面2間の八脚門、切妻造銅板葺である。全体を朱塗とし、頭貫先端に線刻彫絵様の拳鼻を備える。頭貫鼻絵様は、やや扁平で線が太く、渦端に目玉のような大きな円をもつ。虹梁の唐草絵様は多様である。正面両脇の紅梁および妻桁では、絵様と若葉の区別はなく、流水のごとく弧を描き紅葉の葉を含むなど装飾的である。

伝承では、威德寺第10世住職が建造と記す弘化2

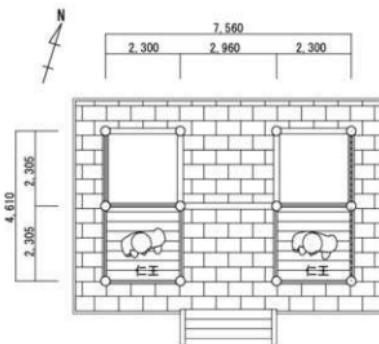


図52-6 平面図(仁王門)

表52-8 仁王門

建造年代／根拠	19世紀中期頃／建築様式	構 造 ・ 形 式	3間1戸八脚門(7.56m)、側面2間(4.61m)、切妻造、平入、銅板葺(以前瓦葺)
工 匠	不明	基 础	石積一重基壇、礎石
軸 部	丸柱、貫、頭貫	組 物	出三斗
中 備	なし	軒	二軒半繁垂木
妻 飾	二重虹梁大瓶束結綿笠形付、燕懸魚鉤付	柱 間 装 置	板壁
縁・高欄・脇障子	なし	床	切石布敷
天 井	格天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	朱塗、黒(絵様・垂木)	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	檜
彫 刻	虹梁・木鼻(絵様)		



写52-23 南正面



写52-24 妻面



写52-25 紅梁

年(1845)の棟札を小屋裏にもつという。威徳寺は、高崎城内南門外に高崎城主松平輝貞が宝永6年(1709)に開基した寺である。建築意匠等からも、弘化2年頃の建築と推定する。

**隨神門**(図52-7、表52-9、写52-26~52-28)

3間1戸側面2間の八脚門で、本殿から見て左となる東側に左大臣像、西側に右大臣像が鎮座する。石積一重基壇の上に自然石基礎を置き、土台をのせて木製の礎盤を据え、丸柱を建てる。組物は三斗、中備は詰組であるが中央間のみに板幕股が備えられている。幕股の彫刻は面内に納まり、脚は短く、火頭曲線がしっかりととしている。頭貫木鼻先端は鳥の嘴のように尖り、絵様渦は円形に近く巻きもある。彫

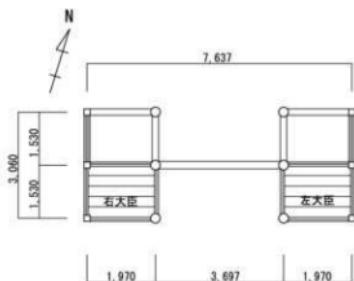


図52-7 平面図(隨神門)

も比較的浅く、境内社殿内でも古風な意匠といえる。

親柱通りに打付けられた明治33年(1900)の棟札には「……神殿末社悉再建シ時候櫛原景時」や「口祿年中罹災ヲ免レタル古建物」との記載を見て取れる。元禄16年(1703)の大地震を指すものであろうか。また、南面玉垣基礎に宝永5年(1708)と刻まれている。古風な建築意匠から、18世紀初期の建築と推定する。

**東照宮**(図52-8、表52-10、写52-29~52-31)

当建物の建築については、明治34年(1901)の屋根



図52-8 平面図(東照宮社殿)

表52-9 隨神門

建造年代／根据	18世紀初期／建築様式	構造・形式	3間1戸八脚門(7.64m)、側面2間(3.06m)、切妻造、平入、鉄板葺(当初柿葺)
工 匠	不明	基 磡	石積一重基壇、自然石、礎盤(木材)
軸 部	土台、中央丸柱粽付、側面角柱、貫、丸桁	組 物	出三斗
中 備	詰組三斗、幕股	軒	一軒半繁唐木
妻 飾	燕懸魚鰐付	柱 間 装 置	板壁
縁・高欄・船障子	なし	床	切石布敷
天 井	なし	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 裝	朱塗	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	檜
彫 刻	木鼻(絵様)、幕股		



写52-26 南東西面



写52-27 幕股



写52-28 組物

表52-10 東照宮

建造年代／根拠	17世紀後期から18世紀初期／建築様式	構造・形式	一間社流造(1.70m)、側面1間(1.53m)、向拝1間、銅板葺
工 匠	不明	基 础	切石積
軸 部	[身舎]丸柱、長押、頭貫 [向拝]角柱、水引 紅梁、海老虹梁	組 物	[身舎]出組変形 [向拝]大斗上枒肘木三段
中 備	[身舎]正面(幕股)、側面(撥束裏付) [向拝] 幕股	軒	二軒繁唐木
妻 飾	虹梁太瓶束結組付笠形、蕉懸魚鉤付	柱 間 装 置	棟唐戸、板壁
縁・高欄・船障子	三方縁、組高欄、擬宝珠付登高欄、脇障子、 浜床	床	拭板張
天 井	なし	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	朱塗	飾 金 物 等	なし
繪 画	なし	材 質	檜・その他
彫 刻	木鼻(結様)、幕股		



写真52-29 南正面



写真52-30 向拝



写真52-31 海老虹梁、木鼻

改修札に「鎌倉幕府源頼朝臣使畠山重忠樋原景時當社再建令奉行なりト云」とし、「元暦年中古建物」と記している。元暦期(1184~1185)は、後鳥羽天皇の時期で、源氏と平家の争乱の時代である。向拝前の燈籠には、享和3年(1803)7月、石島居には宝永7年(1710)とある。

正面側面1間、流造銅板葺で正面中央に1間の向拝をもつ。身舎木鼻は、鳥の嘴のように先をとがらせた拳鼻で、絵様は比較的よく巻く渦をもち、彫りも少ない。向拝は側面が象鼻、正面と背面に身舎同様の拳鼻がつく。身舎は連三斗で桁を受け、向拝は大斗の上に肘木を3段重ねている。海老虹梁は、向拝組物上端卷斗と身舎斗拱を繋ぐようにかけられている。手挾はない。全体として彫刻は少なく、木鼻・幕股にみる程度である。全体として古風な意匠をもっていることから、17世紀後期から18世紀初期の建築と推定する。

地主稻荷神社（図52-9、表52-11、写真52-32~52-34）

八幡八幡宮となる以前に既に鎮座していた地主稻荷という地主神を祀ったものと伝える。その由来か

ら、明治10年(1877)の神社調べ時に地主稻荷を改め地主神社にしたという。その後、境内末社稻荷神社を合併し、現在に至る。穀物、夫婦和合、子授けの神といい、古来より信仰されてきた。本殿を覆う覆屋正面の神額には、「嘉永六年 二月大吉祥 別当神徳寺 稲名寺三十八世志範代」の文字と共に、板

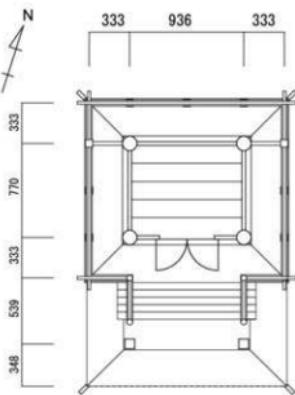


表52-11 地主稻荷神社

建造年代／根拠	安永4年(1775)／基礎亀腹銘	構造・形式	一間社流造(0.94m)、側面1間(0.77m)、千鳥破風付、向拝1間軒唐破風付、柿葺
工 匠	不明	基 础	石積一重基壇、亀腹
軸 部	[身合]土台、丸柱、長押、頭貫 [向拝]角柱、水引虹梁、海老紅梁、手挾、手肘木	組 物	[身合・腰組]三手先 [向拝]連三斗二重
中 備	[身合]幕股 [向拝]彫刻充填	軒	二軒簷垂木、彫刻板支輪
妻 飾	二重虹梁太瓶束結綿笈形、燕懸魚鰐付	柱 間 装 置	棟唐戸、板壁
縁・高欄・脇障子	四方縁、組高欄、擬宝珠付登高欄、脇障子、浜床	床	拭板張
天 井	竿縁天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木、朱塗(丸桁)、黒(垂木)、極彩色(彫刻)	飾 金 物 等	八双金物、破風飾金物(跡)
繪 画	なし	材 質	櫛
彫 刻	木鼻(絵様)、幕股(植物)、側面内法長押上(龍)、彫刻木鼻(獅子・狛・象・蟹)、彫刻軒支輪(波)、向拝柱(地紋彫)、正面棟唐戸脇(鳥・植物)、手挾(牡丹・渦)、脇障子(瓜・植物)		



写52-32 正面向拝



写52-33 背面



写52-34 海老紅梁、手挾

鼻の寄進者名が記されている。稱名寺は、八幡八幡宮の別当寺であった神徳寺の本寺である。

本殿は、正面側面1間、流造柿葺で正面中央に1間の向拝がつく。四方に縁を廻し、正面に木階5段を備え、肉厚な彫刻をもつ脇障子を据える。正面の開戸両脇に彫刻を充填し、彫刻軒支輪をもつ。幕股の彫刻は前面に飛び出し、貫や長押に刻線彫りがみられる。水引虹梁および海老虹梁には浮彫が施され、手肘木は花の丸彫、手挾は二対となる。彩色は主に彫刻部に施されている。

建造年に関する資料としては、基礎亀腹に安永4年(1775)12月の銘がある。建築細部意匠からも、亀腹銘の安永4年の建築と考えられる。

#### D A L A C \* 日枝神社 (図52-10、表52-12、写52-35～52-37)

正面側面1間、春日造板葺で正面中央に1間の向拝がつく。正面側面の三方に縁を廻し、正面に木階を設け、板脇障子を備える。組物は、身合が出組で向拝が連三斗。木鼻は、身合が拳鼻で向拝側面に象鼻がつく。水引虹梁は、刻線彫の唐草絵様で、詰組に彫刻幕股が据えられている。海老虹梁も刻線彫唐草絵様でいくぶん段違いに架けられおり、板手挾は

地紋彫りである。鳥の嘴のような尖りを持つ頭貫鼻は拳鼻で、屈折をもつ絵様は比較的よく巻き彫も少ない。

浜床裏に「文化十発西八月吉日 大工 赤尾豊吉 忠敏」、身合床裏に「延享四口六月」と読める墨書きがあった。全体的に朱塗で簡素な意匠をもち、各所に装飾の少ない古風な細部手法を用いていることから、本殿造営のための勧化御免を得た時期でもある延享4年(1747)の建築と推定する。浜床板

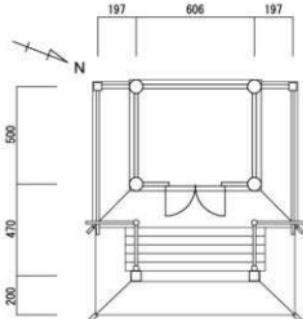


図52-10 平面図(日枝神社)

表52-12 日枝神社

建造年代／根拠	延享4年(1747)／墨書き	構造・形式	一間社春日造(0.61m)、側面1間(0.50m)、向拝1間、板葺
工 匠	不明	基 础	なし
軸 部	[身舎]土台、丸柱、長押 [向拝]角柱、水引 紅梁、海老紅梁、手挾	組 物	[身舎]出組 [向拝]連三斗
中 備	[身舎]詰組出組 [向拝]幕股	軒	二軒簷垂木、蛇腹支輪
妻 飾	虹梁太瓶束菱形付	柱 間 装 置	板戸、板壁
縁・高欄・脇障子	三方縁、組高欄、擬宝珠付登高欄、脇障子、浜床	床	拭板張
天 井	なし	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	朱塗、黒(垂木)	飾 金 物 等	釘隠
繪 画	脇障子および正面板戸脇(植物画)	材 質	檜
彫 刻	木鼻(絵様)、幕股、手挾、脇障子柱(刻線彫)		



写真52-35 正面



写真52-36 向拝



写真52-37 身舎組物

裏に材が取り外された跡が残ることから、文化10年(1813)に改修されたと推定する。覆屋は明治の中頃に建築されたものである。保管されている改築前の覆屋頭貫鼻の形状は、鳥の嘴のような尖りがあり、全体として東照宮の木鼻と酷似している。

### まとめ

境内には、社殿8棟、神門2棟、鐘楼を配し、攝社21社を祀る。古来より時の権力者に崇敬され、社僧・社家によって多くの神事をおさめてきた。現在、本殿を含む社殿は市の重要文化財に指定され、算額・胴丸・唐銅燈籠などの文化財も保有する。太々神楽や面・楽器等は無形民俗文化財に指定されており、奏者や舞手の育成にも力を注いでいる。毎

年行われる祭りには老若男女が集まり、地域に根差した行事となっている。境内社殿等はその建築時期を18世紀初期から19世紀中期頃と考えられ、一体的に管理維持され現在に至り、神社建築装飾化の過程を目にすることができる。また、唐銅燈籠や蚕養神社(天満宮)に代表されるように、時代を反映し、地域と共に生き、数世紀にわたり市内外から敬慕の念を集めてきた。建築を通して時代を語ることができる重要な遺構でもある。

(吉垣内英子)

### 【参考文献】

- 『新編 高崎市史 資料編14 社寺』高崎市 平成15年
- 『八幡村誌』八幡村誌編纂委員会 昭和31年
- 『群馬県史 資料編10 近世2』群馬県 昭和53年

## 56 棚名神社【はるなじんじゃ】

表56-1

神社名	棚名神社	所在地	高崎市棚名山町甲849
旧社格	県社	所有者・管理者	宗教法人 棚名神社
主祭神	火照靈神、坂山鹿充神	神事	神楽始式(2/15)、端午祭(5/5)、神幸祭(5/8~15)、棕祭(6/5)、例祭(10/9)
創立・沿革	社伝によると明明天皇元年(586)に祭祀の場が創建される。延喜式内社である。境内には9世紀頃の寺院跡である巖山遺跡が確認されており、古くから神仏習合が定着していた。戦国期は衰微するが、天海僧正により復興された。		
文化財指定	本社・幣殿・拝殿、國祖社及び額殿、神楽殿、双龍門、神幸殿、隨神門(国重文 平成17年12月)、棚名川上流砂防堰堤(国登録 平成18年8月)、棚名神社神宝殿(県重文 平成28年9月)、棚名神社の矢立石(国天記昭和8年4月)、棚名神社の懸仏(市重文 昭和44年2月 高崎市棚名歴史民俗資料館収蔵)、関流算額文化八年銘(県重文 昭和51年5月)、鉄燈籠(県重文 昭和57年4月)、天神岬の石燈籠(市重有民 昭和57年4月)、棚名神社文書(県重文 平成13年3月 高崎市棚名歴史民俗資料館収蔵)、棚名神社神代神樂(県重無民 平成15年9月)、棚名神社御旅所跡(市史跡 昭和44年2月)、棚名山番所跡(市史跡 昭和57年4月)、棚名神社九折岩・鞍掛岩(市名勝 平成2年4月)、棚名神社萬年泉碑(市重文(民俗) 昭和57年4月)、棚名山岩脈(市天記 昭和63年5月)、キヨスマコケシノブ自生地(市天記 平成2年4月)、天然ヒノキの群落(市天記 昭和63年5月)、棚名神社萬年泉碑(市重有民 昭和57年4月)		



图56-1 配置図

位置・配置 (图56-1、写56-1)

上毛三山の一つである棚名山の中腹にあり、棚名湖の南方に位置する。棚名湖から県道33号渋川松井田線を南下し、棚名川を超えると門前町形態で宿坊の雰囲気を今に伝える社家町に着く。社家町を抜け境内に入ると二ノ鳥居があり、隨神門がある。みそぎ橋で棚名川を渡ると、左は岩壁と寺院跡、右に棚名川が流れる。奇岩と木々に囲まれた参道を進むと売店や三重塔があるが、参道は行者渓を渡り奥へ続く。萬年泉を過ぎると目の前に御水屋があり、天然記念物の矢立石と神幸殿が隣接する。そのまま階段を上って神門をくぐると社務所のある平地に着く。階段を上り、双龍門を抜けた先に本殿である御姿岩と、一体化的な社殿(本社・幣殿・拝殿)があり、そのまわりに神楽殿、國祖社・額殿がある。境内には神仏習合時の建物の他、山岳信仰の靈場としての痕跡も残っている。



写56-1 境内

## 由来および沿革

五穀豊穰の神である埴山毘売神を主祭神としていることから、庶民信仰の場としての形態を強め、集団での参詣が生まれ、後に棟名講になり関東一円に組織された。江戸中期には門前の社家町がとくに発展した。明治の神仏分離により仏教色が廃された。

ほんじや  
本社（図56-2、表56-2、写56-2～56-7）

棟札より文化3年(1806)の再建である。棟札には「奉再營溝行宮本社拝殿」とあり、当時の呼称が記されている。建物は本社・幣殿・拝殿の屋根が連続する權現造であり、背面は御姿岩と一体的に接続している。御姿岩の洞窟前面に位置するのが本社である。本社背面の御扉の先は御姿岩洞窟になり、洞窟内の空間を本殿として、その奥に御神体が祀られている。御扉から先の本殿の工事には深秘棟梁しか携わることができない。工匠は深秘棟梁が園田李司

清房、御小屋取締大工割頭棟梁が関根吉右衛門昌である。棟梁の一人である内田清八珍義は妻沼聖天山歎院院聖天堂の棟梁林兵庫正清の門弟であり、聖天堂奥殿建設の世話人である内田清八の流れを汲む。彫刻師の間口文次郎は聖天堂でも腕を振ったと伝わり、山名八幡宮、桐生天満宮、三峰神社等に多くの作品を今に遺している。名匠として名高く、棟名神社社殿の彫刻が最晩年の作品である。鏡板張天井の雲龍画は仙台藩絵師の根本常南による。

規模は正面3間、側面2間の隅木入春日造銅板平葺である。棟には置千木が1つ、堅魚木が3本、正面に鬼板が付き、背面は御姿岩と接続する。軸部は土台に丸柱を建て、頭貫で繋ぐ。正面柱は角柱とし天端を身柱より下げる。側面の前方一間は角柱と丸柱の柱頭部を海老虹梁で繋ぎ、差鴨居をつける。後方一間には腰・内法長押をつけ、縁廻りに切目長押をつける。外部角柱正面に獅子、側面に狛、中柱に

表56-2 本社

建造年代／根据	文化3年(1806)／棟札	構造・形式	三間社隅木入春日造(4.45m)、側面2間(3.79m)、銅板平葺(権現造)
工 匠	[大工]深秘棟梁 計畫坊邦代 畠田李司清房、御小屋取締大工割頭棟梁 後見武州児玉郡宮内邑 関根吉右衛門昌 同断棟梁兼脇梁 梁 関根河内久房、武州幡羅郡三ヶ尻村 内田清八珍義、飯田和泉藤安範／棟札 [彫工] 間口文次郎、古文書 「天井繪師」仙台藩絵師根本常南／墨書き	基礎	亀甲積基壇、布基礎石、切石亀腹、束石(縁部)
軸 部	丸柱、角柱(正面)、土台、足元長押 [前方一間]差鴨居、海老虹梁、頭貫(正面) [後方一間]長押(切目、腰、内法)、頭貫	組物	[身舎外部]三手先組、尾垂木付(一手・二手先)、拳鼻付(三手先)、丸彫蟹(三手先隅) [外部正面]連三斗積上変形 [屋内]拳鼻付組出 [腰組]押肘木、拳鼻付組出、束(補強用)
中 備	幕股、嵌込彫刻(屋内背面中央間)	軒	二軒垂木、彫刻板支輪、蛇腹支輪
妻 飾	[壁]虹梁笠形付大楓頭、前包、須覆、幕股(中段)、出組、彫刻板支輪 [破風]反り破風(眉欠2段)、若葉替付蕉懸魚、六葉(中心に菊蓋)	柱間装置	[正面]アキ、鏡板 [侧面]鏡板、舞良戸、障子 [背面]御扉
縁・高欄・船障子	三方切目線、削高欄、登高欄付、脇障子	床	疊敷
天 井	鏡板張天井(雲龍画)	須弥壇・扇子・宮殿	御扉(御姿岩内入口)
塗 裝	全体的に朱塗と黒塗を基調とする。[外部]生彩色(木鼻、幕股の鷹、彫刻板支輪の飛龍等)、蛇腹支輪唐戸面) [屋内]極彩色(獅子鼻、彫刻板支輪)	飾金物等	[外部]千木端部鉄金物、尾垂木端部鉄金物(猪口付目入八双脚草紋様)、擬宝珠 [屋内]御扉(總八双金物、引手金物 菊花唐草紋様)、長押端部(六葉金物)
繪 画	天井画(雲龍画)	材質	漆、檜、杉、檜、栗など
彫 刻	[身舎外部]丸柱(地紋彫 雪水・浮彫 龍)、隅角柱(地紋彫 隅江梅花紋様)、足元長押(地紋彫 入子菱梅花紋様)、腰組部押肘木(竈彫 松・鳩・松)、腰羽目影刻(透彫 小舟・水夫・積荷・鳥・松・川)、腰組影刻板支輪(浮彫 龍・波)、腰長押(地紋彫 菊菱紋様)、胴羽目影刻(透彫 琴棋書画)、脇障子羽目影刻(透彫 唐獅子・牡丹)、竹節欄間彫刻(透彫 菊)、脇障子架木(地紋彫 雪麻の葉紋様)、脇障子羽目影刻敷戸(地紋彫 紗綾形紋様)、脇障子架木(地紋彫 紗綾形紋様)、差鴨居(地紋彫 花菱紋様)、内法長押(地紋彫 菊菱紋様)、頭貫(地紋彫 花菱紋様)、海老虹梁(浮彫 梅枝)、木鼻(丸彫 獅子・狛・蟹・鼈・牡丹)、拳鼻、絵様肘木(刻線彫 潤紋様)、幕股脚内(浮彫 鳥・柏・山鶲・杜若)、彫刻板支輪(浮彫 雪水・飛龍・雪水)、手挾(竈彫 牡丹) [屋内]背面中央間虹梁(浮彫 樹木の枝・鳥)、木鼻(丸彫 獅子)、海老虹梁(刻線彫・沈彫 唐草紋様)、虹梁上部嵌込彫刻(九彫 龍)、幕股脚内(浮彫 鶴・松・鷺・沢鶴)、拳鼻、絵様肘木(刻線彫 潤紋様)、彫刻板支輪(浮彫 雪水)		



写56-2 全景



写56-3 側面



写56-4 屋内



写56-5 天井



写56-6 屋内 正面組物



写56-7 脊羽目彫刻

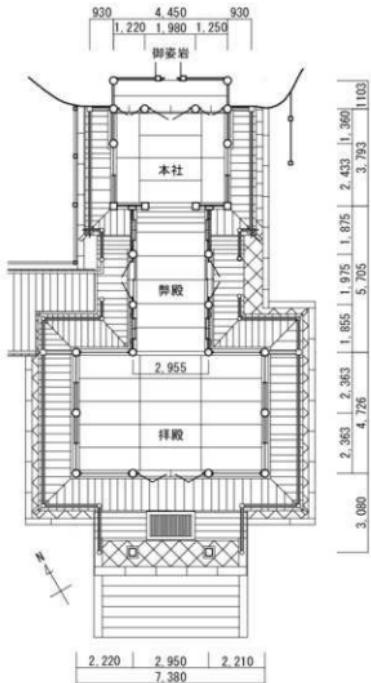


图56-2 平面图(拝殿)

竈彫の牡丹を飾る。屋内では背面中央間の柱頭部は虹梁で繋ぎ、丸柱上部は極彩色の獅子がつく。組物は外部が三手先組で、一手・二手先端に尾垂木をつけ、三手先端は拳鼻で隅に丸彫の蟹をつける。正面が連三斗積上変形である。屋内は拳鼻付の出組で一手目の通肘木が天井棒を支える。正面は一手目の肘木と斗を2段積み上げ実肘木を介して通肘木を乗せ天井棒を支える。積み上げた肘木上部には斗を細かく並べる。正面中央間は一手目の肘木を渡さず、柱筋1段目通肘木・一手目通肘木間の彫刻板支輪を大きく見せる。腰組は竈彫の押肘木の上に拳鼻付出組を載せ、縁の端部を束で支える。組物の通肘木間は彫刻板支輪で、外部三手先組3段目は蛇腹支輪である。中備は後方一間の外部と屋内の側面が竈股で、屋内の御扉のある背面中央間は丸彫の目貫龍の嵌込彫刻である。軒は二軒繁垂木であり、前面は地垂木、打越垂木、飛檐垂木と3段に軒を伸ばす。

彫刻は、獅子鼻や猿鼻の他に、透彫の胴羽目彫刻、腰羽目彫刻、脇障子羽目彫刻があり、腰組の押肘木は竈彫の松に鳩も彫られている。胴羽目彫刻の題材は琴棋書画で、脇障子羽目彫刻は唐獅子牡丹である。柱や長押には多様な地紋彫が施されている。全体的に朱塗と黒塗を基調とし、外部では生彩色、屋内では極彩色も配する。

また、本報告書での建物名称は国重要文化財指定の名称に合わせてある。神社では御神体を祀る御姿

岩を本殿とし、本報告書での本社を本社幣殿、幣殿を本社間殿、拝殿を本社拝殿と呼び、本社、幣殿、拝殿一体で本社と呼ぶ。

#### 幣殿（図56-2、表56-3、写56-8～56-10）

権現造の相の間である。正面1間、側面3間の両下造銅板平葺であり、正面は拝殿に、背面は本社に接続する。屋内は疊敷とし、本社側に3級の階がある。縁の階は5級である。格天井で格間にには天井画があり、牡丹を中心に描かれている。墨書より旭燕齊 藤原元知の作である。

軸部は土台の上に丸柱を建て頭貫で繋ぎ、内法長押、切目長押をつける。側面後方一間の頭貫は本社正面側から湾曲させて繋ぐ。側面の脇間にには中敷居

を取りつけて火灯窓を開け、中央間は敷居と鴨居を軸摺とした両開き棧唐戸を設ける。ともに内側は障子建てである。中備は幕股で脚内は透彫で多様な植物と鳥が施されていて、屋内は極彩色で、外部の鳥には生彩色が施されている。彫刻は外部側面の丸柱上部と屋内背面角柱上部に獅子鼻をつけ、側面の前方一間と中央間には頭貫・内法長押間に透彫の嵌込彫刻を取り付ける。題材は鶴と松である。柱の外部には本社と拝殿と同様に雲水の地紋彫に浮彫の龍がつき、拝殿との入隅部の柱には浮彫の鯉がつく。全体的に朱塗と黒塗を基調とし、外部では彫刻板支輪の浮彫の鳥にも生彩色、屋内の彫刻板支輪の浮彫の雲水と、屋内背面の獅子鼻にも極彩色が施されている。

表56-3 幣殿

建造年代／根柢	文化3年(1806)／棟札	構造・形式	正面1間(2.95m)、側面3間(5.70m)、両下造銅板平葺(権現造)
工 匠	[大工]深秘棟梁 詳雪坊邦珍代 園田李司清房、御小屋取締大工割頭棟梁 後見武州児玉郡宮内色 関根吉右衛門隆昌、同断棟梁兼監督 梁 関根河内久原、武州橋郷郡三ヶ尻村 内田清八珍義、飯田和泉藤安範／棟札、[彫工]関口文次郎／古文書 [天井絵師]旭燕齊 藤原元知／墨書	基 础	亀甲積基壇、布基礎石、束石(縁部)
軸 部	丸柱、角柱(本社境)、土台、中敷居、長押(切目・内法)、頭貫	組 物	[身合]三手先組、尾垂木付(一手・二手先)、拳鼻付(三手先) [屋内]拳鼻付出組、[腰組]搏肘木、三手先組、束(補強用)
中 備	[身合]幕股	軒	二軒繁垂木、彫刻板支輪
妻 飾	なし	柱 間 装 置	[正面]アキ [背面]アキ、鏡板 [側面]両開棧唐戸、火灯窓、障子
縁・高欄・脇障子	側面擬宝珠高欄(西側は渡り廊下に接続)	床	疊敷、階
天 井	格天井	須彌・扇子・宮殿	なし
塗 裝	全般的に朱塗と黒塗を基調とする。[外部]生彩色(幕股の鳥、彫刻板支輪の鳥) [内部]極彩色(幕股、彫刻板支輪、獅子鼻)	飾 金 物 等	[外部]尾垂木端部鋲金物(猪目付入八双唐草紋様)、擬宝珠 [屋内]端部鋲金物(端部 入八双唐草紋様、中央部 出八双唐草紋様)
繪 画	天井画(格天井格間 牡丹、牡丹・鳥、牡丹・蝶)	材 質	櫛、杉、檜、栗など
彫 刻	[身合外部]柱(地紋彫 雲水・浮彫 龍)、入隔柱(地紋彫 雲水・浮彫 鶴)、腰組部押肘木(電彫 亀・波)、腰羽目彫(透彫 波・千鳥)、腰組彫刻板支輪(浮彫 龍・波)、中敷居(地紋彫 麻の葉紋様)、内法長押(地紋彫 紗綾形花菱形の葉紋様)、頭貫下嵌込彫刻(透彫 鶴・松)、頭貫(地紋彫 花菱紋様)、木鼻(丸形 獅子)、幕鼻、絞目肘木(絞目線彫 浮彫紋様)、幕股脚内(浮彫 鳥・植物)、彫刻板支輪(浮彫 雲水・鳥) [屋内]屏風彫虹梁(幣殿側 刻線彫、沈彫 波)、本社境虹梁型差鴨居(幣殿側 浮彫 鶴・松)、虹梁持送(電彫 鶴・松)、幕股脚内(浮彫 塚・柏、鷦鷯・杜若、等)、木鼻(丸形 獅子)、彫刻板支輪(浮彫 雲水)		



写56-8 側面



写56-9 屋内



写56-10 天井

## 拝殿（図56-2、表56-4、写56-11～56-13）

正面3間、側面2間の入母屋造銅板本瓦棒葺である。背面は銅板平葺である。平入で、正面には千鳥破風が付き、3方の妻飾りは同一形式である。正面と側面の軒には唐破風が付く。大棟には置千木1

対、竪魚木5本、千鳥破風の棟には置千木1つ、竪魚木2本が付く。背面中央間で幣殿と接続している。

身舎部の軸部は土台に丸柱を建て頭貫で繋ぐ。正面と背面中央間は差鶴居をつけ、正面中央間と背面中央間は内外ともに虹梁型で、正面脇間は外側のみ

表56-4 拝殿

建造年代／根柢	文化3年(1806)／棟札	構造・形式	正面3間(7.38m)、側面2間(4.72m)、入母屋造、平入、向拝1間、正面・側面軒唐破風付、千鳥破風付、銅板本瓦棒葺(背面：銅板平葺)(現観)
工 匠	[大工]深秘棟梁 詳雪坊邦珍代 園田査司清房、御小屋取締大工割頭棟梁 後見式州見玉郡宮内邑 開根吉右衛門昌、同断棟梁兼脇棟梁 開横河内久原、武州幡羅郡三ヶ尻村 内田清八珍義、飯田和泉藤安範／棟札 [彫工] 開口文次郎／古文書	基 础	龜甲積基壇、布基礎石、東石 [向拝]青石、基礎
軸 部	[身舎]丸柱、土台、長押(切目・内法)、頭貫、差鶴居(正面・背面中央間) [向拝]角柱、水引虹梁、二重虹梁、海老虹梁、手挾	組 物	[身舎外部]三手先組、尾垂木付(一手・二手先)、拳鼻付(三手先)、丸彫置(三手先側) [屋内] 拳鼻付(出組) [腰組]押肘木、三手先組、東 [向拝]連三斗積上変形
中 備	[身舎]幕殿、彫刻板支輪 [腰組]彫刻板支輪 [向拝]嵌込彫刻	軒	二軒垂木、彫刻板支輪
妻 飾	[壁]虹梁笠形付大瓶束、前包、須覆、幕股(中段)、出組、彫刻板支輪 [破風]反り破風(柱欠2段)、若葉飾付無懸魚、六葉(中心に雷)	柱 間 裝 置	[正面]諸折戸戸、半蔀 [側面]舞良戸、障子 [背面]半蔀
縁・高欄・脇障子	四方切目縁、擬宝珠高欄、登高欄付、開閉式脇障子	床	疊敷
天 井	折上格天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 裝	全体的に朱塗と黒塗を基調とする。[外部]生彩色(太鼓羽目彫刻、海老虹梁の龍)、極彩色(水引虹梁上嵌込彫刻、頭貫下嵌込彫刻、手挾)、[内部]極彩色(幕股、櫛間彫刻)、彫刻板支輪、金箔押(正面虹梁刻線彫・沈彫、幣殿境虹梁浮彫)	飾 金 物 等	[外部]擬宝珠、向拝柱根巻金物(亀甲紋様)、尾垂木端部鍍金物、垂木端部鍍金物、縦破風端部(猪目付入八双草花紋様)、唐破風鍍金物(三つ巴紋章) [屋内]格綱鍍金物(十字)
繪 画	[天井画][格天井格間]飛龍、杜若、朝顔、菊、等四季の草木 [支輪板]波・千鳥	材 質	桺、杉、檜、栗など
彫 刻	[身舎外部]柱(地紋彫) 雲水・浮彫(龍)、入隅柱(地軟彫) 雲水・浮彫(鯉)、腰組部押肘木(箆彫) 亀・波・扉・波、彫羽目彫刻(浮彫 波・千鳥)、腰組彫刻板支輪(浮彫 龍・雲水)、脇障子嵌込彫刻(透彫) 竹林の七賢人、虎溪三笑)、脇障子柱(地紋彫) 箕木菱紋様)、脇障子架木(地紋彫 三桿菱紋様)、正面中央間虹梁(浮彫 菊水)、虹梁型差鶴居(浮彫 菊水)、内法長押(地紋彫 紗綾形花菱麻の葉紋様)、頭貫下嵌込彫刻(透彫 鶴・松)、頭貫(地紋彫 花菱紋様)、木鼻(丸彫 獅子、蟹、鼈彫)、牡丹)、拳鼻、絵様肘木(刻線彫 淡墨様)、蔓股脚内(浮彫 鳥・植物)、彫刻板支輪(浮彫 雲水・鳥)、太鼓羽目彫刻(男性二人、松・瑞雲)、鬼毛通(透彫 亀・波)、波・松・蓮・鶯等)、蔓股脚内(浮彫 椿・雀)、龍馬、瑞雲等)、彫刻板支輪(浮彫 雲水) [向拝]向拝柱(地紋彫 網代紋様・浮彫 梅枝)、水引虹梁(地紋彫 紗綾形紋様・浮彫 梅・鳥)、二重虹梁(浮彫 波)、水引虹梁持送(浮彫 梅・瑞雲)、水引虹梁上嵌込彫刻(透彫 鷹・柏・波)、木鼻(丸彫 獅子、鼈彫 牡丹)、海老虹梁(浮彫 瑞雲・丸彫 昇龍、降龍)、手挾(簷毫 山桃・猿・菊・山鶴)、太鼓羽目彫刻(透彫 司馬光菱形図)、鬼毛通(透彫 凤凰・瑞雲)		



写56-11 正面



写56-12 海老虹梁



写56-13 天井

虹梁型である。側面と背面脇間に内法長押と切目長押をつける。向拝部は杏石と礎盤に角柱を建て、柱頭部を水引虹梁で繋ぎ、身舎と海老虹梁で繋ぐ。柱頭部正面は獅子鼻、側面は竜彫の牡丹で飾る。唐破風内側の桁は虹梁型である。組物は外部が三手先組で、一手・二手先端に尾垂木をつけ、三手先端は拳鼻で隅に丸彫の蟹をつける。向拝部は連三斗積上変形である。屋内は拳鼻付の出組で一手目が天井枠を受けて、折上格天井回縁を支える。軒は二軒繁垂木であり、向拝部は地垂木、打越垂木、飛檐垂木と3段に軒を伸ばす。柱間装置は正面中央間に諸折棟唐戸で、正面と背面の脇間に半蔀、側面が舞良戸と障子からなる。本社、幣殿、拝殿は彫刻が隅々まで施されているが、向拝まわりは精緻な彫刻が集中している。海老虹梁には丸彫の昇り龍と降り龍が力強く巻き付く。

#### 隨神門（図56-3、表56-5、写56-14～56-16）

3間1戸八脚門、側面2間の入母屋造銅板本瓦棒葺で前後の軒に唐破風をつける。南面して建ち、参

道と通じる中央間が通路であり、通路の両側は前後に仕切られた屋内空間である。前方の両側の間に隨神像を祀る。後方の両側の間に像などは置かれていない。神仏習合のころは仁王門と呼ばれ仁王像が置かれていた。現在の隨神像は明治39年（1906）の丙午還暦大祭の際に祀られたもので室町田が奉納した。中央の通路には幕末三筆の一人巻菱湖門下四天

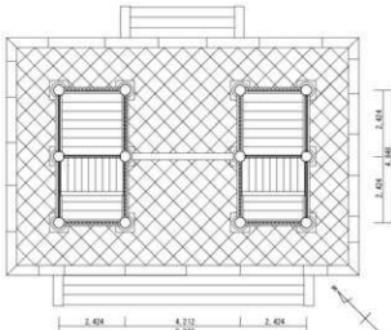


図56-3 平面図(隨神門)

#### 表56-5 隨神門

建造年代／根据		江戸末期／建築様式	構 造 ・ 形 式	3間1戸八脚門(9.06m)、側面2間(4.84m)、入母屋造平銅板本瓦棒葺、前後軒唐破風付
工 匠	[大工] 棟梁 間根修理／社伝 [隨神像彫刻師] 東京日本橋 安田松慶／墨書き	基 础	礎	切石積基壇1段、資石、礎盤
軸 部	丸柱、地覆、足元貫、腰貫、内法虹梁、飛貫(側面)、頭貫	組 物	[外側] 尾垂木付三手先組 [内側] 出組	
中 備	詰組(中央間)	軒	二軒繁垂木、彫刻板支輪	
要 飾	[壁] 虹梁大瓶束、前包、出三斗(母屋受) [破風] 反り破風(眉尻2段)、鰐付無懸魚、六葉、雀口	柱 間 装 置	布羽目、格子	
縁・高欄・監障子	なし	床	石敷(四半敷)、拭板張	
天 井	鏡板張天井、格天井	須弥壇・扇子・宮殿		須弥壇・扇子・宮殿
塗 裝	布羽目一部(こげ茶)、彫刻板支輪(楓彩色)、天井格縁(黒塗、片几帳面朱塗)、素木	飾 金 物 等	飛檐隅木逆輪(入八双金物)、飛檐隅木木口	
繪 画	天井墨書き(原田槐雲、雲龍)	材 質	檜	
彫 刻	内法虹梁(浮彫 波・亀、刻線彫、沈彫 荘草紋様、菊水)、内法虹梁持送(籠彫 牡丹)、木鼻(丸彫 獅子、竜彫 牡丹)、軒支輪(浮彫 雲鶴、菊水)、天井支輪(浮彫 雲水)、絵様肘木、拳鼻(刻線彫 洞紋様)、兎毛通(透彫 鶴の巣籠、鳳凰)			



写56-14 正面



写56-15 侧面



写56-16 正面組物

王の一人荻原秋巣による「太々御神楽」と書かれた扁額と、後方の間の天井全体には学者・書家として活躍した原田槐雲による「雲龍」の墨書がある。

基礎は切石積基壇1段の上に杏石と礎盤を据える。基壇上面は四半敷で縁部に葛石を巡らす。軸部は礎盤の上に丸柱を建てて地覆・足元貫・腰貫・内法虹梁・頭貫で繋ぐ。外側の側面は丸柱を地覆・足元貫・飛貫・頭貫で繋ぐ。柱頭部は獅子鼻で飾る。組物は外側は尾垂木付三手先組、内側は出組で一手目実肘木が天井枠を支える。外側の通肘木間は柱筋の1段目は斗を細かく並べ、一手・二手目間、二手・三手間は彫刻板支輪である。内側の通肘木・天井枠間も彫刻板支輪である。中備は正面と背面の中央間に詰組で、内法虹梁に大瓶束を建てて支える。軒は二軒繁垂木である。主な彫刻は虹梁縁形、彫刻板支輪、内法虹梁持送と正面中央間大瓶束頂部の籠形の牡丹・獅子鼻である。虹梁には正面中央間に浮彫で波と亀が付され、他は刻線彫と沈彫を併用した唐草紋様や菊水の縁形がある。彫刻板支輪は浮彫の雲鶴や菊水や雲水で躍動感がある。彫刻は全体的に減り張りのある配置で、細やかな彫刻がほどこされており、江戸末期の特徴をよく示している。また、彩色に関しては剥落が著しいが彫刻板支輪に極彩色が施されていたことが確認できる。内側の彫刻板支輪付近の組物や天井板は素木のように見える。外側は紫外線や風雨の影響があるので塗装や彩色の剥落を考慮しなくてはいけないが、軸部、組物、中備などは

素木のように見える。軸部などは櫛が多用されている。

建造年代は棟札や古文書では確認できなく、社伝には天保元年(1830)に再建に着手、弘化4年(1847)に完成したと伝わるが、彫刻や素木造などが示す建築様式より江戸末期と推定する。

#### 神幸殿(図56-4、表56-6、写56-17~56-19)

古式の仏堂の形式を踏襲している。春の大祭の時は神社の御神体がこの社殿に移される。祭りの期間

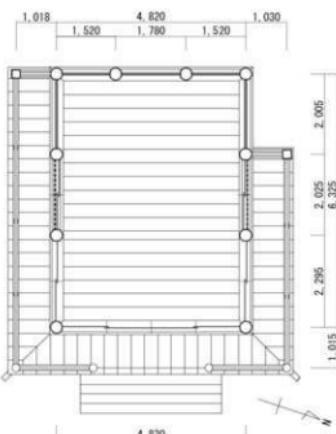


図56-4 平面図(神幸殿)

表56-6 神幸殿

建造年代／根据	江戸末期／建築様式	構造・形式	正面1間(4.82m)、側面3間(6.32m)、背面3間(4.82m)、入母屋造、妻入、銅板葺
工 匠	不明	基 础	切石積基壇1段、礎石(切石)
軸 部	丸柱・土台、切目長押・頭貫・台輪 [一部] 差鴨柱(外側虹梁型)、内法長押・中敷居	組 物	[外側]拳鼻付出組 [屋内]出三斗
中 備	[外側]詰組(正面)、葵股(正面)、撥束(背面)、斗のみ(東なし・側面)、[屋内]撥束	軒	二軒繁垂木、彫刻板支輪
要 飾	[壁]虹梁大瓶束・前包・須覆・拳鼻付平三斗(中備) [破風]反り破風(欠眉2本)、若葉緋付燕懸魚・六葉	柱 間 裝 置	4枚引違ガラス戸、引違ガラス戸、火灯窓、障子
絹・高欄・脇障子	三方切目縁、擬宝珠高欄、脇障子	床	拭板張
天 井	競板格天井	須弥壇・扇子・宮殿	床置き神棚
塗 装	全体的に素木、正面破風(朱塗に一部黒塗)、正面透彫(朱塗、黄色、黒塗)、裏面破風(朱塗)、格縁(黒塗、片几面朱塗)、獅子の目(黄色、黒塗)、獅子の口(朱塗)	飾 金 物 等	擬宝珠、隅縁葛端部、隅木端部、正面破風(破風拵み)、破風戻、入八双金物)
繪 画	なし	材 質	櫛
彫 刻	押肘木(刻線彫・沈彫 唐草紋様)、差鴨居虹梁部分(刻線彫・沈彫・浮彫 波・刻線彫・沈彫 唐草紋様)、内法虹梁(刻線彫・沈彫 唐草紋様)、幕脇(浮彫 松・透彫 鳥・浮彫 瑞雲・一部透彫 鳥)、木鼻(丸彫 獅子・刻線彫 拳鼻)、軒支輪(浮彫 雲鶴・波)、妻飾虹梁(刻線彫 唐草紋様)		



写56-17 正面



写56-18 屋内



写56-19 木鼻 獅子

は扉が開けられ、昇殿して参拝することができる。正面1間、側面3間、背面3間の入母屋造妻入銅板平葺である。急傾斜地に建ち、参道のある東側を正面とし、平面は一室である。屋内の正面から1間分奥に内虹梁があり、前後に空間を分節する。内虹梁より少し奥に床置きの神棚が置かれている。

基礎は切石積基壇1段の上に切石の礎石を据える。基壇は正面東側と側面南側に切石を積み傾斜地を整地している。軸部は土台の上に丸柱を建て頭貫で繋ぎ台輪を置き、切目長押と内法長押をつける。正面と北側の側面一部に外側虹梁型の差鶴居がある。正面は4枚引違ガラス戸の開口部で、背面は布羽目で筋交いがつき、側面は前方1間が引違ガラス戸、中央間が火灯窓、後方1間が布羽目である。柱頭部は獅子鼻で飾り、背面は拳鼻である。組物は外側が拳鼻付外組で、柱筋1段目通肘木・丸桁間は彫刻板支輪である。屋内は出三斗であり、一手目の斗が格天井の廻縁を支える。中備は正面は差鶴居中央に大瓶束を建てて詰組とし、組物間に幕股を置く。背面中央間と屋内は撥束とする。軒は二軒半繁垂木である。縁は三方切目縁で押肘木で支え、脇障子は額縁内を格子とする。彫刻は主に虹梁線形、幕股、彫刻板支輪に施され、獅子鼻は一つ一つの表情は異なり美しい彫刻である。正面の虹梁には刻線彫と沈彫と浮彫を併用した波が彫られてる。彫刻板支輪は浮彫の波で正面は雲鶴である。全体的に素木造で、塗装は一部に限られる。破風板と懸魚が朱塗で、一部黒塗や黄色塗である。屋内格天井格縁は黒塗に片几帳面を朱塗とする。獅子鼻は素木造で、目や口に一部彩色をしている。

建造年代は棟札や古文書では確認できなく、社伝では安政6年(1859)と伝わるが、建築様式より江戸末期と推定する。

### 双龍門 (图56-5、表56-7、写56-20~56-22)

建造年代は棟札より安政3年(1856)年である。嘉永6年(1853)に建立を企画した。1間1戸四脚門であり、4枚の扉に龍の浮彫があることから双龍門と呼ばれる。彫工の長谷川源太郎は小林源八の系統を継ぐ二代目で、小林源太郎とも称し、関東の名工とか熊谷源太郎とも称された。号を小琳斎と称す。三代目を高弟の小林丑五郎に譲り、弘化2年(1845)年に拠点を越後に移した。新潟県内に多くの名作を遺し、石川雲蝶との多くの共作も遺した。棟梁の清水和泉正藤原光賢は境内にある神宝殿(三重塔)の棟梁でもある。伊香保神社も代表作であり、水沢観音の六角堂の修繕復旧にも携わった。雲龍画絵師の矢鳴群芳は豪壮な人物であり、和漢の歴史に精通し、禅を修め学識深く、武芸にも秀でていた。高崎藩に仕えたが40余年間藩を脱して諸国を旅して歩いた。晩年は藩主に召還され彩筆をふるった。

本柱は丸柱であり、本柱間は虹梁型冠木で繋ぎ、柱頭に狛鼻をつける。袖柱は角柱であり、袖柱間は虹梁で繋ぎ、柱頭に獅子鼻をつける。側面は頭貫で繋ぎ腰長押をつける。組物は外側は二手先組で、一手先端に尾垂木をつけ、二手先端は拳鼻で隅に丸彫の蟹をつける。内側は出組で一手目の斗が天井枠を

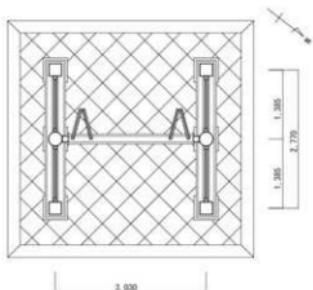


图56-5 平面図(双龍門)

受けて天井の鏡板を支える。柱筋1段目の通肘木上部には巻斗を細かく並べ、外側二手先組の一手目通肘木・丸栱間には彫刻板支輪である。中備は本柱間と袖柱間は詰組で、組物間は嵌込彫刻である。軒は二軒繁垂木である。彫刻は隨所に施され細やかである。欄間彫刻は透彫で三国志演義を題材としており、2枚1組で4つの場面を表している。中備嵌込彫刻は透彫で中国故事や龍の他に鶴や亀などがあり多様である。兎毛通は透彫の麒麟と鳳凰である。正

面虹梁外側の浮彫の菊水も細やかで躍動感があり、虹梁持送は籠彫の菊である。紗綾形紋様の地紋彫が本柱、虹梁、頭貫、腰長押、鼠走、方立には施されている。袖柱のみ刺亀甲紋様であるのが特徴である。飾金物で破風板、垂木木口、尾垂木木口、腰長押、柱脚なども飾る。全体的には素木であるが、塗装は裏甲の黒塗を確認することができる。彫刻の獅子や龍の目や口に一部彩色がある。

写56-7 双龍門

建造年代／根拠		安政3年(1856)／棟札	構造・形式	1間1戸四脚門(3.03m)、側面2間(2.77m)、入母屋造、平入、前後千鳥破風付、四面軒唐破風付、銅板平葺
工 匠	[大工]棟梁 当国当郡富岡村 清水和泉正藤原光賛／棟札 [彫工]無谷宿 小林齊(長谷川源太郎)／箱棟側板墨書き [絵師]高崎藩士 矢嶋群芳	基	礎	青石、礎盤
軸 部	台輪 [本柱間]丸柱、虹梁型冠木 [袖柱間]角柱、虹梁 [側面]腰長押、頭貫	組	物	[外側]二手先組 [内側]出組
中 備	嵌込彫刻 [本柱間、袖柱間]詰組	軒		二軒繁垂木、彫刻板支輪
妻 飾	[壁面]前包、斗組(斗・絵様肘木 母星受)、嵌込彫刻、梁 [破風]反り破風(眉欠2段)、波銷付懸魚、六葉、檣口	柱 間 裝 置		諸折桟唐戸、欄間彫刻
縁・高欄・監障子	なし	床		石敷(四半敷)
天 井	鏡板張天井	須弥壇・扇子・宮殿		なし
塗 裝	朱塗(一部の獅子の口、鼻、一部の龍の口、耳)、黒塗(裏甲、一部の獅子の目、一部の龍の目)、黄色(一部の獅子の目、一部の龍の目)	飾 金 物 等		[鉄金物]柱根巻金物(紗綾形紋様)、方立根巻金物(入八双唐草結華紋様)、腰長押端部(入八双蜀江鈎紋様)、垂木木口、飛檐隅木口、尾垂木木口(三つ巴紋章)、垂木逆輪、尾垂木逆輪、飛檐隅木逆輪、茅負端部、茨垂木端部、茨部、鼠走端部、方立頭部(入八双唐草紋様)、菖蒲折端部(唐草紋様)、千鳥破風、唐破風(破風抨三つ巴紋章・入八双唐草紋様、中畳らし 三つ巴紋章(唐草結華紋様付)、破風尻入八双唐草紋様)、棟唐戸、欄間柵(一文字、隅出八双唐草紋様)
繪 画	天井画(雪龍画 登龍、降龍)	材 質	漆、檜	
彫 刻	本柱(地紋彫 紗綾形紋様)、袖柱(地紋彫 刺亀甲紋様)、欄間彫刻(透彫 長坂坡趙雲救幼主、張飛揮水斬赤、玄徳三顧茅廬、祭天地桃園結義)、虹梁持送(籠彫 菊、波・千鳥)、正面虹梁外側(浮彫 菊水、地紋彫 紗綾形紋様)、背面虹梁外側(浮彫 波・千鳥、地紋彫 紗綾形紋様)、虹梁その他の面(刻線形・沈彫 唐草紋様、地紋彫 紗綾形紋様)、頭貫、腰長押、鼠走、方立(地紋彫 紗綾形紋様)、木鼻(丸彫 獅子、狛、蟹)、中備嵌込彫刻(透彫 陳楠・龍、龍から逃げる人、龍、人・亀・鶴・鶴・松・波、雲鶴、雀・竹・鳩・松)、軒支輪(浮彫 菊水)、太鼓羽目(透彫 飛龍・波、雲鶴)、兎毛通(透彫 麒麟・瑞雲、鳳凰)、妻無部嵌込彫刻(透彫 瑞雲)、棟唐戸(框・棧:地紋彫 紗綾形紋様)、鏡板部:浮彫 龍)	材 質	漆、檜	



写56-20 正面



写56-21 背面



写56-22 側面組物

## 神楽殿（図56-6、表56-8、写56-23～56-25）

棟札表面には明和元甲申年(1764)11月大吉祥日と記載されているが、棟札裏面には宝曆十三癸未年(1763)5月に仙初、明和元甲申年(1764)11月造畢とある。造畢があるので、明和元年11月に建物は完成した。表面の時期と造畢の時期が同一のため上棟と棟札の関係を断定することはできない。また、表面と裏面とも工匠だけ草書で墨書きされている。

神楽殿は神に神樂を奉納するために、本殿に向かい合う位置に建ち、舞台の床の高さは本社の床の高さに合わせている。本殿のある北側は三方吹き放しの舞台であり、南側は楽屋である。建物には南の妻側から入る。入口は床下にあり、入口の近くに楽屋に上るための階段がある。階段まわりだけ拭板で、

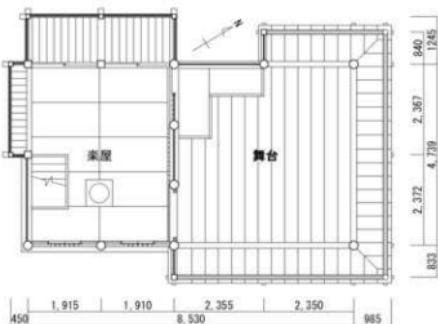


図56-6 平面図(神楽殿)

表56-8 神楽殿

建造年代／根拠	明和元年(1764)／棟札	構造・形式	正面4.73m、側面8.53m、切妻造、正面唐破風、銅板平葺
工 匠	[大工]棟梁 当山 佐藤直右衛門 [星根師] 高崎 檜皮屋嘉兵衛 [木挽] 棟梁 室田 神 宮八兵衛 [石屋]信州高遠 石屋惣右衛門	基 础 磁石(切石)	
軸 部	丸柱、八角形往、土台、頭貫、[舞台]虹梁型 頭貫 [楽屋]腰長押、内法長押(外側)	組 物 [外部]拳鼻付出三斗 [腰組]四手先組 [舞台 内]拳鼻付出三斗 [楽屋内]拳鼻付平三斗	
中 備	撥束、詰組(虹梁型頭貫部)	軒 一軒軒垂木	
妻 飾	[破風]唐破風、鰯付燕懸魚 [壁]彫刻(雷神と 瑞雲) [切妻側壁]東、貫	柱間 裝 置 繫目 [舞台]吹き放し、板戸、布羽目 [楽 屋]火灯窓、障子、舞良戸、無双窓(床下入口)	
縁・高欄・脇障子	三方切目縁、擬宝珠高欄、脇障子	床 [舞台]拭板張、疊敷(2疊) [楽屋]疊敷、炉	
天 井	[舞台]格天井 [楽屋]板張(梁表し)	須弥壇・厨子・ 宮 殿 祭壇(床置)	
塗 装	全体的に朱塗、黒塗(刻線彫部、花頭窓縁、脇 障子額縁、舞台入口樋・方立)、白(妻部彫刻 雷神・瑞雲)	飾 金 物 等 寄物 [地]高欄飾金物(地覆・平桁・架木の端部・檼東部 出八双三つ巴紋章付唐草結華紋様(架木は純金 物)、込桶部 三つ巴紋章)、擬宝珠、擬宝珠 寢巻(唐草紋様)、唐破風飾金物(破風押 三つ 巴紋章・八入双亀甲紋様、中散らし 三つ巴 紋章、破風尻 入八双亀甲紋様)	
繪 画	天井画(格天井格間 般若面、天狗面、翁面、 弧面、猿面、獅子、白沢、龍、雀、鳶、兎、梅、材 杜若等)	質 不明	
彫 刻	虹梁型頭貫(刻線彫 波)、拳鼻、絵様肘木(刻線彫 満紋様)、妻虹梁(刻線彫 唐草紋様)、妻飾力神(九形 雷神)、妻飾嵌込彫刻(透彫 瑞雲)		



写56-23 全景



写56-24 舞台



写56-25 舞台天井

床下は物置としても活用されている。舞台は拭板で祭壇まわりに2畳分の畳敷がある。楽屋は畳敷で炉がある。

類殿 (図56-7、表56-9、写56-26~56-28)

御神楽拝見所として国祖社側面に増築したものである。正面6.54m、側面2.94mの入母屋造銅板葺である。屋内は一室で、屋内と縁の床レベルが同じなので、戸を外すと平らな床面を広くすることができる。国祖社の外陣と縁へ直接に行き来でき、外陣との間は建具で仕切られている。国祖社の縁との間には現在建具はない。床面は国祖社の縁より階段2級分低い。本来は神楽拝見所だが、奉納額が多く掲げられていることから額殿と呼ばれる。

榛名山巖殿寺 役中諸用記より文化10年(1813)に上棟し、文化11年(1814)に屋根、造作が完了した。

国紹社(図56-7、表56-10、写56-29~56-31)

正面3間、側面5間の入母屋造妻入銅板平葺、一間向拝付で、東側を正面とする。向拝から縁に上がる

ると、諸折棟唐戸があり、その先は外陣、内陣、内々陣と続く。北側の縁は祈祷待合所と接続し、南側は額殿と接続する。内々陣に豊城入彦命、彦狭島命、御諸別命の三柱を祀る。神仏習合の頃は本地仏の勝軍地蔵が祀られ、本地堂と呼ばれた。外陣には



图56-7 平面图(国租社·额殿)

表56-9 頭股

建造年代／根拠	文化10年(1813)／古文書	構造・形式	正面6.54m・側面2.94m、入母屋造銅板平葺、北面国社様に接続
工 匠	不明	基 础	基礎1段(正面)
軸 部	角柱・土台、差鴨居(表面虹梁型、正面)、内法長押(屋内)、内法貫・筋交(背面、南側)、頭貫(正面、南側前方)、梁・桁(背面、南側後方)	組 物	拳鼻付平三斗
中 備	なし	軒	二軒疊垂木(正面と南面一部)、せがい造(背面と南面一部)
妻 飾	[壁面]前包、須覆、束 [破風]反り破風	柱 間 裝 置	半部、整羽目
縁・高欄・脇障子	一方博縁、擬宝珠高欄	床	拭板張
天 井	竿縁天井	須弥壇・厨子・宮殿	なし
塗 裝	全体的に黒塗、朱塗(虹梁刻線彫部、大眉部、高欄、天井板)	飾 金 物 等	擬宝珠、隅木木口八双筋金物
絵 画	なし	材 質	不明
彫 刻	虹梁型差鴨居、差肘木(刻線彫、沈影 唐草紋様)、絵様肘木	拳鼻(刻線彫、滴紋様)	



寫56-26 賴殿：國租社 正面



圖56-27 建具開放時 正面



五五-28 線

当初大炉があり、護摩が焚かれていたので、屋内には当時の煤が残る。神仏分離後に国祖社と改称。

建造年代は実肘木と彫刻（天邪鬼）の墨書きより享保10年（1725）である。棟梁は小島勘兵衛と伝わる。本地堂の時にも何度か修復等が行われており、天保12年（1841）の修復棟札が残る。棟梁は関根修理源栄房。隨神門の棟梁も関根修理と伝わる。欄間彫刻や蟇股などはこの時のものである。彫物師の新井金十郎は倉賀野神社の本殿と幣殿の彫刻にも深く関わる。

平成29年（2017）から国祖社・額殿は保存修理工事が行われ耐震化もされた。

#### 神宝殿（図56-8、表56-11、写56-32～56-34）

明治2年（1869）に完成した。「三重宝塔仕用帳」安政4年（1857）より江戸時代より建立の準備が進められていたことが分かる。三間三重塔婆である。初重屋根の四方の降り棟に置千木と堅魚木を載せる。軸部はすべて円柱で頭貫と台輪で繋ぎ腰長押と内法

表56-10 国祖社

建造年代／根据	享保10年（1725）／墨書き	構造・形式	正面3間（5.81m）、側面5間（9.21m）、入母屋造、妻入、向拝1間軒唐破風付、銅板葺
工 匠	[大工]棟梁 小島勘兵衛／社伝、《以下修復時》 [大工]棟梁 児玉郡宮内邑 関根修理源栄房 [脇棟梁]同 関根伊之助 [彫工]高崎宿 新井金十郎 [塗師]本庄 村松忠治良 [屋根師]高崎 加藤亀吉／修復棟札（天保12年（1841））	基 础	基礎1段（正面）、礎石（切石）、礎盤（向拝）
軸 部	[身舎]丸柱、土台、地貫、内法長押、頭貫、台輪、内法虹梁（正面入口部）、差鴨居（内外陣）、筋交（裏側） [向拝]角柱、水引虹梁、二重虹梁、海老虹梁	組 物	[身舎外側]拳鼻付出台輪 [向拝]出三斗 [屋内]出三斗、平三斗（内陣内々陣境）
中 備	[身舎]蟇股（外側、外陣内部）、彫刻板支輪 [向拝]嵌込彫刻、出三斗（菖蒲衝受）	軒	二軒繁垂木
妻 飾	[壁]虹梁大瓶束簷形、前包2段、力神（虹梁下中備） [破風]反り破風（眉欠2段）、若葉替付蕉懸魚、六葉、櫻口	柱 間 装 置	諸折桟唐戸、火灯窓、帯戸、障子、厨子板唐戸、布羽目、堅羽目
縁・高欄・脇障子	二方切目縁、擬宝珠高欄、登高欄付、脇障子	床	拭板張
天 井	[外陣]板迷い格天井 [内陣]竿縁天井	須弥壇、扇子、宮殿	檜
塗 装	朱塗と黒塗（全体的）、極彩色（彫刻）、素木（内陣天井）	飾 金 物 等	頭貫端部入八双鶴亀甲紋様、飛檐隅木木口入八双鶴金物、唐破風鶴金物（破風押 三つ巴紋章・猪目付入八双唐草紋様、中散 宝珠紋章、破風尻 猪目付入八双唐草紋様）、板唐戸總八双鶴金物
繪 画	なし	材 質	不明
彫 刻	[身舎]正面入口内法虹梁、内外陣境虹梁型差鴨居（刻線彫、沈影 唐草紋様）、欄間（透彫 摩伽羅、波、鳳凰、瑞雲、麒麟、瑞雲、鶴、瑞雲）、股筋脚内（透彫 猪・松、翡翠、蓮、兔、芭・鳩・松、猿・山桃、山鵬、唐松、地紋彫 繩格子紋様）、軒支輪（浮彫 菊水）、妻飾蟇股（丸彫 天邪鬼）、隅木持送（丸彫 白虎） [向拝]向拝柱（地紋彫 入子菱紋様）、木鼻（丸彫 獅子、狛、海老虹梁（刻線彫、沈影 外側：波・瑞雲、内側：唐草紋様）、水引虹梁（表：浮彫 牡丹、裏：刻線彫、沈影 杜若）、二重虹梁（刻線彫、沈影 波）、水引虹梁上嵌込彫刻・太鼓羽目（透彫 龍・波・瑞雲）、手技（籠彫 菊、丸彫 瑞雲）、兎毛通（透彫 飛龍）		



写56-29 向拝



写56-30 外陣 内観



写56-31 内陣 内観

長押を打つ。組物は各重とも三手先組である。中備は初重のみ幕股とし、脚内に透影の十二支がある。軒は初重と二重は二軒平行繁垂木とし、三重のみ二

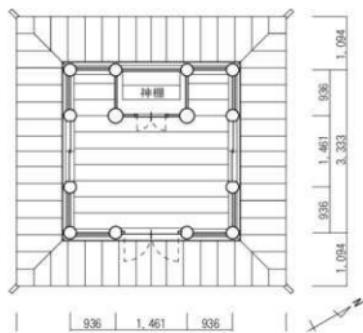


図56-8 平面図(神宝殿)

軒扇垂木である。扇垂木は県内に遺る数少ない実例の一つである。屋内は来迎柱を建て、来迎壁に相当する部分に扉をつけ、その奥に壇を造り板壁で囲み神棚とする。明治政府による神仏分離令が発せられたことにより、仏教的な建物である三重塔を単層に改修し、書庫にすべしとの達しがあったが、千木と蟷魚木を付け「五柱社」として破壊を免れた経緯がある。近世建築物としては、県内唯一の三重塔である。

卷之四

榛名神社の建物群は江戸後期の優れた建築文化を今に伝えている。表参道沿いの榛名川と周囲の奇岩と木々の中に点在する建物には存在感があり、自然と人工物の調和を体感することができる。

本社・幣殿・拝殿は精緻な彫刻と、朱塗と黒塗を

卷56-11 神宝殿

建造年代／根据		明治2年(1869)／竣工石碑	構造・形式	三間三重塔婆(3.33m)、銅板本瓦棒葺
工 匠	大工 梁 桧 規致／竣工石碑、脇梁 梁 群馬郡下栄村 小澤 熊太郎、当山 梁組頭 佐藤誠之進 「袖方」当 山 志藏／「三重宝塔再建ニ付桟梁諸書、三重 宝塔仕用帳」 [彫工]玉の井 小林／幕板裏墨 書 [彫師]高崎相生町 鈴木後久／竣工石碑	基 础	基礎	基礎1段、礎石(切石)
軸 部	丸柱、腰長押、内法長押、頭貫、台輪	組 物	[各重]三手先組(1・2手目垂木付、3手目 拳鼻付) [初重屋内]拳鼻付出組	
中 備	[初重]幕板 [初重屋内]通肘木上に斗を並べ る	軒	[初重、二重]二軒簷重木、蛇腹支輪 [三重] 二軒扇垂木、蛇腹支輪	
妻 鋸	なし	柱 間 裝 置	[初重]唐戻戸(正面中央間・開き戸、側面・引 違戸)、寄進者刻銘の羽目板(脇間) [二重、 三重]板扉(4面の中央間・開き戸)、鏡板張(脇 間)	
縁・高欄、脇障子	[初重]四方切目縁 [二重・三重]跳高欄	床	[初重]拭板張 [二重・三重]ナシ	
天 井	[初重]格天井 [二重・三重]ナシ	須弥壇・厨子・宮殿 檜		
塗 装	全体的に朱塗、黒墨塗(初重羽目板枠、格縁)、 緋彩色(幕板)、金箔(獅子鼻)	飾 金 物 等	[初重]正面扉銘金物	
絵 画	なし	材 質	杉、檜、櫻、栗、楡葉	
彫 刻	木鼻(九彌 獅子)、幕板脚内(透彫 十二支)、拳鼻、絵様肘木(刻線彫 溝紋様)			



写56-32 全骨



写56-33 一重 正面



写56-34 組物

基調として極彩色や生彩色も配する色彩構成の調和した権現造である。社殿と向かい合う位置に建つ唐破風の神楽殿、修復により優れた彫刻が施された国祖社、国祖社と一緒に神楽拝見所である額殿、四面軒唐破風、前後千鳥破風付入母屋造で隅々まで彫刻が施されている双龍門、古式の仏堂形式を踏襲している神幸殿、表参道入口に雄大な姿で建つ随神門、参道の中程に建つ朱塗で県内唯一の近世の三重塔である神宝殿神宝殿など、建物の特徴も一つ一つが異なる。多様な江戸後期の建築文化を知ることができるとともに、日本人の文化も伝えることができ

る貴重な建物群である。平成29年から本社・幣殿・拝殿、国祖社・額殿、双龍門、神楽殿の保存修理工事が行われている。

(島崎重徳)

【参考文献】

- 『榛名神社社殿（幣殿・間殿・拝殿）保存修理工事報告書』文化財建造物保存技術協会 平成16年
- 『高崎市指定重要文化財 榛名神社神宝殿（三重塔）保存修理工事報告書』町田工業 平成26年
- 『榛名神社と榛名信仰』放送大学地域社会研究会 平成4年
- 『榛名神社調査報告書』群馬県教育委員会 昭和51年

## 57 郷見神社【さとみじんじゃ】

表57-1

神社名	郷見神社	所在地	高崎市下里見町1443
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人 郷見神社
主祭神	建御名方神、月讀尊、品陀和氣尊、菅原道真	神事	春例大祭(4/9)清掃、国旗掲揚、神社の垂れ幕、祭壇、神饌品、夏越の大祓(国旗や垂れ幕はなし)、秋例祭(10/9)
創立・沿革	諸所の事情により下里見村の全ての神社が合祀され、明治43年(1910)9月19日、月読神社他三社下里見地区内の神社を合祀併し、社名を郷見神社と改め村社となった。		
文化財指定	郷見神社本殿(市重文 平成2年4月)		

位置・配置(図57-1、写57-1~57-2)

高崎市街地より北西へ約10km、下里見諏訪山古墳に位置する。国道406号線沿いから参道に入ると、両端に石碑が建ち、階段へと続く。石鳥居をくぐり右手に本殿附合祀四社殿の納まる赤い覆屋があり、正面に小さな石宮が並ぶ。ここを中段とする。左手奥には更に傾斜のきつい急階段へと進み、上り切った先には境内へとたどり着く。付近の景色が一望できるほど見晴らしが良い。参道から北西に向かって拝殿、本殿覆屋がある。建物裏面には円形の諏訪山古墳が見える。

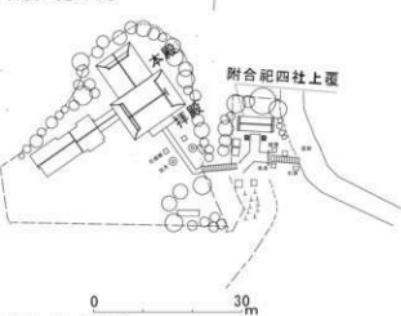


図57-1 配置図



写57-1 境内全景

由来および沿革

この地は諏訪山古墳と呼ばれ崇神天皇の子孫の墓陵ともいわれている。この為、敷地全体が山であり、本殿のある覆屋などの建物は、頂上にあたる部分を切土整地し、建造したという。本殿の祭神は建御名方神・月讀尊・品陀別命・菅原道真が祀られている。明治43年(1910)に下里見地区の神社を合祀併し、郷見神社と改める。中段の四社殿覆屋には合祀社殿である八幡宮、月読神社、諏訪神社、天満宮の社殿が祀られており、本殿と共に市指定重要文化財となっている。春例大祭(4/9)、秋例祭(10/9)では、清掃、国旗掲揚を行っている。

本殿 (Main Shrine) (図57-2、表57-2、写57-3~57-8)

再建棟札より建造年は安政7年(1860)とあるが、建築様式も、正面の水引虹梁上部には彫刻が充填され、透かし彫りの海老虹梁、浮き彫りの唐草絵様、籠彫手鉄など、彫刻を多様化し、当時の特徴をよく現わしている。正面1間側面1間の流造平入で、正面に千鳥破風をつけ、屋根は柿葺で上から鉄板を被せる。前流れの屋根が延びて向拝をなし、先端にはやや深めの唐破風をつける。向拝柱は三方地景彫りで、虹梁型頭貫を掛け、龍の彫刻が巻き付いた海老



写57-2 合祀四社上蓋

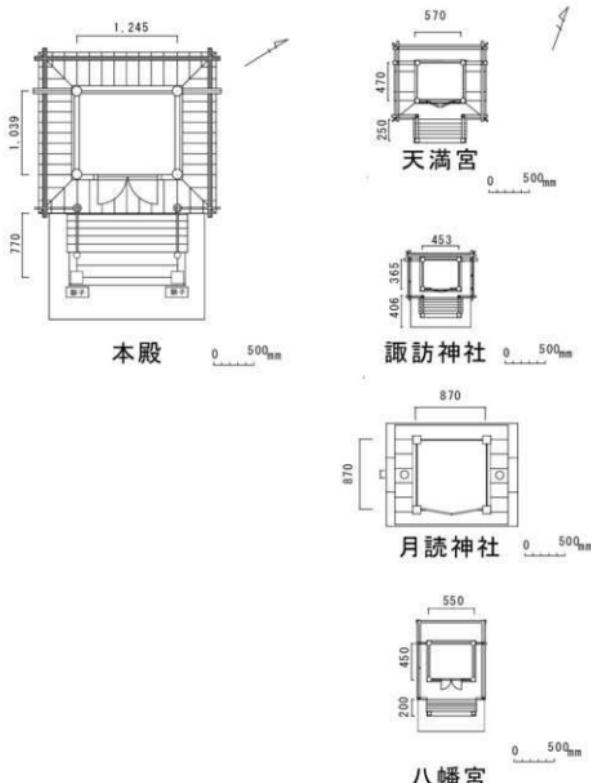


図57-2 平面図(本殿附合紀社殿四棟)

表57-2 本殿

建造年代／根拠	安政7年(1860)／棟札	構造・形式	一間社流造(1.25m)、側面1間(1.03m)、千鳥破風付向拝1間唐破風付柿葺(鉄板皮葺)
工 匠	[大工]:[大工棟梁]清水和泉藤原充賢 山田隼人正藤原忠時 彫刻:小林源太郎(棟札)	基 础	切石5段、基壇、亀腹
軸 部	[身舎]丸柱 地長押 差鴨居 頂貫 [向拝]方柱 水引虹梁 海老虹梁	組 物	[腰組]出三斗 [身舎]三手先 [向拝]連三斗
中 備	[腰組]詰組 [身舎]幕股、大瓶束	軒	二軒繁垂木
妻 飾	猪目懸魚(ひれ付)虹梁 兔毛通 大瓶束 木幕股 三花懸魚	柱 間 装 置	[身舎正面]両開き板戸
縁・高欄・脇障子	四方切目縁高欄、擬宝珠高欄、登高欄 腰組付 脇障子有	床	[外陣]拭板張
天 井	不明	須弥壇・扇子・宮鏡	なし
塗 裝	朱塗(唐破風) 唐破風兔の毛通 向拝彫刻 木鼻獅子)	飾 金 物 等	八双金具 丸桁小口塞ぎ
繪 画	なし	材 質	檜
彫 刻	[身舎外部]扉 脇龍扉 下(波) 中備間充填	[地長押] [腰長押] [内法長押](地紋彫) [侧面]唐子 [手鉄]籠彫 [背面]鳥 [脇障子]鶴[木鼻]獅子 [妻虹梁]絵様 [軒支輪]花 [唐破風兔毛通]堆	



写57-3 本殿 全景



写57-4 本殿 虹梁背面



写57-5 本殿 屋根・垂木・組物



写57-6 本殿 側面彫刻



写57-7 本殿 海老虹梁



写57-8 本殿 腰組

虹梁で身舎とつなぎ、先端の木鼻は正面が獅子、側面には摸がつく。千鳥破風の裏には籠形の手鉄をつける。外部内法長押や身舎丸柱にも地紋彫がみられる。四方切目縁を廻し、脇障子を立てる。

#### 八幡宮 (图57-2、表57-3、写57-9～57-10)

正面1間侧面1間の流造、柿葺。千鳥破風と、軒唐破風をつけて特徴的な屋根の形状をしている。建

造年は、全体的に彫刻が施されており、脇障子の柱も地紋彫がされている事や、本殿その他三棟の建物などの状態を鑑みた場合の建築様式からは、江戸後期と考えられる。また、「里見村誌」には「八幡宮様 表口 一尺九寸御宮一社 右注文ノ所木口細工料…安永八亥年正月二十九日」と、安永8年(1779)の「請負証文」が載せられている事から、およそこの時期に請負の契約がされたとも推測される。

表57-3 八幡宮

建造年代／根拠	18世紀後期／建築様式	構造・形式	一間社隅木入春日造(0.55m)、側面1間(0.45m)、両側面千鳥破風付向拝1間唐破風付柿葺
工 匠	不明	基 磐	なし
軸 部	「身舎」丸柱 内法長押 [向拝]角柱 手鉄	組 物	「身舎」出三斗 [向拝]出三斗
中 備	「身舎」簷股	軒	二軒蟻垂木
妻 飾	「身舎」笈形付大瓶束	柱 間 裝 置	正面両開板戸
締・高欄・船頭子	四方博縁・腰組付高欄(破損) 脇障子	床	拭板
天 井	未確認	須弥壇・屏子・宮殿	なし
塗 装	木負、裏甲 朱塗	飾 金 物 等	鬼板 地長押 緑長押 台輪 木口金具
絵 画	なし	材 質	桧・櫛・杉
彫 刻	「身舎」軒支輪、脇障子、兎毛通		



写57-9 八幡宮



写57-10 八幡宮 側面



写57-11 月読神社 神明造

表57-4 月読神社

建造年代／根拠	19世紀中期	構造・形式	神明造、正面0.87m、側面0.87m、向拝無、平入、板葺
工 匠	不明	基 础	なし
軸 部	[身舎]角柱 捩立柱	組 物	連三斗
中 備	なし	軒	一間繁垂木
妻 飾	なし	柱 間 装 置	両開板戸
縁・高欄・脇障子	なし	床	拭板張
天 井	井 板	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	なし	飾 金 物 等	なし
繪 画	なし	材 質	桧、杉
彫 刻	なし		

月読神社（図57-2、表57-4、写57-11）

平入の神明造で側面に掘立柱がつく。古い構造形式の簡素な造りであるが、掘立柱の先端は大床の部分までとしている点や階段が無い事、更に比較的保存状態が良好で破損部分も少ない点や他の3棟の建物などと比較してみてもおおよそ19世紀中期の建造と推定される。なお、「里見村誌」によると、社殿増築前の元宮といわれる石宮に「寛永9年(1632)11月清水祖右衛門」と刻されていることからも、社殿の建造は、これ以降と考えられる。

諏訪神社（図57-2、表57-5、写57-12～57-13）

正面1間側面1間の一間社流造。切妻の屋根に千鳥破風をつけ、向拝に軒唐破風をつける。建造年は不明であるが、社殿全体に彫刻が施されており、特に妻側側面の透かし蔓股には、動物と波が一体となり、羽をもつ動物のように描かれている。海老虹梁にはそれぞれ龍が巻き付いているが、正面右側の海老虹梁には龍の3本の爪が虹梁にしっかりと巻き付いている、精巧な技術で描かれている事がみられる貴重な建築物であるが、大工、彫刻など工匠も不明である。

表57-5 諏訪神社

建造年代／根拠	江戸中期～後期	構造・形式	一間社流造(0.45m)、側面1間(0.37m)千鳥破風付、向拝1間軒唐破風付柿葺
工 匠	不明	基 础	なし
軸 部	[身舎]丸柱 地長押 長押 頭貫 [向拝]角柱 水引虹梁 海老虹梁	組 物	[身舎]三手先
中 備	[身舎]蔓股	軒	一間繁垂木 支輪
妻 飾	猪目懸魚	柱 間 装 置	両開板戸
縁・高欄・脇障子	四方博縁、振宝珠付高欄(破損)、脇障子 有(枠のみ)	床	板
天 井	井 不明	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	[身舎]素木、垂木、鹿甲 朱塗 [向拝]素木	飾 金 物 等	なし
繪 画	なし	材 質	檜
彫 刻	[身舎]外部 虹梁、海老虹梁 懸魚、支輪(紅葉、波)、彫刻(獅子)、蔓股(花、鳥)、長押(地紋) [向拝]柱(地紋彫)、海老虹梁(龍)、水引虹梁(花)、木鼻(獅子、龍、狛犬)、手鉄(獅子、象)、兎毛通		



写57-12 諏訪神社



写57-13 諏訪神社 側面 東



写57-14 天満宮 地紋彫 向拝柱

表57-6 天満宮

建造年代／根拠	19世紀前半／建築様式	構造・形式	一間社流造(0.57m)、側面(0.47m)、千鳥破風付向拝1間軒唐破風付桧板葺
工 匠	不明	基 础	なし
軸 部	[身舎]丸柱、地長押、長押、頭貫 [向拝]角粗物	軒 物	[身舎]三手先
中 備	[身舎]幕股	軒	二軒簷垂木
妻 飾	二重虹梁大瓶束、2つ花懸魚	柱 間 装 置	両開板戸
縁・高欄・脇障子	四方切目縁高欄、擬宝珠付	床	板
天 井	不明	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 裝	[身舎]素木、芽負、朱塗 [向拝]素木	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質 摩	
彫 刻	[身舎外部]虹梁、懸魚、支輪(絵様)、彫刻(獅子)、長押(地紋彫)、板戸(梅紋)、側面(花)幕股(梅)背面(鶴、梅)[向拝]柱、地長押、縁長押(地紋彫)、海老虹梁(波)、水引虹梁(花)、手鉄(花)		

## 天満宮 (図57-2、表57-6、写57-14)

正面1間側面1間の一間社流造。入母屋の前に千鳥破風をつけ、向拝に軒唐破風屋根をつける。建造年は棟札等資料が無く詳らかでないが、桐生天満宮に比べて造りが簡素であり、江戸中期～後期であると推定される。屋根形状は北野天満宮の八棟造を意識しているようである。軸部は丸柱で向拝は地紋彫の角柱に虹梁型頭貫を掛け、海老虹梁で身舎丸柱とつなぎ、手挾をつける。

全体的に花や波などの精巧な彫刻が描かれており、細部も繊細に描かれている。優美さを感じさせる建造物である。一部の破損箇所はあるが、保存状態は良好である。

## まとめ

本殿は棟札が残され、建造には棟名神社双龍門の建造と同じ工匠で、彫刻は長谷川源太郎である。建

造年の流れから双龍門の建造後に本殿の再建にあたったと思われる。龍の彫刻や透かし幕股は目を引くものがあるが、特に側面の彫刻は父親と子供を避けるように虎が背を向けている姿が描かれている。また、腰組下にも木鼻の花の彫刻など全体的に彫刻を多様化している。更には内法長押、脇障子の柱等の軸部にも地紋彫がみられる事や正面頭貫の若葉の唐草絵様などの彫刻も18世紀から19世紀の特徴を良く現わしており、見どころにあふれている。江戸後期の重要な建築物である。

中段の合祀社殿に納まる4棟の社殿も、神明造や流造などの社殿が保存されている。

(堤 雅之)

## 【参考文献】

『棟名町の文化財』 棟名町役場 平成7年

『郡見神社由緒略記』 平成18年

『里見村誌』 里見村誌編纂委員会 昭和35年

## 58 榛名木戸神社（はるなきどじんじゃ）

表58-1

神社名	榛名木戸神社	所在地	高崎市本郷町644
旧社格	無格社	所有者・管理者	宗教法人 榛名木戸神社
主祭神	上野山姫神及び火産靈神	神事	年2回の祭事は決まっているが日取りは確定していない。春祭(3/15頃)、秋祭(10/10頃)。
創立・沿革	文献『上野名跡誌神名帳』より、從四位上榛名木戸明神とあり創建より千余年を経ている		
文化財指定	榛名木戸神社本殿(市重文 昭和57年4月)		

## 位置・配置（図58-1、写58-1）

高崎市街地より、榛名町へぬける県道29号線の途上、県道より一段上に上がった住宅地の中にある。高崎市へ合併後も字名は本郷。境内は木立に囲まれた環境の中にあり、石造の鳥居をくぐれば社殿は敷地中央にある。拝殿、幣殿、及び本殿の覆屋は一体となっている。本殿調査では拝殿から上がり幣殿を

抜けて、氏子総代さんの力を借りて、重い扉をはずしてからの参拝である。

境内の鳥居から南へ約百mのところにも石の鳥居が見える。その間は神社の駐車場となっているが、本来は本神社の参道と思われる。



写58-1 境内(拝殿)

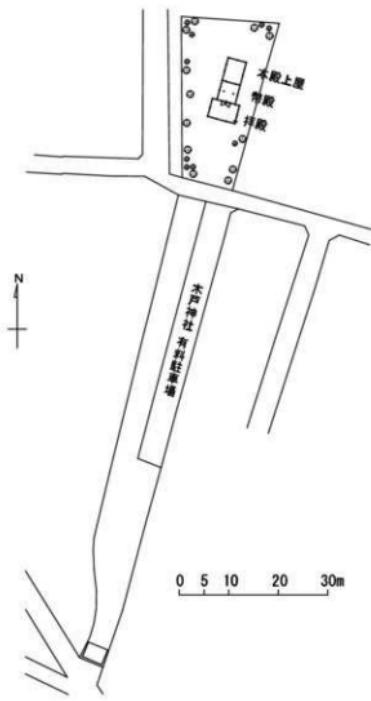


図58-1 配置図



図58-2 平面図(全体)

## 由来および沿革

棟名木戸神社は元、棟名明神の分霊である。当国惣社明神所蔵の神明帳に群馬西部の部に從四位棟名木戸明神とあり、また上野名跡誌神明帳に從四位上棟名木戸明神とあるのが当神社。その創建よりすでに千余年経っている。中世の戦乱期にはしばしば兵火にあったが、嘉吉元年(1441)村民がこれを再建したとの記述(『棟名町誌 神社仏閣』)も観られるが、現在本殿の建築様式から、現存の本殿とは思えない。

ほんてん  
本殿(図58-2、58-3、写58-2、58-3、58-4、58-7)

本殿は拝殿、幣殿に接続する覆屋の中にある。正面が南向きの一間社流造(0.916m)、側面(0.78m)、千鳥破風付、向拝1間軒唐破風付。柿葺、身舎周浜縁は一对の脇障子を持つ擬宝珠高欄。切目縁の四方縁である基礎は切石、亀腹の上、土台、浜床下三手先出組。身舎の軸部は丸柱、内法長押、頭貫木鼻は獅子頭。向拝は角柱、水引虹梁、海老虹梁、手挾、柱正面木鼻は獅子頭、柱側面は象鼻。棟股は

龍の彫刻で棟股の原型は見当たらない。本殿内部は一部屋。床は拭板張、天井は改修の時期は不明だがベニヤ張り、中備は三手先出組尾垂木。軒は二軒繁垂木で、妻飾は二重虹梁大瓶束である。

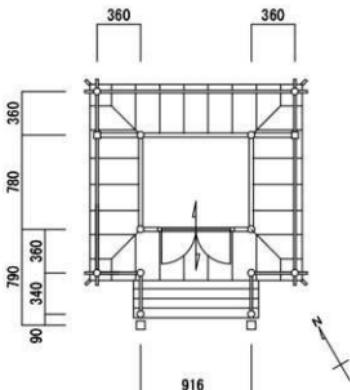


図58-3 平面図(本殿)

表58-2 本殿

建造年代／根据	19世紀中期／建築様式	構造・形式	一間社流造(0.916m)、側面1間(0.78m)、千鳥破風付、向拝1間軒唐破風付、柿葺
工 匠 不明		基 碇	地覆石、亀腹
軸 部	[身舎]丸柱、内法長押、頭貫(木鼻)獅子 [向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁、手挾、木鼻(象)(獅子)	組 物	[身舎]外部、出三斗 [腰組]三手先 [向拝]出三斗
中 備	[身舎]外部、木鼻、棟股 [向拝]拳鼻付出三斗、鼈物	軒	二軒繁垂木
妻 飾	二重虹梁大瓶束、慈魚、幕股、支輪	柱 間 裝 置	板戸、両開戸 側面背面:板壁、後面:板壁
縁・高欄、脇障子	四方縁(切目縁)、擬宝珠高欄、平行、地覆(水継欠)、架木、桶束、斗束	床	拭板張
天 井	改修後の天井(ベニヤ)	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木	飾 金 物 等	板戸前面:花模様、長押:長押金物
絵 画	なし	材 質	櫛
影 刻	[身舎]正面、側面(両側)、及び背面 [向拝]紅梁、手狹、海老虹梁		



写58-2 本殿 正面



写58-3 本殿 中備



写58-4 向拝 唐破風および屋根



写58-5 向拝 手挾海老紅梁



写58-6 妻飾



写58-7 本殿 内部

彫刻は本殿の正面、背面、両側面、および脇障子に浮彫で余すところなく施され、向拝1間軒、唐破風鬼毛通、向拝の海老虹梁、手挾の彫刻は籠彫と思われる。本殿の建立時期は建築様式から19世紀中期と推測される、拝殿は正面3間(5.66m)、側面2間(4.00m)で、屋根は切妻瓦葺。幣殿は本殿と同じ覆屋の幅で接続している。拝殿と幣殿との境にある扉が閉まっていると拝殿からの本殿参拝は難しい。

#### まとめ

小形社殿で、江戸後期以後に普及した装飾建築の特徴をよく見ることができる。当建物の建立時期は

様式から推定して、江戸時代の後期（19世紀中頃）とした。

当神社は『上野国神明帳』には從四位棟名木戸明神と記載され、『上野国名跡誌神明帳』には從四位上棟名木戸明神と記載されている。

(城田富志夫)

#### 【参考文献】

『上野国神社明細帳7』平成15年

『群馬県百科事典』昭和54年

『棟名町誌 民俗編』棟名町誌編纂委員会 平成23年

『群馬県の地名』昭和62年